佐賀県文化財調査報告書第124集

佐賀県農業基盤整備事業に係る
文化財調査報告書 13

１９９５年３月

佐 賀 県 教 育 委 員 会

『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書１３』正誤表

	誤		正
73ページ	図版説明の4.SK236遺物出工状況		4.SK236遺物出土状況
82ページ	図版説明の5及び8	金景	全景
85ページ	図版説明の5	ＳＹ03	ＳＴ03

87ページ及び89ページの図版のうち、両図版の中段及び下段のもの入れ替え

（87ページの中段→89ページの中段

87ページの下段→89ページの下段

89ページの中段→87ページの中段

89ページの下段→87ページの下段）

96ページ	所在地のうちＴＥＬ．0942(24)2111	0952(24)2111

佐賀県農業基盤整備事業に係る
文化財調査報告書　13

１９９５年3月

佐 賀 県 教 育 委 員 会

はじめに

この報告書は、佐賀県農業基盤整備事業等の施行に先立ち実施した、埋蔵文化財の確認調査の結果をまとめたものです。

本県には先史時代以降の遺跡が多数存在しており、その密度の高さと重要性は全国的にも注目されております。

県教育委員会では、これらの貴重な文化財の保護と農業等を営む方々の生活基盤を整備する事業との調整を図るため、文化財の確認調査と記録の保存を進めております。

今回、平成６年度農業基盤整備事業等施行予定地区について文化財確認調査を行った結果、太古から江戸時代にわたる各時代の遺跡が確認されました。

本書の内容を学術資料として、また重要な文化財を県民の共有財産として大切に保存していくための資料として役立てていただければ幸いです。

この調査にあたって、文化庁、県農林部、県農村農地整備局、各市町村教育委員会・土地改良担当課並びに地元関係各位の深い御理解と御協力に対し、心からお礼申し上げます。

平成７年３月31日

佐賀県教育委員会

教育長　林　田　重　人

例　　言

1．本書は、国庫補助を受け平成５年度に確認調査を実施した佐賀県農業基盤整備事業等に伴う文化財調査報告書である。

2．調査は市町村教育委員会の協力を得て、佐賀県教育委員会が行った。

3．トレンチの位置図、遺構の実測、写真撮影は調査員が行った。

4．遺物の実測・製図・報告書作成作業は、佐賀県文化財課（神埼事務所）で行った。

・遺物整理……中島美須三・田中ハルミ

・図面整理・遺物等実測……山口美佐子・江島美恵子・谷口加代子・真子由美子

・地図等製図……三好文子

5．本書の執筆は下記の分担で行った。

Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ－１～５、Ⅳ－17、Ⅴ……徳富則久

Ⅲ－６……川副麻理子

Ⅳ－１・２……石橋新次

Ⅳ－３～８……太田　睦

Ⅳ－９……鶴田浩二

Ⅳ－10……原田大介

Ⅳ－11……堤　安信

Ⅳ－12……山口一郎

Ⅳ－13……前田達男

Ⅳ－14・15……角信一郎

Ⅳ－16……永田稲男

Ⅳ－18……小松　譲

Ⅳ－19……田島龍太

Ⅳ－20……仁田坂聰

6．本書の編集は徳富則久が担当した。

7．本書に用いた方位は、原則として座標北とし、磁北を用いた場合はその旨を記した。

8．挿図中の■は遺構・遺物が確認された試掘溝、□は遺構・遺物が確認できなかった試掘溝、－－－は想定される遺跡の広がりを示す。

目　　次

Ⅰ．調査に至る経過 …… 1

1．平成６年度農業基盤整備事業等に伴う文化財確認調査…… 1

(1)　農業基盤整備事業等に係る協議…… 1

(2)　文化財確認調査…… 1

(3)　開発と文化財保護に係る協議…… 1

Ⅱ．調査組織 …… 2

Ⅲ．平成５年度文化財確認調査の内容 ……11

1．佐賀東部地区の調査……11

(1)　鳥栖市……12

(2)　中原町……16

(3)　上峰町……18

(4)　千代田町……21

2．佐賀西部地区の調査……23

(1)　佐賀市……24

(2)　川副町……32

(3)　多久市……33

(4)　小城町……34

(5)　三日月町……34

(6)　富士町……36

3．佐賀南部地区の調査……37

(1)　武雄市……37

(2)　有明町……38

4．佐賀北部地区の調査……39

(1)　西有田町……40

(2)　相知町……40

(3)　浜玉町……40

5．佐賀上場地区の調査……42

(1) 玄海町……43
(2) 肥前町……43
(3) 呼子町……43
6．筑後川下流用水事業に係る調査……44
(1) 佐賀東部導水路（城原川以西）……44
(2) 佐賀東部導水路（城原川以東）……44

IV．平成５年度発掘調査の概要……46

1．牛原前田遺跡……46
2．立石遺跡……48
3．山田古墳群……50
4．若宮八幡神社遺跡……52
5．西寒水四本柳遺跡……54
6．西寒水七本柳遺跡……56
7．孫左エ門塚遺跡……58
8．石井一本松遺跡……60
9．八藤遺跡……62
10．八藤遺跡……64
11．本村五本柳遺跡……66
12．野田遺跡……68
13．友貞遺跡……70
14．大西屋敷遺跡……72
15．渕遺跡……74
16．土生Ａ遺跡……76
17．勇猛山遺跡……78
18．龍王峠古墳群……84
19．梨川内村前遺跡……86
20．枝去木山中遺跡……88

V．総　括……90

挿図目次

図1　平成5年度　農業基盤整備事業等に伴う文化財調査地区位置図……5～6
図2　佐賀東部地区周辺地形図……11
図3　鳥栖北部地区試掘坑配置図(1)……13
図4　鳥栖北部地区試掘坑配置図(2)……14
図5　鳥栖西部地区試掘坑配置図……15
図6　中原北部地区試掘坑配置図……17
図7　中原南部地区試掘坑配置図(1)……19
図8　中原南部地区試掘坑配置図(2)……20
図9　佐賀東部地区千代田工区試掘坑配置図……22
図10　佐賀西部地区周辺地形図……23
図11　久保泉南部地区試掘坑配置図……25
図12　金立北部地区試掘坑配置図……27
図13　金立南部地区試掘坑配置図……28
図14　巨勢地区試掘坑配置図(1)……30
図15　巨勢地区試掘坑配置図(2)……31
図16　西ノ谷地区試掘坑配置図……35
図17　石木地区試掘坑配置図……36
図18　佐賀南部地区周辺地形図……37
図19　深浦地区試掘坑配置図……38
図20　佐賀北部地区周辺地形図……39
図21　佐賀上場地区周辺地形図……42
図22　佐賀東部導水路（三田川中部地区）試掘坑配置図……45
図23　牛原前田遺跡位置図……46
図24　立石遺跡位置図……48
図25　山田古墳群位置図……50
図26　若宮八幡神社遺跡位置図……52
図27　西寒水四本柳遺跡位置図……54
図28　西寒水七本柳遺跡位置図……56
図29　孫左エ門塚遺跡位置図……58
図30　石井一本松遺跡位置図……60

図31　八藤遺跡位置図……62
図32　八藤遺跡位置図……64
図33　本村五本柳遺跡位置図……66
図34　野田遺跡位置図……68
図35　友貞遺跡位置図……70
図36　大西屋敷遺跡位置図……72
図37　渕遺跡位置図……74
図38　土生Ａ遺跡位置図……76
図39　勇猛山遺跡位置図……78
図40　勇猛山遺跡平面図……82～83
図41　龍王峠古墳群位置図……84
図42　梨川内村前遺跡位置図……86
図43　枝去木山中遺跡位置図……88

写真図版目次

写真図版１　牛原前田遺跡……47
写真図版２　立石遺跡……49
写真図版３　山田古墳群……51
写真図版４　若宮八幡神社遺跡……53
写真図版５　西寒水四本柳遺跡……55
写真図版６　西寒水七本柳遺跡……57
写真図版７　孫左エ門塚遺跡……59
写真図版８　石井一本松遺跡……61
写真図版９　八藤遺跡……63
写真図版10　八藤遺跡……65
写真図版11　本村五本柳遺跡……67
写真図版12　野田遺跡……69
写真図版13　友貞遺跡……71
写真図版14　大西屋敷遺跡……73
写真図版15　渕遺跡……75
写真図版16　土生Ａ遺跡……77
写真図版17　勇猛山遺跡……81～83
写真図版18　龍王峠古墳群……85
写真図版19　梨川内村前遺跡……87
写真図版20　枝去木山中遺跡……89

表　目　次

表１　農業基盤整備事業等施行予定地区内文化財確認調査一覧表（平成５年度）……７～８
表２　平成５年度発掘調査遺跡一覧表……９～10

Ⅰ．調査に至る経過

1．平成６年度農業基盤整備事業等に伴う文化財確認調査

(1) 農業基盤整備事業等に係る協議

県農林部と県文化課が昭和53年４月に締結し、昭和59年４月に一部改正した「農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財の保護に関する確認事項」に基づいて、平成５年９月に平成６年度農業基盤整備事業施行計画について事業担当部局から文化財保護担当部局へ協議が求められた。平成６年度工事地区のうち踏査・文化財確認調査の対象となった地区は、佐賀東部地区（鳥栖市・中原町・北茂安町・上峰町・神埼町・三田川町・千代田町・三瀬村・脊振村）124.9ha、佐賀西部地区（佐賀市・川副町・多久市・小城町・三日月町・富士町）230.2ha、佐賀南部地区（武雄市・北方町・大町町・有明町・塩田町・嬉野町）21.9ha、佐賀北部地区（伊万里市・西有田町・相知町・浜玉町・厳木町・七山村）75.0ha、佐賀上場地区（唐津市・玄海町・肥前町・呼子町）34.8haの合計486.8haである。施行主体は九州農政局上場農業水利事業所・伊万里開拓事業所所管の国営、佐賀県農村農地整備局所管の県営、市町村所管の団体営事業に区分される。また、水資源開発公団所管の筑後川下流用水事業に伴う協議（佐賀市・三田川町）もなされた。

(2) 文化財確認調査

協議された設計図について現地踏査などの結果をもとに検討を行い、遺跡の存在が予測され確認調査が必要と認められた地区（表１）について、当該市町村の教育委員会・土地改良担当課、県農林部、県農村農地整備局との第１回目の合同四者協議会を県教育委員会が主催して10月13日に開催した。

その協議会での合意に従って文化財確認調査を原則として稲刈りが終了する10月下旬から麦の作付けが始まる12月上旬までの間に行ったが、上物の状況によっては適当な時期に調査を行った。確認調査は原則として、２×２ｍの試掘坑を20ｍ間隔で碁盤目状に設定し、埋蔵文化財の有無、性格、広がりなどを調査した。

(3) 開発と文化財保護に係る協議

確認調査の結果をもとに詳細な遺跡分布図を作成した。確認された遺跡は、佐賀東部地区138,000㎡、佐賀西部地区93,909㎡、佐賀南部地区130㎡、佐賀北部地区、佐賀上場地区では遺跡の存在は確認できず、計232,039㎡であった。この結果をもとに関係市町村教育委員会が主体となって個別協議が行われ、12月18日に第２回目の合同四者協議会を開催し、平成６年度の事業計画と埋蔵文化財保護との最終的な調整がなされた。これによって、平成４年度以前確認調査分、平成７年度以降工事施工分を調整し、平成６年度工事施工分となった遺跡の大部分は盛土工法など設計変更によって遺跡を保存することとなり、残る61,302㎡については平成６年度に発掘調査を実施して記録保存を図ることになった。

平成５年度に市町村教育委員会が実施した発掘調査（表２）は、平成４年度に同様な過程で確認調査を実施し、農業基盤整備事業担当部局との協議をへた結果、記録保存で対応することとなったものである。

II．調査組織

1．調査主体

佐賀県教育委員会

2．総括

局長　高島　忠平　県文化財課長

次長　瀬戸　明廣　県文化財課長補佐　　中牟田賢治　県文化財課長補佐

3．庶務

永松　和久　県文化課庶務企画係長　　鷲崎　義彦　県文化課庶務企画係

濱野　清子　県文化課庶務企画係　　池田　　学　県文化課庶務企画係

4．調査

調査主任　天本　洋一　県文化財課指導係長

調査員	森田　孝志	県文化財課指導係	陣内　康光	鳥栖市教育委員会
	徳富　則久	県文化財課指導係	高塚　啓介	多久市教育委員会
	小松　　譲	県文化財課指導係	原田　保則	武雄市教育委員会
	細川　金也	県文化財課指導係	堤　　安信	千代田町教育委員会
	川副麻理子	県文化財課調査係	太田　　睦	中原町教育委員会
	市川　浩文	県文化財課調査係	古庄　秀樹	小城町教育委員会
	福田　義彦	佐賀市教育委員会	永田　稲男	三日月町教育委員会
	前田　達男	佐賀市教育委員会	藤井　浩司	肥前町教育委員会
	西田　　巌	佐賀市教育委員会	有光　宏之	玄海町教育委員会
	角　信一郎	佐賀市教育委員会	宮崎　光明	西有田町教育委員会
	石橋　新次	鳥栖市教育委員会		

5．調査協力

佐賀市教育委員会	脊振村教育委員会	相知町教育委員会
唐津市教育委員会	三瀬村教育委員会	肥前町教育委員会
鳥栖市教育委員会	中原町教育委員会	玄海町教育委員会
多久市教育委員会	北茂安町教育委員会	呼子町教育委員会
伊万里市教育委員会	上峰町教育委員会	西有田町教育委員会

武雄市教育委員会　小城町教育委員会　北方町教育委員会
川副町教育委員会　三日月町教育委員会　大町町教育委員会
富士町教育委員会　浜玉町教育委員会　有明町教育委員会
神埼町教育委員会　七山村教育委員会　塩田町教育委員会
千代田町教育委員会　厳木町教育委員会　嬉野町教育委員会
三田川町教育委員会

九州農政局上場農業水利事業所
九州農政局伊万里開拓事業所
水資源開発公団筑後川下流用水建設所
佐賀中部農林事務所
鳥栖農林事務所
武雄農林事務所
鹿島農林事務所
伊万里農林事務所
唐津農林事務所
各市町村土地改良担当課
地元各位

6．調査指導

木下　良　元國學院大学教授

なお、上峰町太古木の確認調査については、次の方々の指導を受けた。

光谷　拓実　奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター
那須　孝悌　大阪市立自然史博物館
下山　正一　九州大学
西田　民雄　佐賀大学

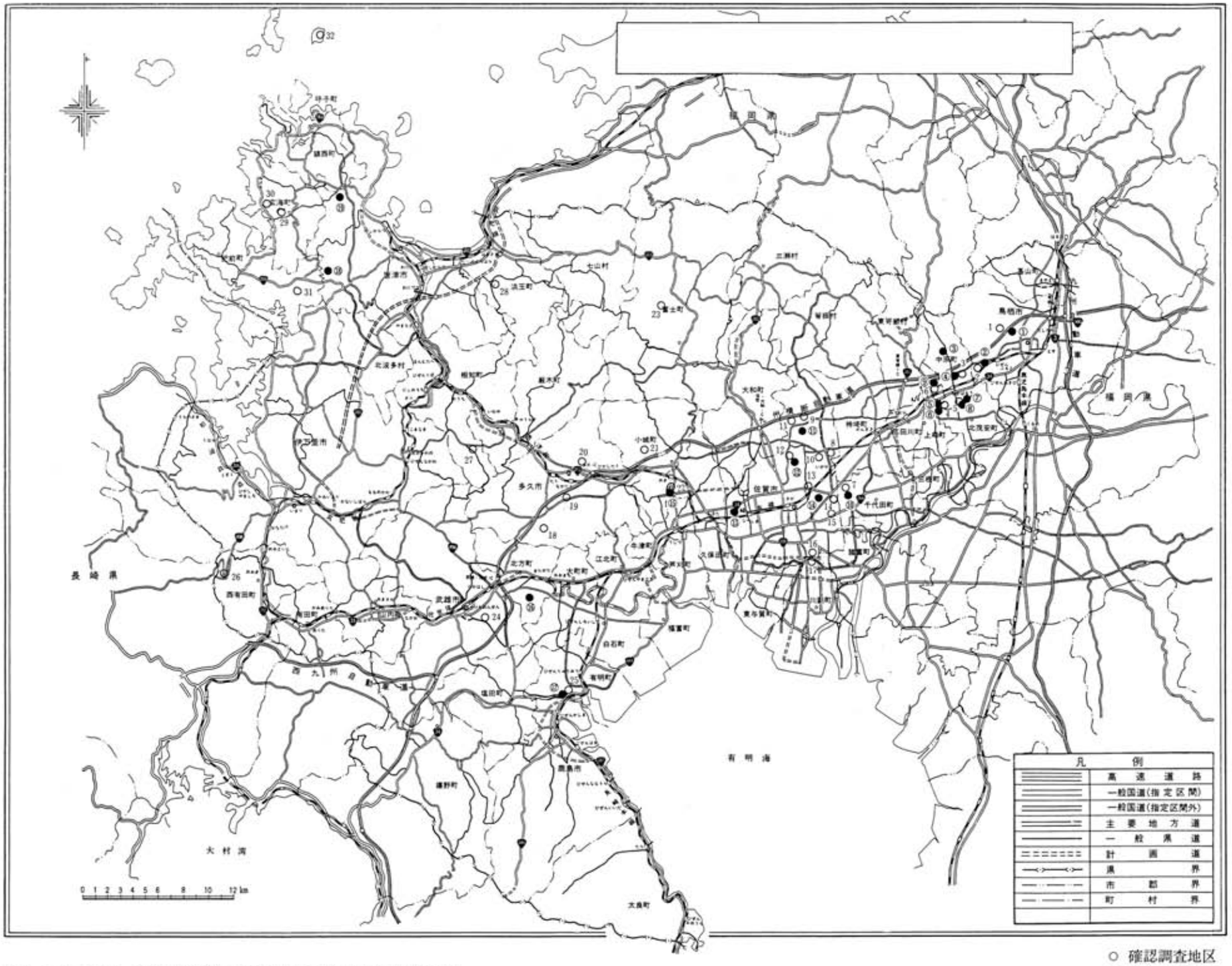


図1　平成5年度　農業基盤整備事業等に伴う文化財調査地区位置図

	確認調査地区	発掘調査遺跡
佐賀東部	1．鳥栖市（鳥栖北部地区）	①牛原前田遺跡
	2．〃（鳥栖西部地区）	②立石遺跡
	3．中原町（中原北部地区）	③山田古墳群
	4．〃（中原南部地区西寒水）	④若宮八幡神社遺跡
	5．〃（中原南部地区石井）	⑤西寒水四本柳遺跡
	6．上峰町（上峰北部地区）	⑥西寒水七本柳遺跡
	7．千代田町（千代田工区）	⑦孫左エ門塚遺跡
佐賀西部	8．佐賀市（久保泉東部地区）	⑧石井一本松遺跡
	9．〃（久保泉西部地区）	⑨八藤遺跡
	10．〃（久保泉南部地区）	⑩本村五本柳遺跡
	11．〃（金立北部地区）	⑪野田遺跡
	12．〃（金立南部地区）	⑫友貞遺跡
	13．〃（兵庫南部地区）	⑬大西屋敷遺跡
	14．〃（兵庫西部地区）	⑭渕遺跡
	15．〃（巨勢地区）	⑮土生A遺跡
	16．〃（北川副地区）	⑯勇猛山遺跡
	17．川副町（川副北部地区）	⑰龍王峠古墳群
	18．多久市（西原地区）	⑱梨川内村前遺跡
	19．〃（西ノ谷地区）	⑲枝去木山中遺跡
	20．〃（原口地区）	
	21．小城町（小城地区）	
	22．三日月町（石木地区）	
	23．富士町（富士北部地区）	
佐賀南部	24．武雄市（武雄南部地区）	
	25．有明町（深浦地区）	
佐賀北部	26．西有田町（国見地区）	
	27．相知町（平山上地区）	
	28．浜玉町（浜崎南部地区）	
佐賀上場	29．玄海町（有浦上地区）	
	30．〃（大瀬地区）	
	31．肥前町（中浦地区）	
	32．呼子町（小川島）	

表１　農業基盤整備事業等施行予定地区内文化財確認調査一覧表（平成５年度）

地区	市町村名	工事地区名	所在地	確認調査対象面積	調査結果	担当者	備考
佐賀東部	鳥栖市	鳥栖北部	鳥栖市牛原町	4.4	古代～中世集落跡	石橋	四阿屋遺跡
		鳥栖西部	鳥栖市立石町	11.7	古代集落跡	陣内	惣栗遺跡
	中原町	中原北部	中原町大字糞原	8	中世集落跡	太田	前田原遺跡ほか
		中原南部　西寒水	中原町大字原古賀	16	弥生時代集落跡・墓地	森田	西寒水七本柳遺跡
		中原南部　石井	中原町大字原古賀	11	遺跡は確認されなかった	森田	
	上峰町	上峰北部	上峰町大字堤	5.5	太古木	原田・小松	八藤遺跡
	千代田町	千代田	千代田町大字境原	58	近世集落跡	堤	本村五本柳遺跡
佐賀西部	佐賀市	久保泉東部	佐賀市久保泉町大字下和泉	0.2	遺跡は確認されなかった	前田	
		久保泉西部	佐賀市久保泉町大字上和泉	5	時期不明集落跡	福田	藤附遺跡
		久保泉南部	佐賀市久保泉町大字下和泉	18	弥生時代～平安時代集落跡	徳富	下和泉一本椎遺跡
		金立北部	佐賀市金立町大字金立	21	古墳時代～中世集落跡	前田	若宮原遺跡
		金立南部	佐賀市金立町大字千布	22	中世を主体とする集落跡	前田	西千布・友貞遺跡
		兵庫南部	佐賀市兵庫町大字瓦町	18	遺跡は確認されなかった	福田	
		兵庫西部	佐賀市兵庫町大字渕・藤ノ木・下渕	25.2	弥生時代遺物	角	
		巨勢	佐賀市巨勢町大字修理田	20	弥生時代～中世集落跡	西田	牟田寄遺跡
		北川副	佐賀市北川副町大字新郷	43	近世遺物包含層	徳富	
	川副町	川副北部	川副町大字南里	15	貝層	天本	
	多久市	西原	多久市多久町西ノ原	8	遺跡は確認されなかった	高塚	
		西ノ谷	多久市南多久町下多久	4.2	時期不明集落跡	高塚	西ノ谷遺跡
		原口	多久市北多久町多久原	3.2	遺跡は確認されなかった	高塚	
	小城町	小城	小城町大字原田	15.1	遺跡は確認されなかった	古庄	
	三日月町	石木	三日月町大字久米	0.6	弥生時代集落跡	永田	土生Ａ遺跡
	富士町	富士北部	富士町大字栗並	9.4	遺跡は確認されなかった	徳富	
佐賀南部	武雄市	武雄南部	武雄市武雄町大字永島	19	遺跡は確認されなかった	原田	
	有明町	深浦	有明町大字深浦	0.1	古墳群	小松・徳富	龍王峠古墳群
佐賀北部	西有田町	国見	西有田町大字大木	6.5	遺跡は確認されなかった	宮崎	
	相知町	平山上	相知町大字平山上甲	10.4	遺跡は確認されなかった	小松	
	浜玉町	浜崎南部	浜玉町大字東山田	8.6	遺跡は確認されなかった	徳富	
佐賀上場	玄海町	有浦上	玄海町大字有浦上	14	遺跡は確認されなかった	有光	
		大薗	玄海町大字大薗	6.3	遺跡は確認されなかった	有光	
	肥前町	中浦	肥前町大字中浦	6.3	遺物が数点出土した	藤井	
	呼子町	小川島	呼子町大字小川島	0.7	遺跡は確認されなかった	徳富	

表２　平成５年度発掘調査遺跡一覧表

市町村名	遺跡名	略号	遺跡の所在地	調査面積	調査主体者	調査担当者	遺跡の内容
鳥栖市	牛原前田遺跡	ＦＵＭ	鳥栖市牛原町字前田	23,200㎡	鳥栖市教育委員会	石橋	縄文時代～古墳時代集落跡・墓地
	立石遺跡	ＦＴＴ	鳥栖市立石町字新開・木ノ元	5,000㎡		陣内	縄文時代～古代集落跡
中原町	山田古墳群	ＹＫＧ	三養基郡中原町大字養原字山田	3,700㎡	中原町教育委員会	太田	縄文時代遺物包含層・中世集落跡
	若宮八幡神社遺跡	ＷＨＪ	三養基郡中原町大字養原字鐘突	1,100㎡			古代～中世集落跡
	西寒水四本柳遺跡	ＮＹＹ	三養基郡中原町大字原古賀字西寒水四本柳	1,800㎡			弥生時代・古代集落跡
	西寒水七本柳遺跡	ＮＮＹ	三養基郡中原町大字原古賀字西寒水七本柳	1,900㎡			弥生時代・中世集落跡
	孫左エ門塚遺跡	ＭＺＭ	三養基郡中原町大字原古賀字孫左エ門塚	1,500㎡			縄文時代遺物包含層・古代集落跡
	石井一本松遺跡	ＩＩＭ	三養基郡中原町大字原古賀字石井一本松	4,800㎡			弥生時代～古墳時代集落跡
上峰町	八藤遺跡	ＹＴＯ	三養基郡上峰町大字迎原	5,560㎡	上峰町教育委員会	原田・小松	太古木・奈良時代集落跡
千代田町	本村五本柳遺跡	ＨＹＹ	神埼郡千代田町大字境原字五本柳	500㎡	千代田町教育委員会	堤	中世～近世集落跡
佐賀市	野田遺跡	ＮＯＡ	佐賀市金立町大字金立字野田	1,338㎡	佐賀市教育委員会	山口	中世屋敷跡
	友貞遺跡	ＴＢＳ	佐賀市金立町大字千布字友貞	4,289㎡		前田	弥生時代～中世集落跡
	大西屋敷遺跡	ＯＮＹ	佐賀市鍋島町大字八戸字袋田	1,200㎡		角	平安時代～鎌倉時代集落跡
	渕遺跡	ＦＣＩ	佐賀市兵庫町大字渕	1,590㎡			弥生時代集落跡
三日月町	土生Ａ遺跡	ＨＢＡ	小城郡三日月町大字久米字土生	400㎡	三日月町教育委員会	永田	弥生時代集落跡
北方町	勇猛山遺跡	ＹＭＺ	杵島郡北方町大字大渡	800㎡	北方町教育委員会	徳富	中世～近世墓地
有明町	竜王峠古墳群	ＲＯＴ	杵島郡有明町大字深浦字平山	740㎡	有明町教育委員会	小松	古墳群
唐津市	梨川内村前遺跡	ＭＵＭ	唐津市梨川内字村前	1,500㎡	唐津市教育委員会	田島	旧石器時代～近世遺物包含層
	枝去木山中遺跡		唐津市枝去木字山中	625㎡		仁田坂	旧石器時代遺物包含層

III. 平成５年度文化財確認調査の内容

１．佐賀東部地区の調査

図２　佐賀東部地区周辺地形図（１：100,000）

１．鳥 栖 市(鳥栖北部地区)
２．　〃　(鳥栖西部地区)
３．中 原 町(中原北部地区)
４．　〃　(中原南部地区西寒水)
５．　〃　(中原南部地区石井)
６．上 峰 町(上峰北部地区)
７．千代田町(千代田工区)
８．東部導水路(三田川中部工区)

①　牛原前田遺跡
②　立石遺跡
③　山田古墳群
④　若宮八幡神社遺跡
⑤　西寒水四本柳遺跡
⑥　西寒水七本柳遺跡
⑦　孫左エ門塚遺跡
⑧　石井一本松遺跡
⑨　八藤遺跡
⑩　本村五本柳遺跡

(1) 鳥栖市（鳥栖北部地区、鳥栖西部地区）

鳥栖北部地区（図３・４）は、平成６年度県営圃場整備事業に伴い確認調査を実施した。

調査は、鳥栖市牛原町字井川口の約4.4haを対象に行った。

調査対象地区は、脊振山系東部の城山（標高494.3ｍ）山麓から流下する安良川が作る谷平野の段丘上に立地する。狭長な谷部で標高は52～125ｍの水田部であり棚田の形状を呈する。

対象地区一帯は、城山（勝尾城）を中心とする戦国時代の城下町として知られており、対象地区はそのうち総構えの域内に位置している。勝尾城は『北肥戦誌』によると応永30年（1423）小弐氏によって大宰府を追われた鎮西探題渋川義俊によって築城されたとされ、その後筑紫氏の居城となっており、天正14年（1586）島津氏によって落とされた後廃城となったらしい。同書によれば山麓に根小屋町が形成されていることがわかる。平成元年度に圃場整備事業に伴って行った山浦新町遺跡の調査ではこの城下町と思われる遺構を確認している。勝尾城の支城として鏡城、葛籠城、鷹取城などがあり堀切など遺構の残存状況も良好である。また対象地区に隣接して古代以来の古社である四阿屋神社も所在する。

調査は、対象地区に58カ所のトレンチを設定して行った。

その結果、15カ所のトレンチで遺構・遺物を確認した。確認した遺構としては、土壙・小溝・石列・小穴などがあり、土師器・瓦器などが出土したが量的には少量である。

これらの遺跡は、確認した遺構・遺物から四阿屋神社、城下町に関連するものと考えられる。

鳥栖西部地区（図５）は、平成６年度県営圃場整備事業に伴い確認調査を実施した。

調査は、鳥栖市立石町字野添の約13haを対象に行った。

調査対象地区は、鳥栖市北西方に連なる九千部山系の南麓と、鳥栖市西部に所在する所隈山（113.5ｍ）に挟まれた平坦地で、石谷山（734.4ｍ）を水源とする沼川の支流群により形成された谷底平野及び扇状地によって構成されている。調査地は標高約45ｍの水田部である。

対象地区は、縄文時代～弥生時代の遺物散布地として周知されている野副遺跡の範囲にあたり、東に隣接する立石遺跡については平成５年度に（本書48頁）、西に隣接する惣楽遺跡については平成４年度に本地区と同じく圃場整備事業にともなって発掘調査を実施しているが、その結果、両遺跡で平安時代の集落跡が確認されている。また、地区内には鳥栖市指定の野添板碑群も所在し、中世の遺構が検出されることも予想された。

当該地区の確認調査は、平成３年度に一度実施しているが、圃場整備事業の実施前年度にあたり、遺跡の範囲を明確にするために追加の確認調査として行った。トレンチを設定した地区は主に、板碑が所在する地区の周辺、及び対象地区南西部の南側についてである。トレンチは24カ所設定した。

その結果、第１トレンチで小穴を、第７トレンチで小穴及び住居状落ち込み、第11トレンチで小穴を確認し、また第８・９トレンチで遺物包含層を確認した。出土した遺物は土師器坏、須恵器坏、青磁片で、９トレンチでは鉄滓も確認している。

前回の調査と総合して考えると、遺跡は南北二つの地区に分けられ、この両地区は東西に走る小谷部

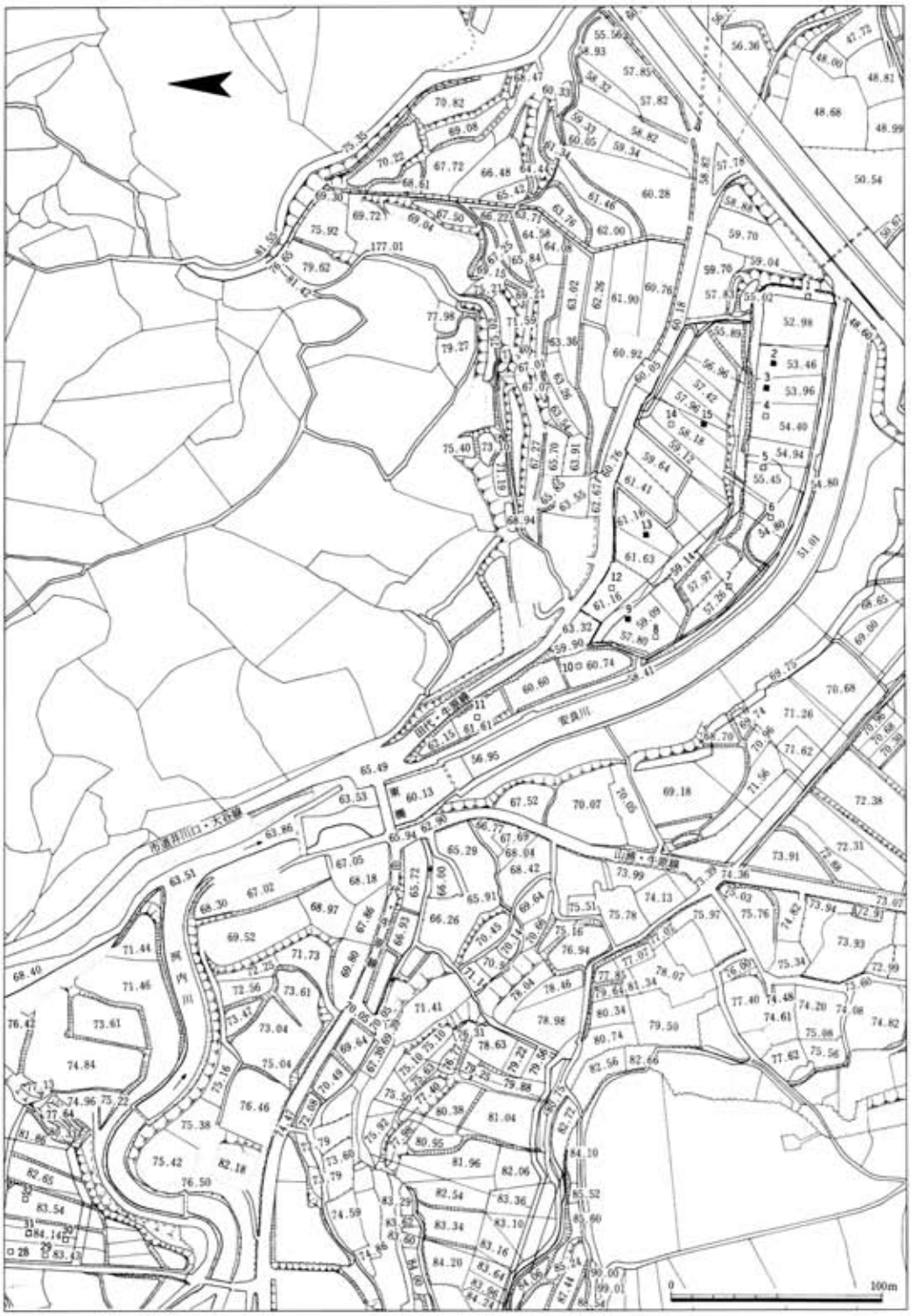


図 3　鳥栖北部地区試掘坑配置図(1)

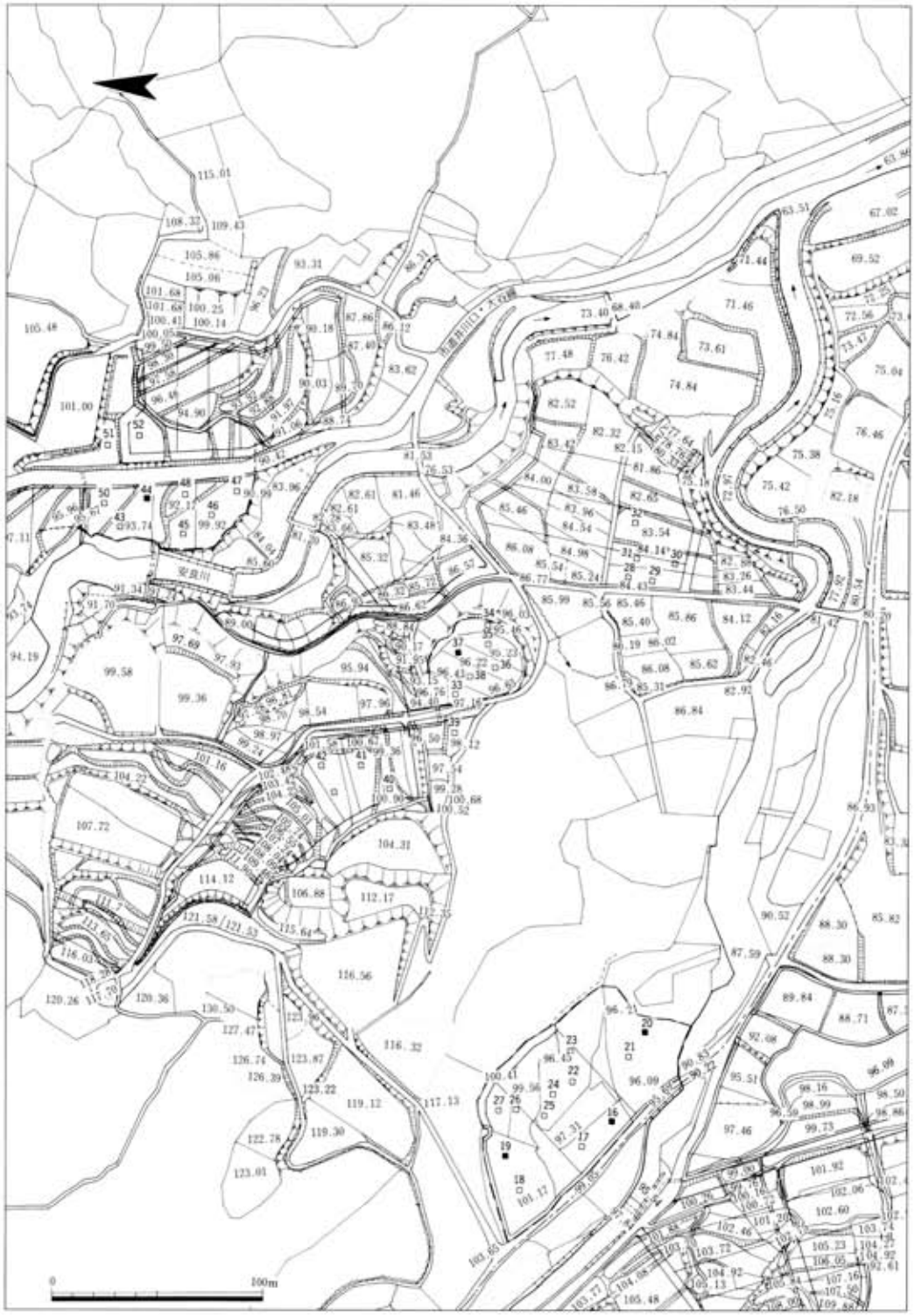


図4　鳥栖北部地区試掘坑配置図(2)

図５　鳥栖西部地区試掘坑配置図（●は平成３年度試掘溝の位置）

によって分けられる。遺構・遺物の分布密度は北側地区のほうが高く、集落の中心はこちらの地区になるものと思われるが、南部分には１カ所高まりが存在し、これは塚または古墳である可能性も残っている。

(2) 中原町（中原北部地区、中原南部地区）

中原北部地区（図６）は、平成６年度県営圃場整備事業に伴い確認調査を実施した。

調査は、中原町大字糞原字前田原・吉原・野田・石崎・杉ノ本の約８haを対象に行った。

調査対象地区は、脊振山系のうち石谷山（754.5ｍ）から南に延びる尾根及び丘陵先端部に位置する。寒水川の支流が作る河岸段丘と氾濫原からなる標高約42～48ｍの水田部である。

対象地区北側の山麓部には鳥ノ巣古墳群などの群集墳が知られ、また縄文時代～古墳時代の遺物散布地である前田原遺跡が所在する。東側の丘陵上は弥生時代～古墳時代の遺物散布地・古墳群である石崎遺跡が所在する。西側の丘陵には、弥生時代～古墳時代の遺物散布地である野田・植松・曲金・鬼塚遺跡などが知られており、現在石室のみが残存するが群集墳も存在したものと思われる。今回の調査対象地区の西部も野田遺跡の範囲に含まれた。

調査は対象地区に38カ所のトレンチを設定して行った。その結果、対象地区西側の段丘上に設けた１・３・５・12・13の５本のトレンチで溝・小穴・住居を検出した。遺物は土師器と見られる細片が出土した。

中原南部地区（図７・８）は、平成６年度県営圃場整備事業に伴い確認調査を実施した。

調査は、中原町大字原古賀の約27haを対象に行ったが、西寒水・石井の二つの地区に分けて実施した。

調査対象地区はいずれも、脊振山系の内鷹取山（403.5ｍ）南麓に広がる洪積台地の南側に所在する。

西寒水地区は中原町南西部の切通川左岸に広がる段丘上にあって、この段丘上を南北に走る谷状凹地の水田、畑地に立地する。標高は8.3～16ｍである。

対象地区の切通川を挟んで西側の丘陵は、北部に工業団地建設によって調査が行われた著名な二塚山遺跡群が所在していた丘陵で、今回対象となった地区の西側には西寒水四本柳遺跡や西寒水七本柳遺跡といった弥生時代～古墳時代にかけての遺物散布地が周知されており、その一部、丘陵先端西側については平成５年度に圃場整備事業に伴って発掘調査が実施されている。（本書54～57頁）対象地区北側では船石遺跡・船石南遺跡など弥生時代の集落・墓地を中心とする遺跡が調査されており、また東側丘陵には天神遺跡や宮ノ後遺跡など弥生時代・中世の遺物散布地が所在する。

西寒水地区の調査は16haの対象地に70カ所のトレンチを設定して行った。その結果、第５・７・10・15・20・30・32・35・37・38・39・42・45・53・58・64・70トレンチで溝・小穴・土壙・竪穴住居らしき遺構を検出し、第67・68トレンチで弥生土器片を多量に含んだ遺物包含層を確認した。第51トレンチでは板が弥生土器とともに流れ込んだ状況で出土した。出土した弥生土器片のほとんどは中期に属するものである。

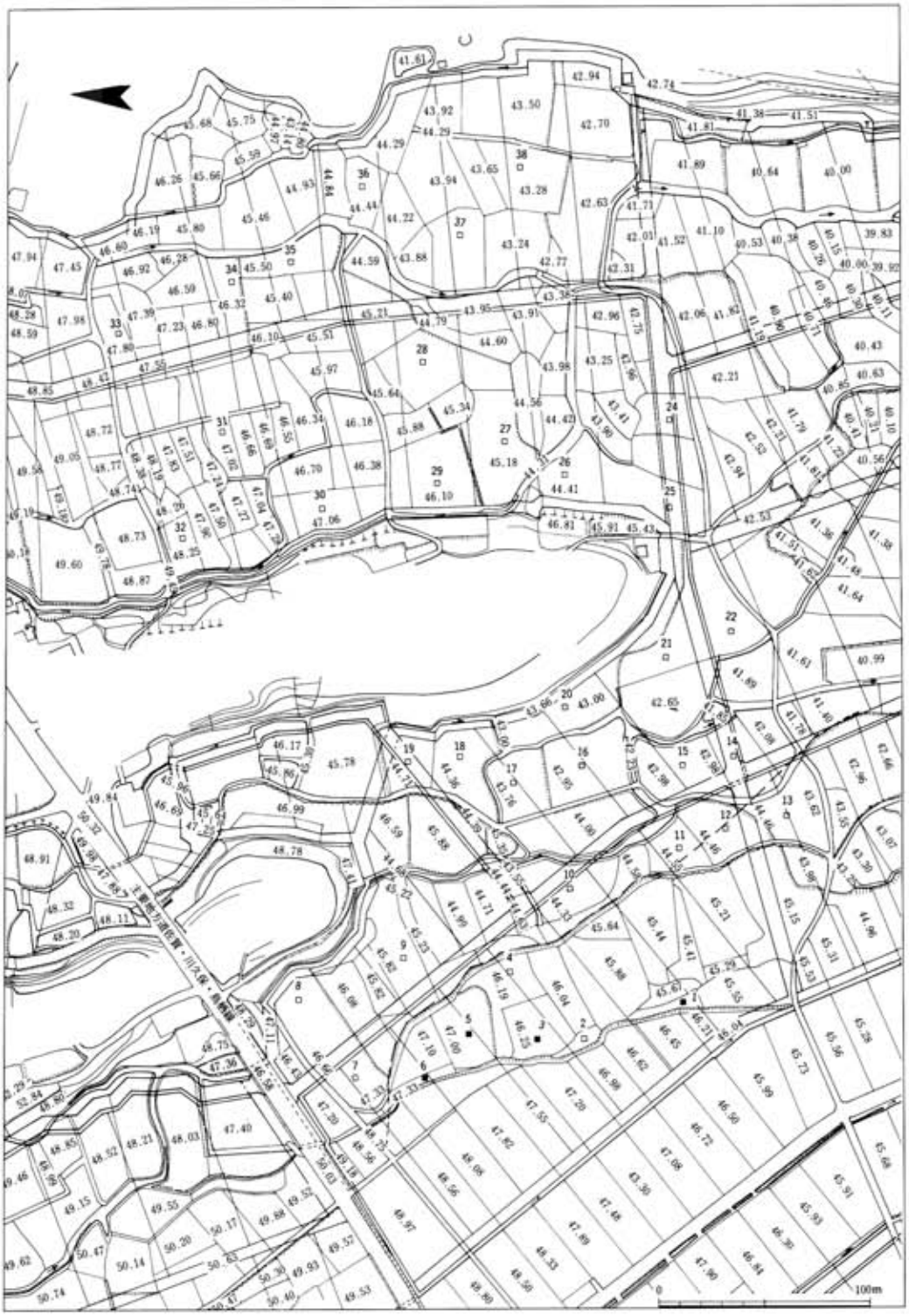


図6　中原北部地区試掘坑配置図

こうした今回の調査結果と平成５年度に本地区西側地区で行った確認調査の結果から、遺跡は段丘上の対象地区のほぼ全域に広がることがわかったが、遺跡の中心は丘陵先端部を中心とした周辺地区になるものと思われ、集落のほか墓地が存在する可能性もある。

石井地区は洪積台地先端のうち寒水川によって開析された谷部のうち、寒水川右岸の標高9.15～17.5ｍの南北に細長い水田部である。対象地区の西には東寒水の段丘が、東には石井の段丘がそれぞれ舌状に南北に延びている。

対象地区東側の丘陵上には縄文時代～中世の遺物散布地である大手木（おおてぎ）遺跡や山像塚古墳、石井一本松古墳群が存在する。また、西側丘陵上には弥生時代～古墳時代の遺物散布地である町南（ちょうなん）遺跡が広がっており、そのうち県立中原養護学校建設に係る部分について昭和50～55年に佐賀県教育委員会が発掘調査を実施し、弥生時代～古墳時代の集落跡を確認している。調査対象地区の南側には、この町南遺跡の一部が含まれていた。

調査は、11haの対象地区に38カ所のトレンチを設定して行った。その結果、ほとんどのトレンチでは表土下が砂質土層・砂層・砂礫層で、寒水川による流下堆積物と考えられ、遺構は検出できなかった。東寒水段丘に近接した部分で一部褐色粘質土が確認できたが、削平を受けているものと考えられ生活痕は認められなかった。またこの段丘に近接した部分に設けた２カ所のトレンチで弥生土器片が出土したが、摩耗を受けており、段丘上からの流入によるものと考えられる。

こうした状況から当該地区のほとんどが寒水川の氾濫原と考えられ、遺跡の存在は確認できなかった。

(3) 上峰（かみみね）町（上峰北部地区）

上峰町については、平成４年度県営圃場整備事業工事実施中に古い巨木が発見されたため、上峰町教育委員会がその性格、範囲を確認するために調査を実施し、県教育委員会はその結果等に基づき、遺跡の性格等について検討を行い、県農村農地整備局と遺跡保存のための調整を行った。

なお、上峰町教育委員会が実施した確認調査の結果の概要は次のとおりである。

調査地点は、脊振山系の鷹取山及び鎮西山（ちんぜいさん）の南麓に発達する標高20～35ｍの更新世低位段丘上に立地する。この丘陵上には旧石器～中世の遺跡（八藤（やとう）遺跡）が存在し、平成元年度から発掘調査を実施してきている。巨木含む自然木群が確認されたのはこの遺跡調査面から約３ｍ下層部分である。

調査は６本の試掘坑を設定して行った。その結果、阿蘇４火砕流によって埋没した約８万年前の森林であることが判明した。地層については火砕流前後の土層も合わせて調査し、この地区における段丘面を構成する各層の堆積・形成環境が復元できたとともに、火砕流そのものの規模・方向などや、火砕流前後の環境等を知る貴重な資料を得ることができた。埋没した樹木には、直径１ｍに及ぶ巨木数点が含まれ、また地表に根を張った状態の樹根約10株も確認された。埋没した森林は、ヒメバラモミを主体とするトウヒ属の樹木を中心に、ブナ・コナラ・カエデ・シデ類などの広葉樹が混在するものであることが分かった。そのほか樹種同定、植物化石・花粉化石・球果化石や昆虫化石の同定、年輪分析等から当

図７　中原南部地区（西寒水）試掘坑配置図(1)

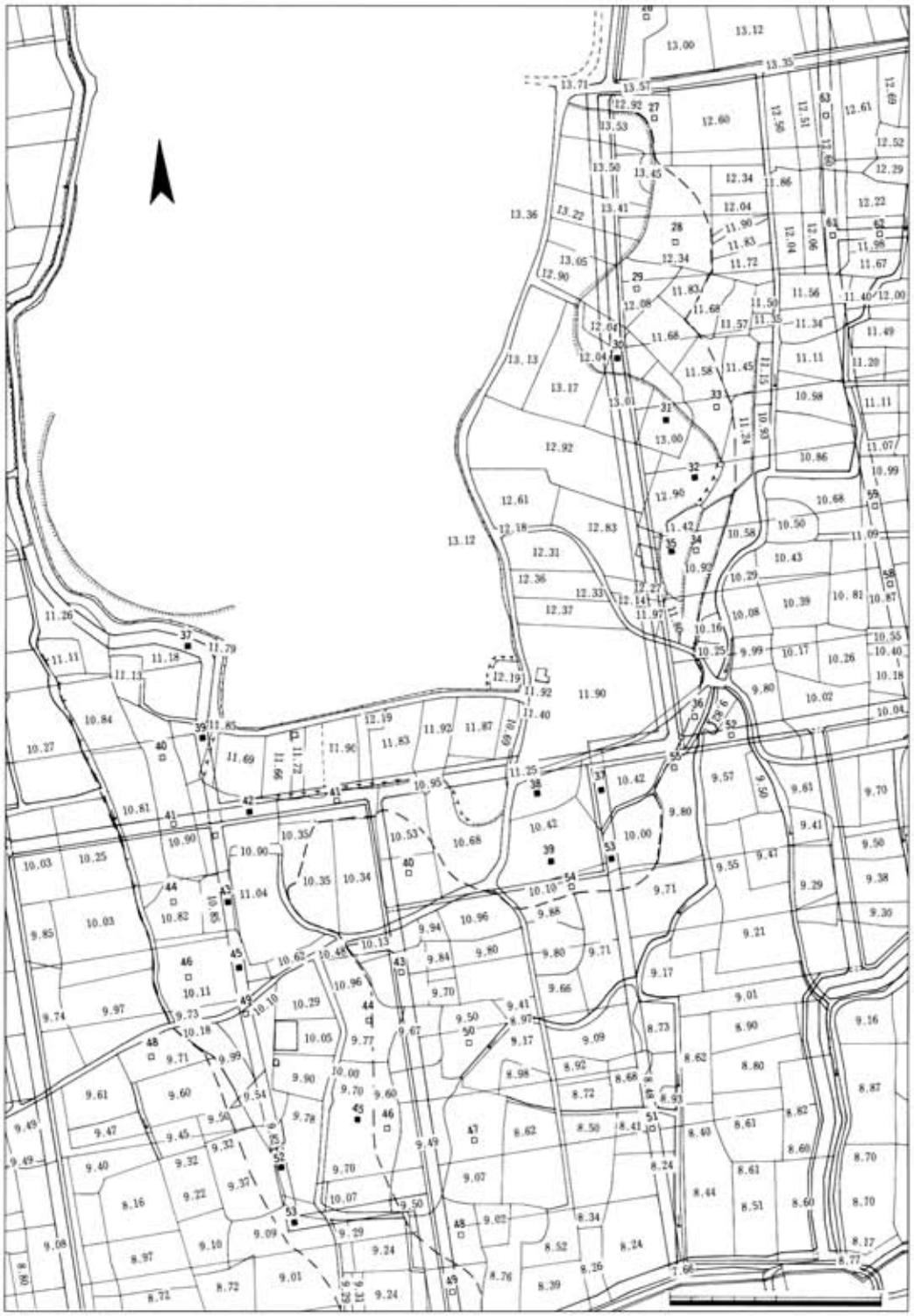


図８　中原南部地区（西寒水）試掘坑配置図(2)

時の古環境を復元するための貴重な資料を多数得ることができた。(本書64頁参照)

文献　『佐賀平野の阿蘇４火砕流と埋没林』上峰町文化財調査報告書第11集 1994.3

(4)　千代田町（佐賀東部地区千代田工区）

佐賀東部地区千代田工区(図９)は、平成６年度県営圃場整備事業に伴い確認調査を実施した。

調査は、千代田町大字境原字五本柳ほかの58haを対象に行った。

調査対象地区は中地江川左岸の沖積平野で、水田標高は約3.2～3.4ｍであるが、集落を中心にやや低くなる。この地区の村落名の犬童は、この地区に居住していたと伝えられる犬童丸という豪族の名に因むと言う。『九州治乱記』によれば、永禄12年（1569）大友宗麟が竜造寺隆信の本拠佐賀城を攻めたとき、豊後の諸将が神埼郡西端の犬童林に布陣したという。この犬童林が当地区内にあり、犬童山ともいう。近世には佐賀藩主の狩り場とされた。

調査対象地区の南部の犬童本村集落を中心とした地区は、中世の遺物散布地である本村五本柳遺跡として周知されており、平成５年度に隣接した地区の圃場整備に伴い千代田町教育委員会が発掘調査を実施しており、中世～近世の土壙・溝を確認している。(本書66頁)

調査は、対象地区に104カ所の試掘坑を設定して行った。なお、対象地区の一部はクリークに囲まれた島状になっており、この地区については隣接地の工事が開始された後クリークの水が排水された時点で調査を行った。その結果、犬童本村集落のクリークに囲まれた地区に設定した、第８トレンチで近世の小穴を確認した。周辺については上物の状況でトレンチが設定できなかった部分もあるが、現集落を中心とした地区に近世の遺構が広がっているものと考えられ、中近世環濠集落に関係する遺跡と考えられる。

図9　佐賀東部地区千代田工区試掘坑配置図

2．佐賀西部地区の調査

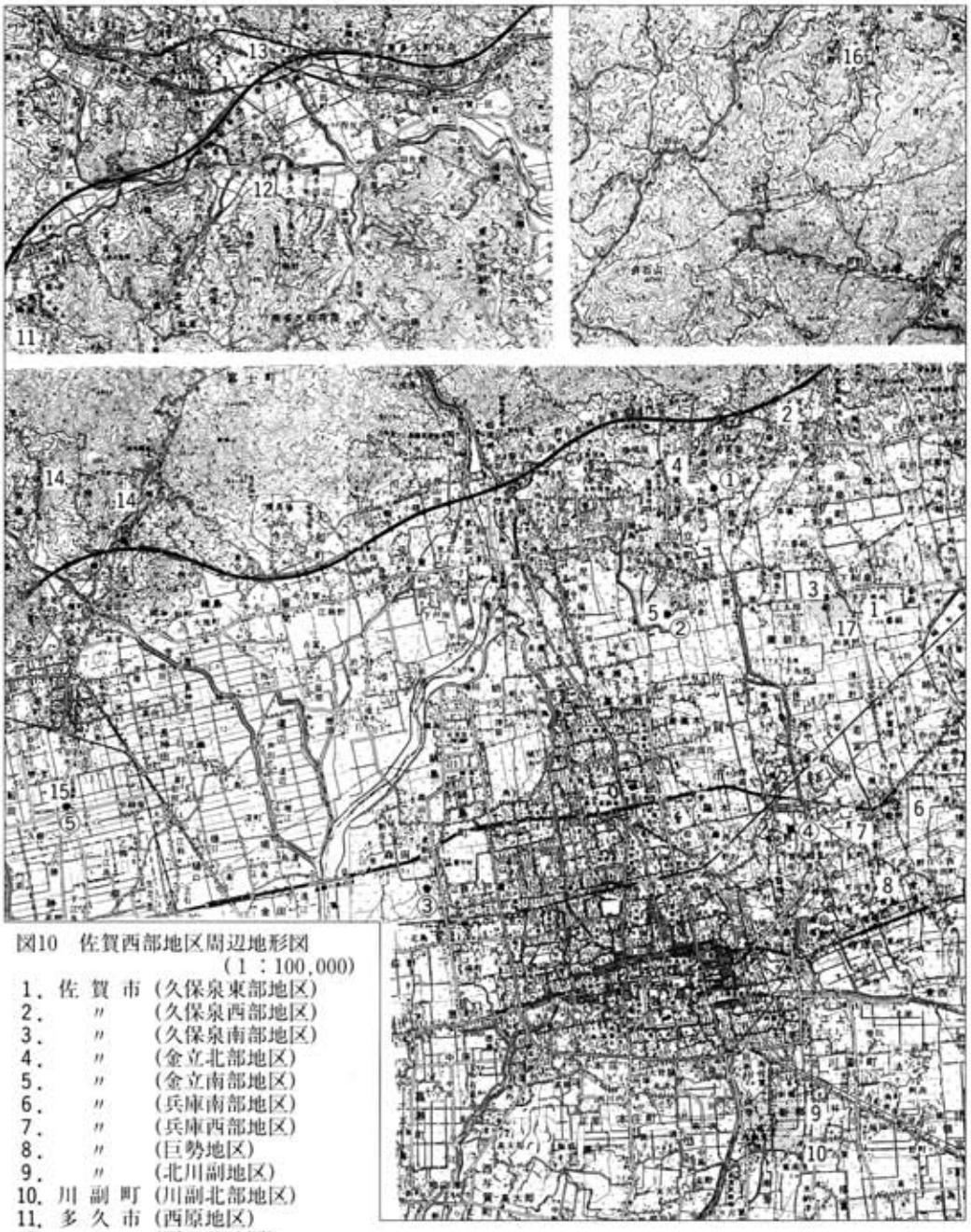


図10　佐賀西部地区周辺地形図
（1：100,000）

1．佐 賀 市（久保泉東部地区）
2．　〃　（久保泉西部地区）
3．　〃　（久保泉南部地区）
4．　〃　（金立北部地区）
5．　〃　（金立南部地区）
6．　〃　（兵庫南部地区）
7．　〃　（兵庫西部地区）
8．　〃　（巨勢地区）
9．　〃　（北川副地区）
10．川 副 町（川副北部地区）
11．多 久 市（西原地区）
12．　〃　（西ノ谷地区）
13．　〃　（原口地区）
14．小 城 町（小城地区）
15．三日月町（石木地区）
16．富 士 町（富士北部地区）
17．佐賀東部導水路
（久保泉南部地区）

① 野田遺跡
② 友貞遺跡
③ 大西屋敷遺跡
④ 渕遺跡
⑤ 土生Ａ遺跡

(1) 佐賀市（久保泉東部・久保泉西部・久保泉南部・金立北部・金立南部・兵庫南部・兵庫西部・巨勢・北川副）

久保泉東部地区は、平成６年度県営圃場整備事業に伴い確認調査を実施した。

調査は、佐賀市久保泉町大字下和泉の0.18haを対象に行った。

調査対象地区は、脊振山南麓に広がる洪積台地の南側縁辺部にあって、小松川による川岸段丘の微丘陵先端部で標高6.1～6.5ｍの高畑となっている。

対象地区は古墳時代及び中世の遺物散布地として周知されている下和泉一本椎遺跡の範囲に含まれている。対象地区の北西方の立野遺跡では弥生時代中期と鎌倉時代の集落を、また北方の白石原遺跡では確認調査で古墳時代前半期の集落がそれぞれ確認されている。

調査は、対象地に３カ所の試掘坑を設定して行った。その結果、遺構･遺物は確認できなかった。なお、対象地区の基本土層は、表土下に20～40cmの暗灰褐色土、その下に暗黄褐色土となっていた。

久保泉西部地区は、平成６年度県営圃場整備事業に伴い確認調査を実施した。

調査は、佐賀市久保泉町大字上和泉字藤附の１haを対象に行った。

調査対象地区は、脊振山南麓の金立山から派生する舌状丘陵地に挟まれた、棚田状をなす標高27～31ｍの水田部である。

対象地区内には、縄文時代～中世の遺物散布地として周知されている藤附遺跡が含まれる。対象地に近接して、久保泉丸山遺跡や昭和42年に佐賀大学により発掘調査が行われた山王山古墳、北東200ｍには古墳時代の集落・古墳群が調査された西原遺跡、北西200ｍには古墳群の調査が行われた藤附遺跡が存在する。

調査は、対象地区に７カ所の試掘坑を設定して行った。その結果、第１トレンチで時期不明の小穴・土壙を確認した。その他のトレンチでは遺構・遺物ともに確認できなかった。

久保泉南部地区（図11）は、平成６・７年度県営圃場整備事業に伴い確認調査を実施した。

調査は、佐賀市久保泉町大字下和泉字一本椎・二本椎の18haを対象に行った。

調査対象地は、脊振山地南麓部に形成された合流扇状地の扇端部が沖積部に潜り込む付近に当たる。巨視的に見ると、巨勢川東岸の段丘面上にあたるが、段丘面上にも巨勢川下流方面に向かう小河川や小谷状部が存在する。今回対象になった地区は、標高4.4～6.4ｍの水田部で所々に比高差１ｍ程の高畠が存在する。

今回調査対象となった地区の東側には、弥生時代、古墳時代、中世の遺物散布地である下和泉一本椎遺跡が、西側には弥生時代の薬師丸五本柳遺跡、中世の園田遺跡が存在することが周知されていた。下和泉一本椎遺跡北側では農業基盤整備事業に伴い、佐賀市教育委員会によって発掘調査が実施されている。

調査は、対象地区に57カ所の試掘坑を設定して行った。その結果、№２・３・４・５・９・

図11　久保泉南部地区試掘坑配置図

11・14・16・18・20・21・22・29・31・32・33・38・39・40・41・42・44・45・46・47・50・51・55・57トレンチで溝、土壙、小穴を確認した。遺構は現在の高畠を中心とするが、一部その周辺にも広がっている。地区西方部分については微高地上に広範囲に遺跡が広がっているものと思われる。出土した遺物は弥生中期土器、古墳時代後期を中心とする土師器・須恵器、平安時代後期を中心とする土師器・瓦器などがある。

以上のことから今回対象となった地区には、地区中央を南北に浅い谷状地形が走り、その両岸を中心に、弥生時代～平安・鎌倉時代の集落が広がっているものと推定できる。

金立北部地区（図12）は、平成６年度県営圃場整備事業に伴い確認調査を実施した。

調査は、佐賀市金立町大字金立の21haを対象に行った。

調査対象地は、佐賀市北西部、脊振山系南麓の洪積台地上にあって、丘陵部と氾濫原が交互に形成されている地区の標高14～20ｍ付近の水田部にあたる。

調査対象地区は、縄文時代～中世の遺物散布地である若宮原遺跡の範囲に含まれており、また地区周辺での調査としては、東方の大日遺跡では奈良時代の集落、南東の琵琶原・赤井手遺跡で弥生時代～奈良時代の集落、南方の野田遺跡で鎌倉時代の集落が確認されるなど、遺跡が密集する地区である。

調査は対象地区に68カ所の試掘坑を設定して行った。その結果、第44・45・55～58・60・63・64トレンチで溝・小穴・土壙・竪穴住居状落ち込みが検出できた。これらの遺構は４群のまとまりに分けることができる。遺構を確認した試掘坑からは、古墳時代・奈良時代の須恵器・土師器片・中世土師器片が出土した。これらの結果から対象地区内に、古墳時代～中世の集落を主体とする遺跡の存在が想定できる。

金立南部地区（図13）は、平成６年度県営圃場整備事業に伴い確認調査を実施した。

調査は、佐賀市金立町大字千布の22haを対象に行った。

調査対象地は、脊振山系南麓に広がる洪積台地ないし合流扇状地縁辺付近に広がる標高５ｍ程度の平坦な水田部に立地する。地区の所々に削平を免れた高畑が点在している。

対象地の大部分は、弥生時代～中世の遺物散布地として周知されている西千布遺跡、友貞遺跡の範囲に含まれており、また対象地区周辺での発掘調査の事例は比較的多い。対象地北側約400ｍには弥生時代前期末～中期の甕棺墓群が確認された東千布遺跡、北東400ｍには古墳時代前半頃の集落が確認された久富遺跡、西200ｍには弥生時代中期と鎌倉時代の集落が確認できた千布二本黒木遺跡が、南西150ｍから今回対象地区に接する地域にまたがって室町時代の集落・居館の調査が行われた友貞遺跡が所在する。また地区の西側を走る県道佐賀・川久保線の確認調査でも遺構が確認できている。

調査は、対象地区の水路・道路予定地を中心に51カ所の試掘坑を設定して行った。その結果、対象地区南側を中心に中世を中心とする集落が確認された。検出された遺構は溝・小穴・土壙

図12　金立北部地区試掘坑配置図

図13　金立南部地区試掘坑配置図

状落ち込みなどで、その検出状況から大きく３群に分けられ、出土遺物は主に中世の土師器が中心であるが第１～４・14・15・19～21トレンチでは奈良時代の須恵器・土師器も出土した。

これらの遺構は洪積台地（低位段丘面）が田面に埋没した扇状地の中洲に立地するものと考えられる。

兵庫南部地区は、平成６年度干拓地等農地整備事業に伴って確認調査を実施した。

調査は、佐賀市兵庫町大字瓦町（かわらまち）の18haを対象に行った。

調査対象地は、佐賀市街東部に位置する標高3.5～4.0ｍ程度の圃場で、巨勢川と中地江川に挟まれた地区である。

対象地区内には、弥生時代の遺物散布地である殿野遺跡が含まれている。対象地の南部では農業基盤整備事業に伴って、牟田寄（むたより）遺跡の調査が数次にわたって行われており、弥生時代や奈良時代の集落の広がり、その在り方が解明されつつある。また対象地区周辺には中世の環濠集落が点在している。

調査は、対象地区の水路・道路予定地を中心に33カ所の試掘坑を設定して行った。その結果、遺構・遺物は全く確認できなかった。

兵庫西部地区は、平成６年度農地還元資源利活用事業に伴って確認調査を実施した。

調査は、佐賀市兵庫町大字渕（ふち）・藤（ふじ）の木（き）・下渕（しもぶち）の25haを対象に行った。

調査対象地は、佐賀市街の北東部に位置し、巨勢川左岸の標高３ｍほどの低平な水田部に立地する。対象地区内及び周辺にはクリークが縦横に走っている。

対象地区内には周知の埋蔵文化財包蔵地は存在しないが、対象地区周辺にはいくつかの遺跡が点在している。東方の渕遺跡は平成４年度の確認調査で発見された遺跡で平成５年度に発掘調査を実施しており、弥生時代中期の遺構が確認されている。そのほか、地区東側に隣接して中世の小太郎丸（こたろうまる）館跡(性格不明)、西方に弥生時代と中世の遺物散布地である西中野遺跡があり、また南方の下村遺跡では平成５年度の調査で平安時代から鎌倉時代の集落が確認されている。

調査は水路予定地を中心に64カ所の試掘坑を設定して行った。その結果、１カ所のトレンチで表土下20㎝の黄灰色の地山に黒色及び黒色土に地山ブロックが混入した埋土の土壙状落ち込みを確認した。遺物は土師器小片のみで、周辺のトレンチからは遺構は確認できなかった。このほかの数カ所のトレンチで、弥生土器・土師器・黒色土器片が出土した。

巨勢地区（図14・15）は、平成６年度干拓地等農地整備事業に伴って確認調査を実施した。

調査は、佐賀市巨勢町大字修理田（しゅりた）の20haを対象に行った。

調査対象地は、佐賀市街地の東部に位置する標高3.0～3.5ｍの低平な水田部で、周辺にはクリークが縦横に走っている。

対象地区内に周知の埋蔵文化財包蔵地は存在しなかったが、近接した地区に数次にわたる調査で弥生時代後期を中心とした集落が確認された牟田寄遺跡が存在し、当該地区内にも遺跡の

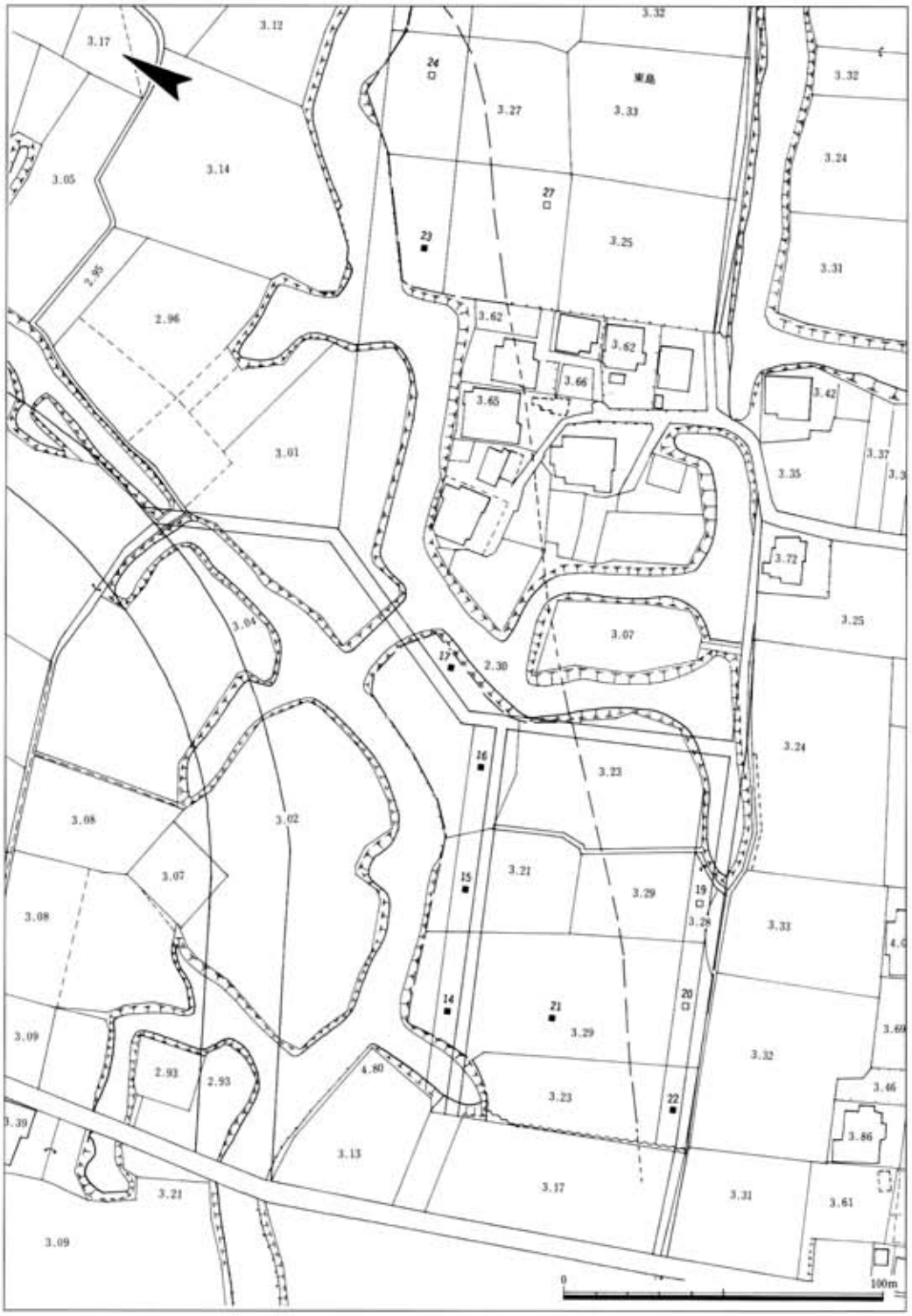


図14　巨勢地区試掘坑配置図(1)

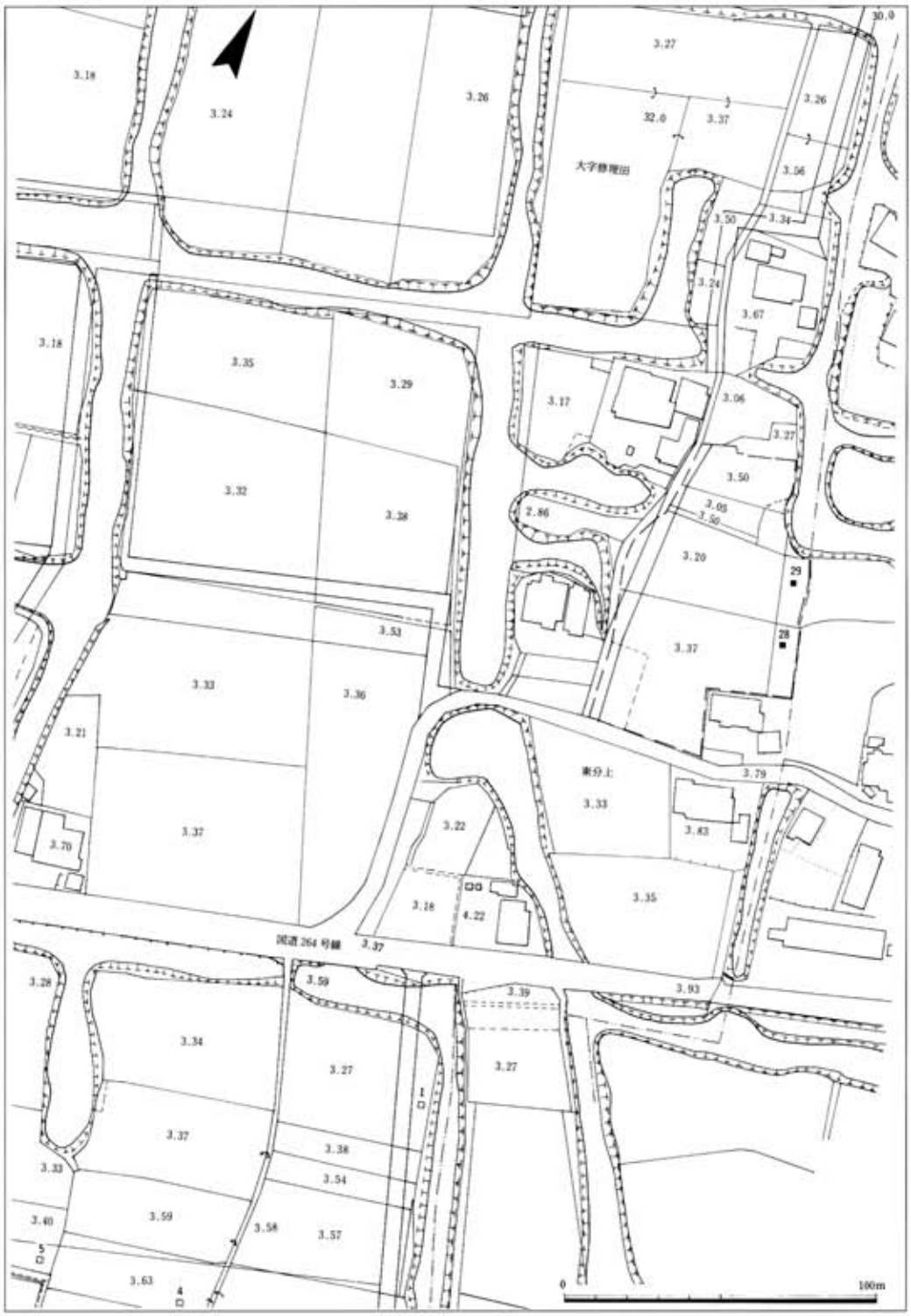


図15　巨勢地区試掘坑配置図(2)

広がりが確認できる可能性があった。

調査は水路予定地を中心に29カ所の試掘坑を設定して行った。その結果、牟田寄遺跡に隣接した地区の２地点、８カ所のトレンチで遺構の存在を確認した。確認できた遺構は土壙、小穴、溝等で、北西部に位置する第１地点では弥生土器が出土することから主に弥生時代を中心とした遺構、北東部の第２地点では土師器が出土することから主に中世の遺構と考えられる。第１地点の周辺には弥生時代後期の遺物を大量に含む遺物包含層が存在し、また立地から木製品が存在する可能性も高い。

北川副地区は、平成６年度干拓地等農地整備事業に伴って確認調査を実施した。

調査は、佐賀市北川副町大字新郷（しんごう）の43haを対象に行った。

調査対象地は、佐賀市街地南部、八田江（はったえ）東岸の標高約２ｍの平坦な水田部に立地する。

当該地区内に周知の埋蔵文化財包蔵地は存在しないが、地区南方の川副町西南里（なんり）、東南里集落を中心とした地域に中世の遺物散布地、近世墓が知られている。この南里には行基の開創と伝える医王山不退寺（ふたいじ）が所在し、中世には川副荘に入ることから当該対象地も川副荘のうちと考えられる。北西の八田宿は八田江沿いの街村をなし、近世船着き場があった。

調査は水路予定地を中心に89カ所の試掘坑を設定して行った。その結果、下武集落に隣接した地区で不定形の落ち込みを確認し、近世末の陶磁器片多数が出土したほか、旧クリーク跡を確認した。なお、地区西部のクリークに囲まれた島状地は通称「今村屋敷」と呼ばれており、近世以降の建物跡が存在する可能性がある。

(2) 川副町（かわそえ）（川副北部地区）

川副北部地区は、平成６年度干拓地等農地整備事業に伴い確認調査を実施した。

調査は、川副町大字南里字東南里（なんり）・西南里の15haを対象に行った。

調査対象地は、佐賀市街地南方、佐賀平野南部の標高約2.0～2.5ｍの低平な沖積部に立地する。

対象地の南側には、周知の西南里遺跡、東南里遺跡が位置しており、中世の集落跡・館跡とされているが実態は不明である。なお、対象地の南約2.5kmの地点には鯰江（しくつえ）遺跡があり中世の土師器・瓦器・輸入陶磁器が出土している。

調査は水路予定地・高畠部分に39カ所の試掘坑を設定して行った。その結果、遺構は全く確認できなかった。特に地区東側の高畠は「えんしゅうぐら」の地名が残っていたが、いくらか整地した痕跡は認められたものの、明確な遺構は確認できていない。遺物としては、西南里集落の西側に設けたトレンチより近世の磁器（碗・大皿）が出土したが、流れ込みによるものと思われる。

なお、平成５年度工事地区内の東南里集落に所在する八幡宮神社の南側約200ｍの地点の幹線水路掘削中に表土下約2.5ｍの地点から約1.2ｍの厚さで数百ｍにわたってマガキ・スミノエガ

キを主とした貝層が堆積している状況が確認できた。このカキの中には大きさ40cm近くあるものもあり、何らかの原因で窒息死したものと思われる。この貝層の時期は不明であるが、詫田西分貝塚等で出土するカキ殻と同様の大きさを有するもので、注意されてよい。

(3) 多久市（西原地区・西ノ谷地区・原口地区）

西原地区は、平成６年度中山間地域農村活性化総合整備事業に伴い確認調査を実施した。

調査は、多久市多久町西ノ原の８haを対象に行った。

対象地区は、南多久町南部の鬼の鼻山から北西に派生する丘陵稜の裾に位置し、地区北側は東西に流れる牛津川に向かって傾斜している。水田標高は約40～52ｍである。

調査対象地区の西側には、縄文時代～弥生時代の遺物散布地である西ノ原遺跡が、対象地区の南側には近世初頭陶器古窯である唐人古場窯跡が所在する。

調査は対象地区に42カ所の試掘坑を設定して行った。その結果、小穴２個を除き、明確な遺構は確認できず、またほとんどのトレンチよりサヌカイト片、中央付近のトレンチより中世以降の土師器・陶磁器片が20点ほど出土したが、流れ込みのよるものか、以前の農地改良による削平により失われた遺跡に伴うものと思われる。

西ノ谷地区（図16）は、平成６年度県単独小規模土地改良事業に伴い確認調査を実施した。

調査は多久市南多久町大字下多久の4.2haを対象に行った。

調査対象地は、南多久町のほぼ中央に位置する桐野山と牛津川に挟まれた標高約12ｍの低地水田で、牛津川に沿い東方にゆるやかに傾斜する。

対象地の500ｍほど南方の桐野山の裾部には牟田辺古墳群が、またその付近には弥生時代集落及び墓地として知られる牟田辺遺跡が所在する。

調査は、対象地区に22カ所の試掘坑を設けて実施した。その結果、№15・16トレンチでそれぞれ溝状遺構及び小穴を確認した。溝状遺構はいずれも南北方向に走っていた。遺物としては№15トレンチで土器４点、№20トレンチで磁器を含め20点ほどの土器が出土した。15トレンチの土器のうち１点は縄文時代晩期頃の浅鉢と考えられる。その他の遺物は中世頃のものであろう。この遺構が確認できた地点は周囲の水田より一段高くなっており、遺構が残存するのはこの２枚の水田に限られるのではないかと考えられる。

原口地区は、平成５年度新農村地域定住促進対策事業に係る圃場整備に伴い確認調査を実施した。

調査は多久市北多久町多久原の3.2haを対象に行った。

調査対象地は、天山より派生する山稜群に挟まれた地区で、今出川沿いに東へ下がる標高約50ｍの水田部である。

対象地北東の丘陵群谷部では16基の古墳群が確認されている相の浦古墳群が、東方の丘陵末端には三累環式柄頭を始め多くの副葬品が出土した大工田古墳群が存在する。

調査は対象地区に23カ所の試掘坑を設定して行った。その結果、遺構・遺物ともに確認できなかった。確認調査の土層等の観察から当該地区は今出川の氾濫原にあたるものと考えられる。

(4) 小城町（小城地区）

小城地区は、中山間地域農村活性化総合整備事業に伴い確認調査を実施したもので、対象地区はさらに原田工区と大塚工区に分かれる。

原田工区は小城町大字松尾字原田、大塚工区は大字岩蔵字大塚に所在し、対象面積はそれぞれ11.3ha、3.8haである。

原田工区は小城町の中心部の北東に位置しており、祇園川の支流清水川によって形成された谷底平野の川両岸にわたって広がっており、現状は水田及びミカン園となっている。標高は70～110mである。対象地区には弥生時代～古墳時代・中世の遺物散布地である滝遺跡の一部が含まれ、また地区に近接して清水古墳群が所在する。

原田工区の調査は、対象地区に93カ所の試掘坑を設定して行った。その結果、遺構・遺物ともに確認できなかった。

大塚工区は、原田工区と同じく小城町中心部の北東の山間地域に位置しており、天山山系から派生する丘陵群の東斜面一帯の水田・ミカン園で、標高は約40～80mである。対象地区の北側には大塚古墳が周知されている。

大塚工区の調査は、対象地区に50カ所の試掘坑を設けて行った。その結果本地区においても遺構・遺物ともに確認できなかった。

(5) 三日月町（石木地区）

石木地区（図17）は、水田営農活性化排水対策特別事業に伴い確認調査を実施した。

調査は、三日月町大字久米字土生の東西215mの水路を対象に行った。

対象地は、天山山系から岩蔵谷を経て流れ下る祇園川が形成する扇状地の扇端付近にあたっており、標高約7mである。対象地区の東側に接して史跡土生遺跡が位置しており、当該地区にも土生遺跡の広がりが十分予想されたため調査は注意して行うようにしたが、現況が農道であるため、調査にやや制約があった。

調査は対象地区に、1.3×5mを基本とする11本の試掘坑を設定して行った。その結果、No.1～4トレンチでは地表下約1.5～2mで弥生中期土器・木片・植物遺体を多く含む遺物包含層が確認できたが、それ以外の遺構は確認できなかった。No.5トレンチでは地表下1.6mで径10～30cmの弥生土器片を含む小穴を、No.6トレンチでは－1.2mで落ち込みを、No.7トレンチでは－1.0mで土壙状遺構・溝状遺構・小穴を、No.8・9トレンチでは厚さ15～20cmの遺物包含層を、No.11トレンチで土壙・小穴等を確認した。No.11トレンチは後世の掘削を受けており、地表下1.6mまで掘り下げたが遺構・遺物は確認できなかった。遺物としては弥生中期前半の土器のほか、加工木材等がある。このように当該地区にも土生遺跡の広がりが確認できた。

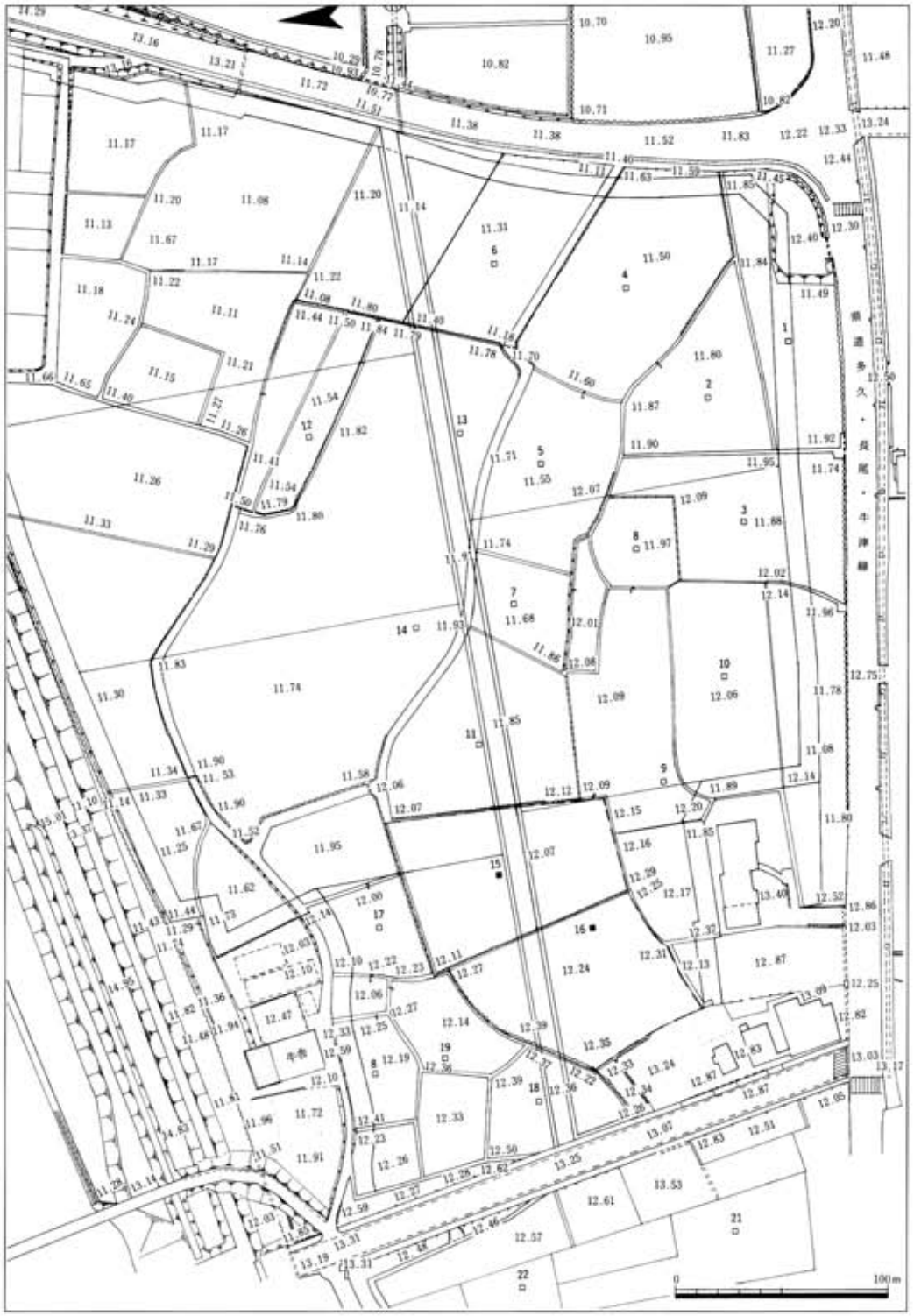


図16　西ノ谷地区試掘坑配置図

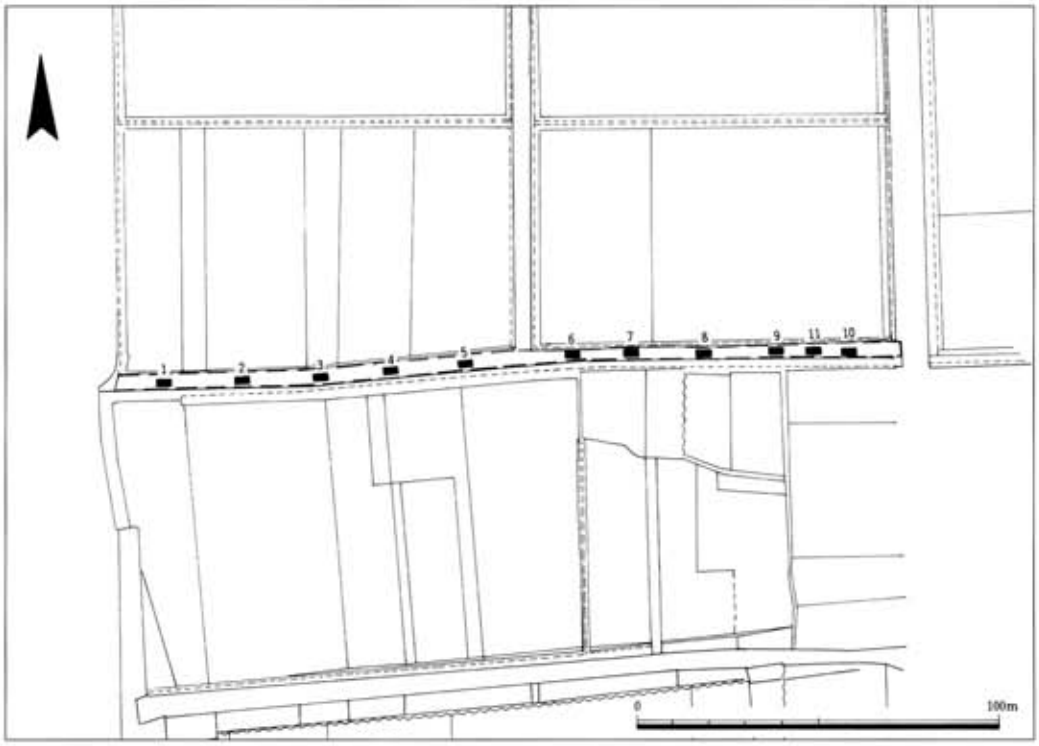


図17　石木地区試掘坑配置図

(6)　富士(ふじ)町（富士北部地区）

富士北部地区は平成６年度中山間地域農村活性化総合整備事業に伴い、確認調査を実施した。

調査は、富士町大字栗並(くりなみ)字九郎(くろう)の2.1haを対象に行った。

調査対象地区は、脊振山中、嘉瀬川上流部にあって、天山の方から北に流れる栗並川が作る開析谷の河岸段丘上にあたる。やや緩やかな傾斜をもつ水田部である。対象地区下流側の栗並川と嘉瀬川が合流する地点付近には縄文時代の遺物散布地である九郎遺跡が知られているほかは、周辺に周知の埋蔵文化財包蔵地は存在しない。

調査は対象地区に23カ所の試掘坑を設けて行ったが、表土中に若干の近世近代の陶磁器片を含む以外、遺構・遺物は確認できなかった。

3．佐賀南部地区の調査

図18　佐賀南部地区周辺地形図（1：100,000）

1．武雄市（武雄南部地区）　　2．有明町（深浦地区）　　①　勇猛山遺跡　　②　龍王峠古墳群

(1)　武雄市（武雄南部地区）

武雄南部地区は、平成６年度県営圃場整備事業に伴い、確認調査を実施した。

調査は、武雄市武雄町大字永島の19haを対象に行った。

調査対象地は、武雄盆地内中央西寄りの低平な水田部に位置する。標高は3.9～5.0ｍである。

対象地内に周知の埋蔵文化財包蔵地は存在しないが、西に隣接して存在する独立丘陵には、中世の城跡や弥生時代～古墳時代の墳墓として知られる島山遺跡が所在するなど、この地域に点在する独立丘陵群を中心にして幾つかの遺跡・墳墓が知られている。

調査は、対象地区に25カ所の試掘坑を設定して行った。その結果、遺構・遺物ともに確認できなかった。表土下は緩い潟土状の粘質土であり、比較的近い時期まで湿地状を呈していたのではないかと思われる。

(2) 有明町（深浦地区）

深浦地区（図19）は、平成６年度（一部５年度分を含む）農村総合整備モデル事業有明地区集落道改良事業に伴い確認調査を実施した。

調査は、有明町大字深浦の工事予定延長180ｍを対象に行った。

調査対象地は、杵島山系から南東部に伸びる丘陵先端付近にあたり、標高約30ｍの南向きの緩斜面で、眼下には有明海を望むことができる。

調査対象地の東側に位置する丘陵上には著名な龍王崎古墳群が位置し、また北西約300ｍの丘陵上には大型石室を有する径約200ｍの円墳である鬼塚が所在する。当該地区も龍王峠古墳群として周知されており、今回工事対象となる地区にも腰石以下のみ残存する横穴式石室を主体とする３基の古墳の存在が現地で確認できた。

調査は、現状で確認できるもの以外の古墳や包含層の有無、及び現状で黒曜石の散布が認められる地区東側の平坦地区の遺跡の有無を調べるために７カ所の試掘坑を設定して行った。その結果、上記古墳以外では№２トレンチで近世以降の土壙１基を確認したほかは遺構は認められなかった。また遺物としては№１トレンチで須恵器片２点、№２トレンチで土壙より磁器小片１点、№３トレンチで現代の瓦、№７トレンチで３号墳に伴うものと思われる須恵器片８点が出土した。なお、№５・６地点付近にも大石の露頭が見られ、古墳である可能性を考えてトレンチを設定したが、調査結果からは古墳とは認められなかった。

以上の調査結果から、今回工事対象となる地区に古墳３基の存在が明らかとなり、こうした分布状況からこの近くには多数の古墳が存在していたことが考えられるが、対象地区に隣接した墓地などによりかなり壊滅している可能性が十分考えられる。（本書84頁）

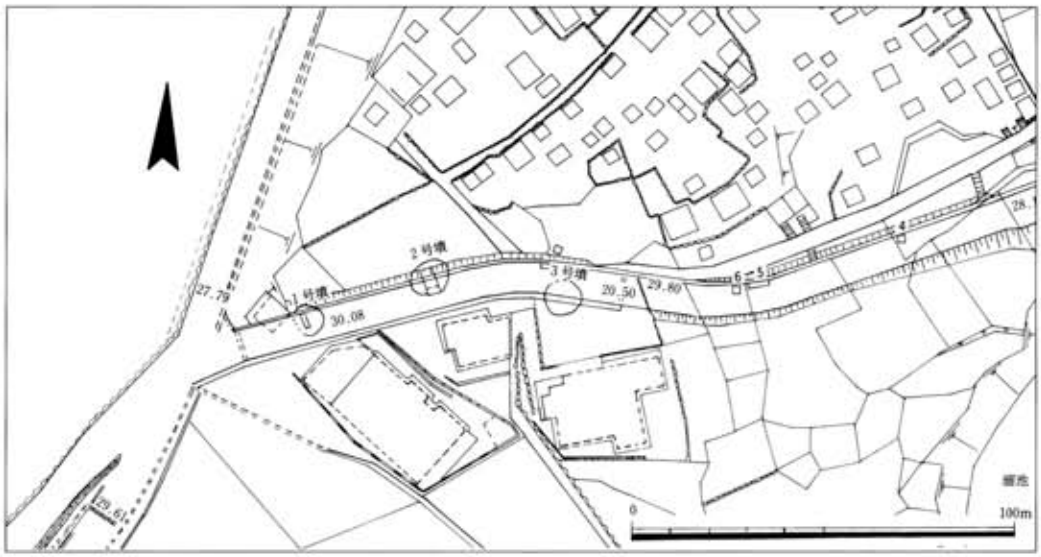


図19　深浦地区試掘坑配置図

4．佐賀北部地区の調査

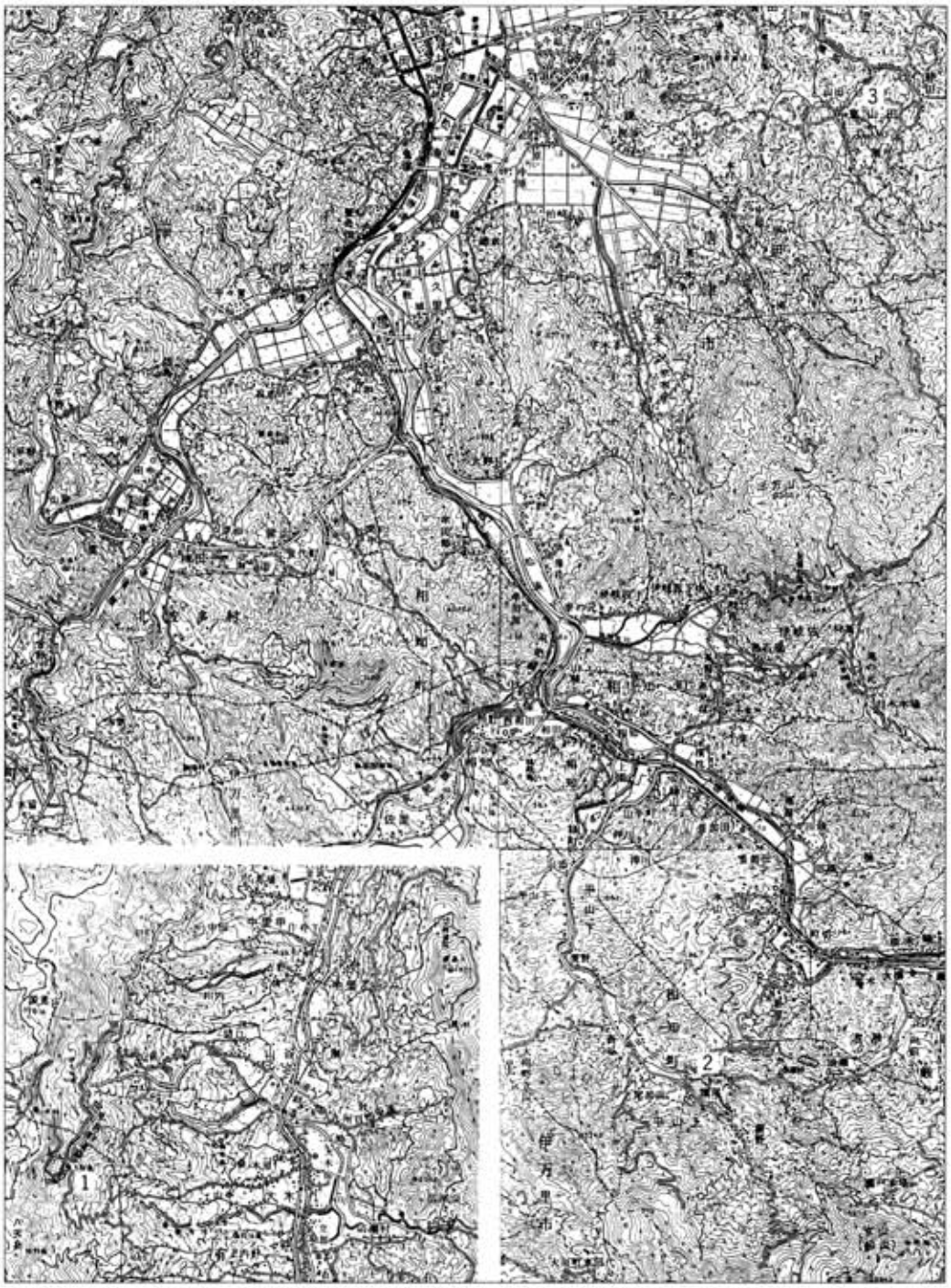


図20　佐賀北部地区周辺地形図（1：100,000）

1．西有田町（国見地区）　　2．相知町（平山上地区）　　3．浜玉町（浜崎南部地区）

(1) 西有田町（国見地区）

国見地区は、平成６年度県営水環境整備事業に伴い確認調査を実施した。

調査は、西有田町大字大木字岳の約0.6haを対象に行った。

調査対象地区は、国見山系東側の項上付近に形成された標高約498ｍのやや平坦な山林で、その地区の凹地を利用してため池が作られている。

対象地区内には、このため池の名前を冠した桑々田（幸加田）溜池遺跡（旧石器時代遺物散布地）が知られており、また地区北側の平坦部分には穴牟田溜池遺跡（縄文時代遺物散布地）が、南側には岩首岩陰遺跡（縄文時代遺物散布地）が知られていた。

調査は対象地に４ケ所の試掘坑を設定して行った。その結果、遺構・遺物ともに確認できなかった。

(2) 相知町（平山上地区）

平山上地区は、平成６年度中山間地域農村活性化総合整備事業に伴い確認調査を実施した。

調査は相知町平山上の10.3haを対象に行った。

調査対象地は、八幡岳の北麓、平山川とその支流によって形成された谷底水田地形の地区である。調査対象地区内には中世の遺物散布地である岩本遺跡が、また対象地区に隣接して近世陶器窯である櫨の谷窯跡が存在する。この平山川沿いには他に縄文時代の遺物散布地である尾部田遺跡・西谷遺跡・受泉寺遺跡などが知られていた。

調査は対象地区に87カ所の試掘坑を設定して行った。その結果、遺構は全く確認できず、平山川により氾濫原となっている状況が観察できた。なお、櫨の谷窯跡本体は調査対象地区外のミカン園による段々畑の崖面に窯床の被熱部が確認でき、周辺にはトンバイ・トチンや陶器小片の散布が見られた。物原の存在は確認できなかったが、近くに地元で「屋敷跡」と呼ぶ平地・石垣があり、陶工の屋敷である可能性がある。

(3) 浜玉町（浜崎南部地区）

浜崎南部地区は平成６年度（一部７年度工事分が含まれる）中山間地域農村活性化総合整備事業に伴い確認調査を実施した。

調査は、３地区の離れた個所を対象に行ったが、いずれも浜玉町大字東山田字大原田に所在する。対象地のうち圃場整備工が8.6ha（６－１工区・７－１工区）、農道工が1,276ｍである。

これらの地区は、脊振山地を西流する玉島川によって形成された扇状地の南側に広がる緩やかな台地状丘陵部のうち、横田川が開析する谷部及び谷に向かって伸びる丘陵部周辺に位置する。

６－１工区は、縄文時代及び中世の遺物散布地として周知されている大原田遺跡の範囲に含まれている。標高約55～80ｍの上面が緩やかな舌状丘陵をなしており、棚田・畑として利用されている。この地区は近代以降に区画整理が行われているものと思われるが、現状でも丘陵上を

走る小谷部などを認めることができた。

調査は対象地に、46カ所の試掘坑を設定して行った。その結果、対象地区中央に設けたトレンチの埋土より、黒曜石製石鏃・剝片が数点出土したが、それを包含する層は原層ではなく区画整理時に攪乱を受けているものと認定できた。おそらくこの工事自体がそれほど大規模なものでなく、比較的まとまって遺物が出土したこの付近を中心に存在した包含層が掘削され、攪乱したものであろう。また対象地区北側を西に向かって走る小谷部の一角に設けられた石垣に窯壁片が使用されていたため、この地点周辺に比較的大きめのトレンチを設定したが、窯跡等の存在は確認できなかった。地元の話によると、太平洋戦争直後の短期間に地元の人が火消し壺等を焼いていたとのことで、それに伴うものと推定される。

7－1工区は、横田川沿いの標高約40ｍの水田部である。この谷底水田の下流部で平地を扼する形で突き出た丘陵上には周知の遺跡として袈裟丸城跡が存在する。江戸時代に著された『唐津拾風土記』によると、松浦大明神大宮司袈裟丸式部大輔藤原茂元が延文３(1358)年当地に居城し、またその家臣内山駿河守の末孫が代々当地に居住したと言われている。麓にはその館に伴うという石垣が残存している。

調査は対象地区に９カ所の試掘坑を設定して行った。その結果、山に近い部分で比較的しっかりした黄褐色の砂礫層が確認できたがほとんどのトレンチで比較的新しい時期の横田川の氾濫によるものと思われる砂層ないし砂質土が確認され、摩耗した素焼きの土器片以外は遺構・遺物ともに確認できなかった。

農道工事区は全計画線の内、丘陵尾根部に近く比較的緩やかな地区に４カ所の試掘坑を設けて調査を行った。その結果、遺構・遺物ともに全く確認できなかった。

5．佐賀上場地区の調査

図21　佐賀上場地区周辺地形図（1：100,000）

1．玄海町（有浦上地区）　　3．肥前町（中浦地区）　　①　梨川内村前遺跡
2．　〃　（大瀬地区）　　4．呼子町（小川島地区）　　②　枝去木山中遺跡

(1) 玄海町（有浦上地区・大薗地区）

有浦上地区は、平成６年度県営畑地帯総合土地改良事業に伴い確認調査を実施した。

調査は、玄海町大字有浦上字有川内の14haを対象に行った。

調査対象地は、上場台地中央部から流れ出る有浦川の支流、村川の上流部の南側斜面の傾斜が比較的緩やかな部分に形成された水田及び畑地で、標高は約50ｍである。対象地対岸の丘陵部及び谷部付近には旧石器時代の山ノ神Ⅰ遺跡や縄文時代の山ノ神Ⅱ遺跡などの遺物散布地が周知されていた。

調査は対象地に15カ所の試掘坑を設定して行った。その結果、遺構・遺物ともに確認できなかった。

大薗地区も同じく、平成６年度県営畑地帯総合土地改良事業に伴い確認調査を実施した。

調査は、玄海町大字大薗字繁倉の6.3haを対象に行った。

対象地は２地点に分かれるが、いずれも上場台地北西部の標高約125～140ｍの台地上に立地する。対象地に隣接する丘陵上には縄文時代の遺物散布地である棚橋遺跡が所在する。

調査は、対象地に18カ所の試掘坑を設定して行った。その結果、遺構は確認できなかったが、石銛・石鏃をそれぞれ１点、剥片２点が出土した。これらの遺物を含む層は地表下75cmの位置で層序の状況は悪くはないが、出土位置や状況から遺跡の本体は地区外に存在するものと考えられる。

(2) 肥前町（中浦地区）

中浦地区は、平成６年度県営畑地帯総合土地改良事業に伴い確認調査を実施した。

調査は、肥前町大字中浦字池ノ山・倉ノ下の6.3haを対象に行った。

調査対象地は、上場台地南西部、伊万里湾に面した標高約60～100ｍの傾斜地に立地する。現在は畑地として利用されている。周辺には松ノ下Ⅰ・Ⅱ遺跡、餅田遺跡等の縄文時代の遺物散布地が存在し、また対象地南側の昨年確認調査を実施した地区では石鏃等縄文時代の遺物が出土しており、また今回対象となった地区東側の畑地には遺物の混入が見られた。

調査は対象地に25カ所の試掘坑を設定して行った。その結果、遺構は確認できなかったが、対象地南東部の畑地を中心にナイフ形石器・細石刃・削器・石鏃・石核などが出土し、この付近から地区外にかけての地区を中心に遺跡の存在が考えられる。なお、地区東側中央付近に文政２年銘の庚申尊像が存在する。

(3) 呼子町（小川島地区）

小川島地区は、団体営農道整備事業に伴い確認調査を実施した。

調査は、呼子町小川島の470ｍの農道予定地を対象に行った。

小川島は呼子港の北方約６㎞玄界灘に浮かぶ、面積約0.92㎢の島である。今回対象となった地区はこの島のうち北東部のなだらかな丘陵地である。現況は雑木林となっているが、地区内

には段差を伴う石列や石組の水路、道路状遺構が縦横に走り、これは戦前位までに行われていた畑作に伴うものと思われる。

小川島には、島の中央丘陵を占める小川島遺跡（旧石器～縄文時代の遺物散布地）や南側入江に面した地区の調査で縄文後期の土器、大型石錘・石斧やタイ・イノシシ・シカなどの自然遺物、人骨３体、弥生時代～古墳時代の遺物が出土した小川島貝塚が知られている。そのほか黒曜石の散布は島の中央から西側にかけて見られたが、東部から北部にかけての散布はほとんど確認できなかった。

調査は対象地に20カ所の試掘坑を設けて行った。その結果、遺構遺物ともに確認できなかった。

６．筑後川下流用水事業に係る調査

水資源開発公団（筑後川下流用水建設所）による筑後川下流用水事業に係る文化財の確認調査は、佐賀東部導水路の久保泉南部工区（佐賀市）と、三田川中部工区（三田川町）について行った。

(1)　佐賀東部導水路（城原川以西）・大詫間幹線水路

久保泉南部工区（佐賀市久保泉町大字下和泉字一本椎：確認調査対象面積　2,440㎡）は巨勢川から東に約1.5㎞の地点、標高3.8～4.4ｍの洪積平野から沖積平野に移る付近にある。調査対象地区内に下和泉一本椎遺跡（弥生時代・古墳時代・中世：散布地）を一部含んでいた。周辺には下和泉一本楠・園田・立野遺跡等が存在する。調査は16カ所の試掘坑を設けて行った。その結果、遺構・遺物ともに検出できなかった。

(2)　佐賀東部導水路（城原川以東）

三田川中部第１・第２工区（神埼郡三田川町大字豆田・大字田手：確認調査対象面積：3,525㎡）は脊振山地南麓から延びる吉野ケ里丘陵の南東部、田手川の東岸約600ｍの標高7.5～8.2ｍの平野部に位置する。総延長は810ｍで平成５年度はそのうちの430ｍについて確認調査を行った。第１工区では20カ所、第２工区では５カ所の試掘を行った。その結果、第１工区№18トレンチで円形遺構、第２工区№１～３トレンチで溝状遺構を確認した。また、第１工区№18～20トレンチ及び第２工区№１～５トレンチから土器及び石器が出土している。当該地は未周知であったため、新たに田手二本松遺跡として登録した。

図22　佐賀東部導水路（三田川中部地区）試掘坑配置図

Ⅳ．平成５年度発掘調査の概要

１．牛原前田遺跡（略号：ＦＵＭ）

遺跡の所在地

　鳥栖市牛原町字前田

調査主体者

　鳥栖市教育委員会

調査期間

　平成５年４月～平成６年２月

調査面積

　23,200㎡

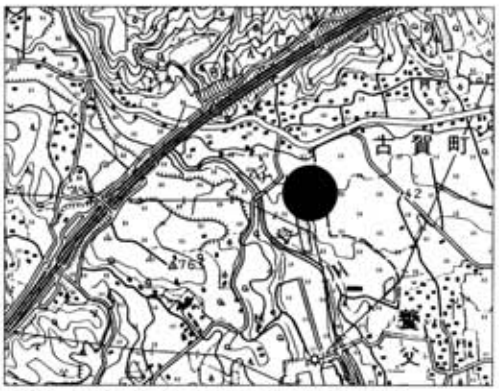


図23　牛原前田遺跡位置図（１/25,000）

遺跡の概要

牛原前田遺跡は、鳥栖市街地の西部、安良川が谷部から平野に流出する地点に形成された扇状地上に立地する。調査区の水田標高は約42～52ｍである。調査区は、９～21の小区に分けて実施した。

確認できた遺構は、古墳時代後期から奈良時代及び平安時代末～鎌倉時代を中心とする集落に伴うものが中心となっており、調査区のほぼ全域に及ぶ。そのほか、縄文時代早期集石遺構、弥生時代前期の住居跡、後期古墳、古代～中世の集落遺構・墓地が確認できた。

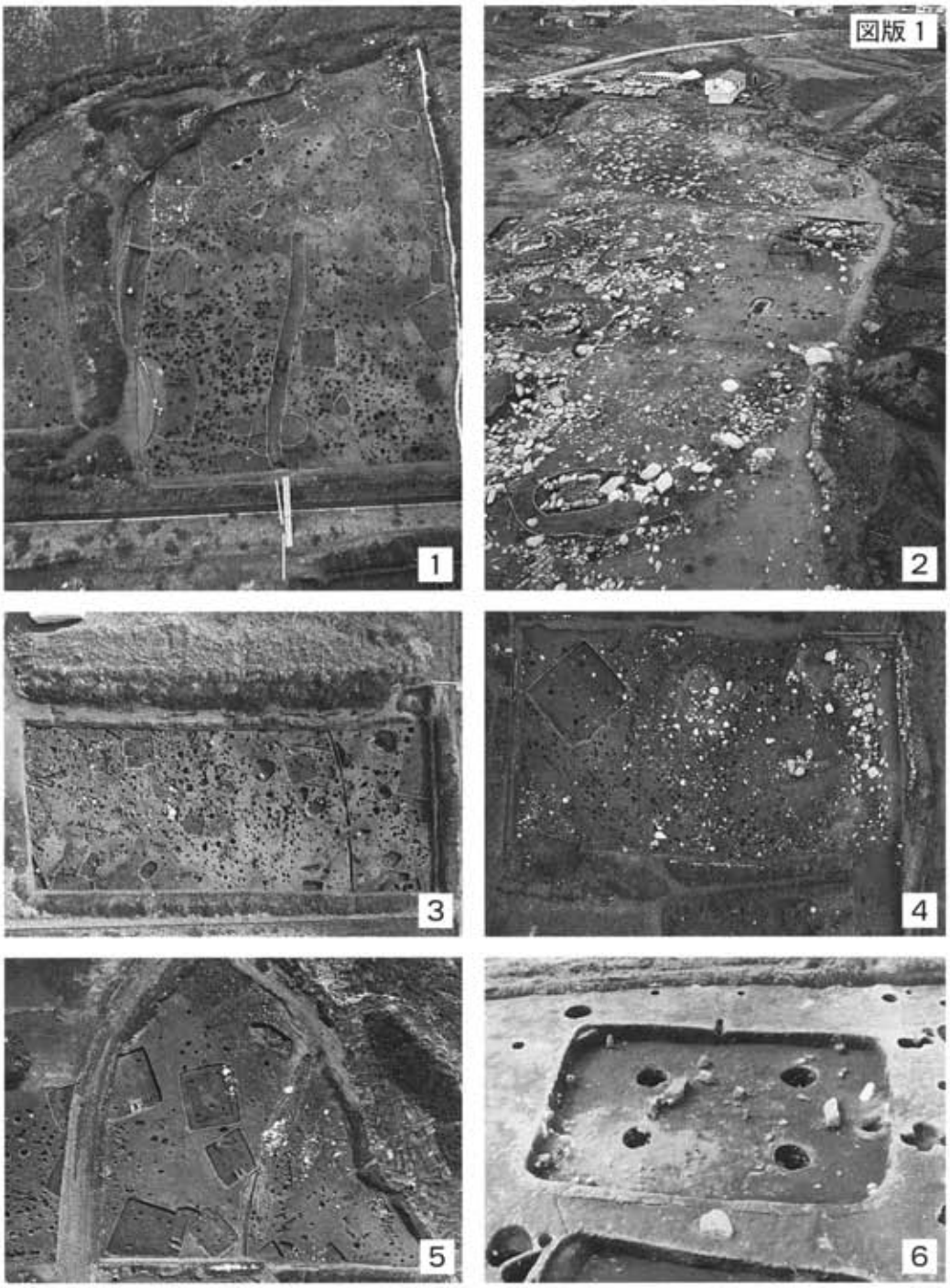
縄文時代の遺構は、19区で確認できた。早期の集石遺構で、曽畑式土器が出土している。

弥生時代の遺物は22区で確認できた。弥生時代前期～中期初頭に位置付けられるものである。

古墳時代後期～奈良時代の遺構は、地区のほぼ全域に及ぶ。住居跡は、９区で10軒、10区で４軒、11区で９軒、12区で６軒以上、13区で７軒、14区で２軒、16区で10軒、18区で１軒、19区で９軒、20区で３軒、22区で４軒と、全体で確認できたものだけでも65軒以上の大集落であると言える。このほか掘立柱建物、土壙、多数の小穴群がある。また対象地区北西部一帯で20基の後期古墳の存在が確認できたが、うち５カ所は痕跡を残すのみであった。注目できるものとしては、12区で一辺７ｍを越える竪穴住居が確認できたことである。なお、対象地区で時期不明の溝跡を多数確認しているが、今後整理によって所属時期の検討を行って行く必要があろう。

古代～中世の遺構としては９・14区で大型掘立柱建物各１棟が確認できたほか、多数の柱穴と思われる小穴群を確認している。14区では古代～中世の建物、溝、ゴミ穴と考えられる土壙がセットで集落をなす形態が確認でき注目できる。そのほか、20区で11世紀のものと思われる木棺墓、13区で室町時代の土壙墓（青磁碗・石製分銅を副葬）、21区で中世の土壙墓など墓地の存在も確認できた。また14区の陶製の四耳壺など注目される遺物も出土しており、古代養父郡における位置付けも考える必要があろう。

以上のように牛原前田遺跡の調査では、規模・性格ともに注目できる資料を多数得ることができた。



1．牛原前田遺跡14区全景　　2．牛原前田遺跡20区全景
3．牛原前田遺跡９区全景　　4．牛原前田遺跡18区全景
5．牛原前田遺跡19区全景　　6．牛原前田遺跡11区全景

2．立石遺跡（略号：ＦＴＴ）

遺跡の所在地

鳥栖市立石町字新開・木ノ元

調査主体者

鳥栖市教育委員会

調査期間

平成５年４月～12月

調査面積

5,000㎡

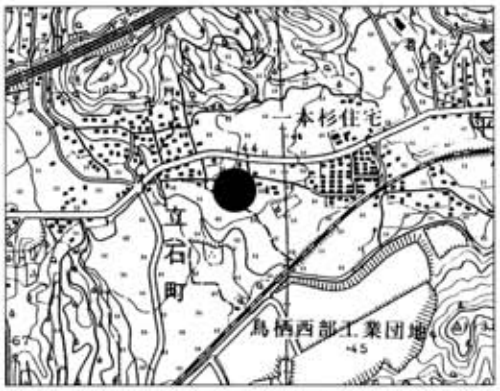


図24　立石遺跡位置図（1/25,000）

遺跡の概要

立石遺跡は、雲野尾峠から南に延びる尾根の先端付近の微丘陵縁辺部、沼川が作る河岸段丘上に立地する。標高約36～40ｍの水田・畑地となっている。

調査は、削平を受ける高地部分を中心に行った。

調査の結果、縄文時代の遺物、古代の集落を確認した。

縄文時代の遺物は、晩期に属する黒川式土器であるが、少量である。

遺跡の主体は、９～10世紀を中心とするころのもので、遺物の量が少なく個々の遺構の時期比定は困難であるが、遺構のほとんどはほぼこの時期のものと考える。

確認できた遺構は、竪穴住居４軒、性格不明の溝２条、円形の土壙、柱穴などで、竪穴住居については明確な時期比定は困難であるが、煙道の構造からこの時期のものと考えた。

この地区と沼川を挟んで対岸の段丘上にも同時期の集落が確認されており、竪穴住居の構造にも共通する特徴が見られる。

今回の調査地点は、遺構密度、遺物の出土量も比較的少なかったが、沼川両岸のこの地区の状況は一連の農業基盤整備事業に伴う調査で明らかになりつつあり、当該地区の集落形成、分布を知るうえで貴重な資料となろう。

1．立石遺跡全景（南から）
2．立石遺跡B－3区（西から）

3．山田古墳群（略号：ＹＫＧ）

遺跡の所在地

三養基郡中原町大字原古賀字鐘突

調査主体者

中原町教育委員会

調査期間

平成５年８月～12月

調査面積

3,700㎡

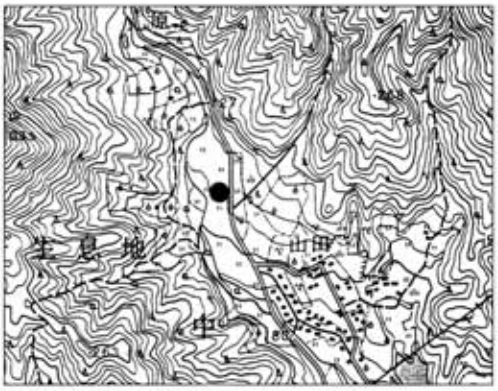


図25　山田古墳群位置図（1/25,000）

遺跡の概要

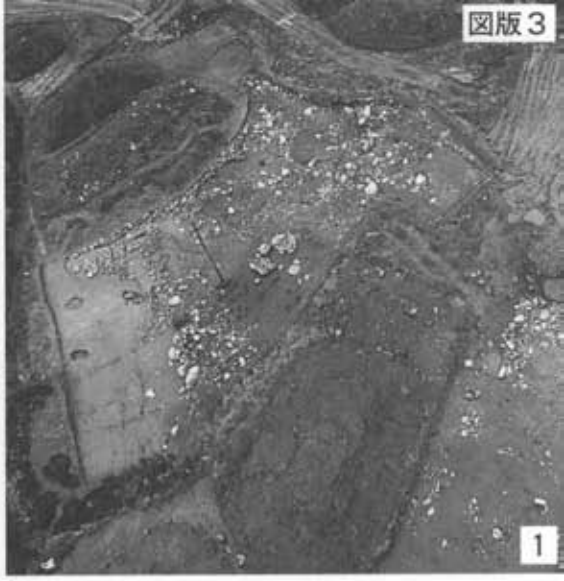
本遺跡は、脊振山系から南にのびる山麓部の西側、寒水川の東側に位置し、標高90ｍの水田部に立地する。調査区は平成４年度の調査区の１区と２区の間で、３地区にわかれており、南側から３区、４区、５区とした。

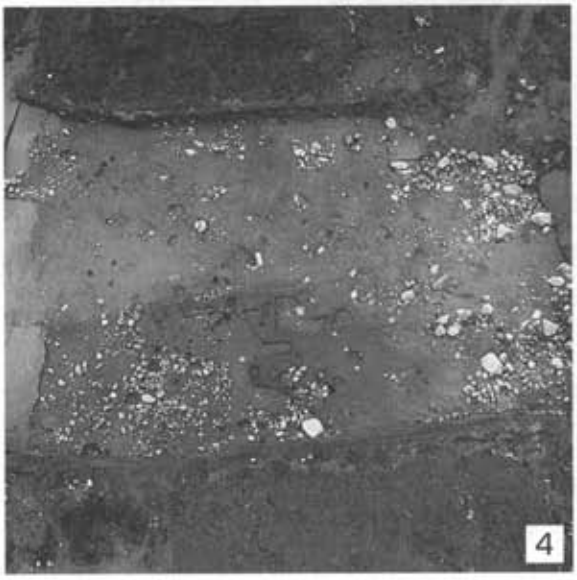
３区は土壙や小穴などの遺構のほかに石敷遺構がある。この遺構は長方形に石を並べたものが４基あり、うち３基が南北に並列し、１基が東西方向に直行する形で作られている。またこの遺構の西側にもこれらの遺構を取り囲むようなかたちで石が並べられている。石組の大きさはそれぞれ異なっており、いちばん長いもので幅１ｍ、長さ４ｍである。また使用している石はいちばん東側のものが大きめの石を使用しているほかはほぼ同じ大きさの石を使用している。当初製鉄関係の遺構の可能性も考えたが、石の上面やその付近は火を受けたような痕跡はなく、石の下にも掘り込み等の施設は確認されなかった。また土師器の小片などのほかは遺物がほとんど出土せず、時期の特定はできなかった。現段階ではこの遺構の性格は不明であるが、１区で検出された道状の石敷遺構とあわせて今後の研究課題といえよう。

４区で検出できた遺構には土壙や小穴があり、縄文時代中期から後期の土器片や石器片のほか古代の須恵器、土師器、中世の陶磁器片が出土している。

５区には谷状の落ち込みが見られ、縄文土器などが出土している。

今回の調査では縄文時代や古代から中世の遺跡の存在が確認でき、石敷遺構のような特殊な遺構を確認するなど大きな成果をあげることができたが、『肥前風土記』にでてくる６世紀後半における兵器の製造にかかわるような遺構や遺物は確認できなかった。今後の山田地区の調査に期待したい。





1．山田古墳群3区全景
2．山田古墳群3区敷石遺構南側
3．山田古墳群3区敷石遺構北側
4．山田古墳群4区全景
5．山田古墳群5区全景

4．若宮八幡神社遺跡（略号：ＷＨＪ）

遺跡の所在地

三養基郡中原町大字原古賀字前田

調査主体者

中原町教育委員会

調査期間

平成５年12月～平成６年２月

調査面積

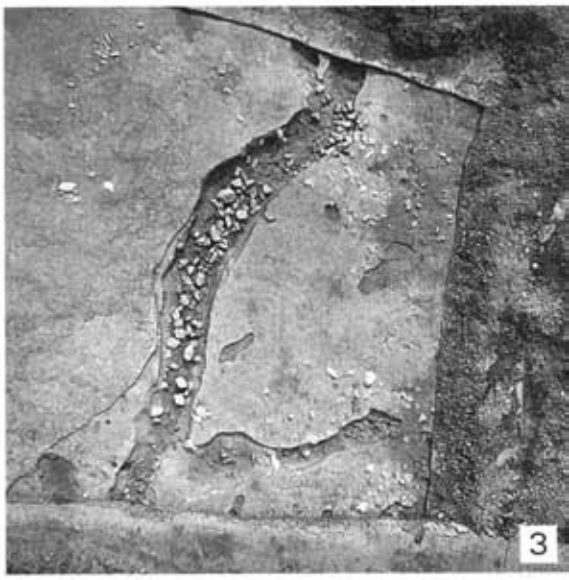
1,100㎡

図26　若宮八幡神社遺跡位置図（1/25,000）

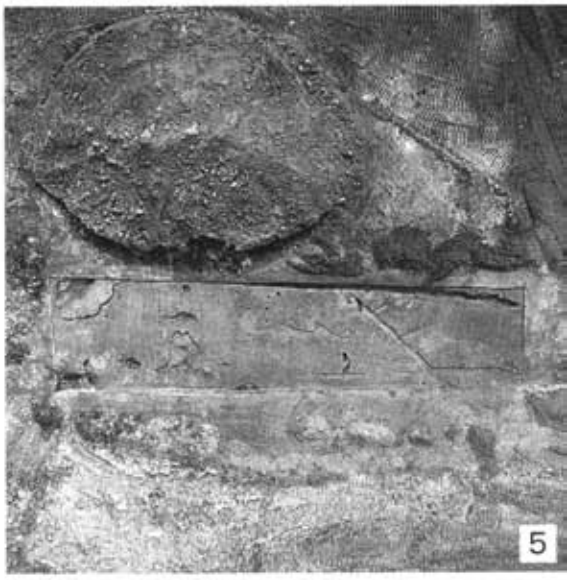
遺跡の概要

若宮八幡神社遺跡は、脊振山系より南にのびる段丘の東側縁辺部に位置し、標高は約50ｍの水田部である。平成４年度調査区の北側にあたる。調査区は３地区にわかれており、北から２区、３区、４区とした。この丘陵の先端付近には、姫方前方後円墳を中心とする古墳群や弥生時代の墓地の存在で著名な姫方遺跡や弥生時代を中心とする集落が確認された姫方原遺跡が存在する。

２区、３区、４区とも古代から中世の集落跡で、遺構の密度は低く、かなり削平を受けていると考えられる。遺構には溝、土壙、小穴などがあり、遺物としては須恵器、土師器、陶磁器などが出土している。３区で確認できた溝は幅約１ｍで蛇行しながら南北に伸びており、遺構埋土中からは人頭大の石が落ち込んだ状態で確認できた。遺物は土師器片が出土したほか、溝のすぐ西から龍泉窯系の青磁碗が出土した。



1．若宮八幡神社遺跡全景（北から）
2．若宮八幡神社遺跡2区全景
3．若宮八幡神社遺跡2区溝
4．若宮八幡神社遺跡3区全景
5．若宮八幡神社遺跡4区全景



5．西寒水四本柳遺跡（略号：ＮＹＹ）

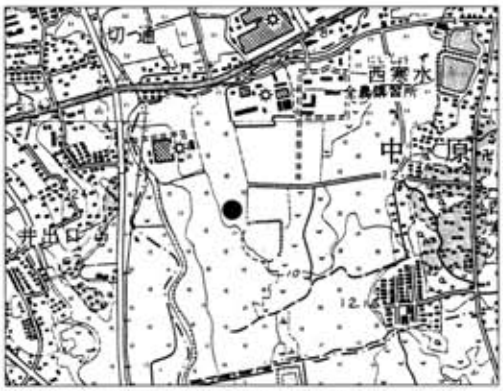


図27　西寒水四本柳遺跡位置図（1/25,000）

遺跡の所在地

三養基郡中原町大字原古賀字四本柳

調査主体者

中原町教育委員会

調査期間

平成５年８月～12月

調査面積

1,800㎡

遺跡の概要

西寒水四本柳遺跡は、脊振山系より南に伸びる低位段丘の西側縁辺部にあたり、標高約11～12ｍの水田部に立地する。当該遺跡の北方、この丘陵の上位部では、弥生時代の数百基に及ぶ甕棺墓が調査された船石南遺跡や、支石墓・集落などが調査された船石遺跡が立地する。

調査区は３地区にわかれており、北側から１区、２区、３区とした。

１区、２区共に確認できた遺構には溝、土壙、小穴があるが、調査区の大半は自然流路である。溝は自然流路につながるものとそうでないものがあり、時期が判明したものは弥生時代中期のもので壺や高杯などが出土した。その他の遺構からは土器の出土がほとんどなく時期を特定できなかった。自然流路は南北に流れており、埋土から弥生土器、布留式の甕、須恵器、土師器、陶磁器などが出土した。注目できる遺物として、流路内から７世紀前半頃の須恵器の杯蓋のセットがまとまって出土しており、水辺におけるなんらかの祭祀行為が行われていた可能性がある。

３区で検出できた遺構は溝、小穴、土壙がある。溝は南北に直線的に伸びており、幅約３ｍ、深さ１ｍの大溝である。埋土中から土師器、青磁碗等が出土したが出土量は少ない。時期は13世紀頃のものと推定される。小穴や土壙からは土器の出土はほとんどなく、時期の決定はできなかった。

今回の調査では、集落の西側の広がりが確認でき、７世紀における土器のセットが出土するなど貴重な成果をあげることができた。

西寒水四本柳遺跡1区全景（南から）

西寒水四本柳遺跡2区全景（南から）

6．西寒水七本柳遺跡（略号：ＮＮＹ）

遺跡の所在地

三養基郡中原町大字原古賀字七本柳

調査主体者

中原町教育委員会

調査期間

平成５年10月～平成６年２月

調査面積

1,900㎡

図28　西寒水七本柳遺跡位置図（1/25,000）

遺跡の概要

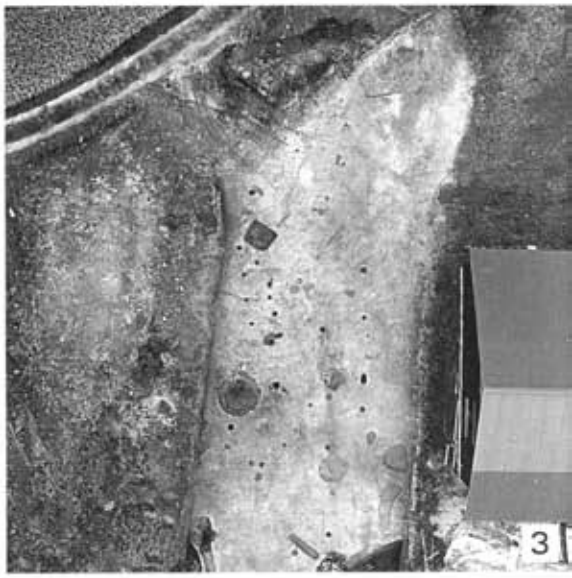
西寒水七本柳遺跡は、脊振山系南麓に広がる洪積台地の南縁付近の低位段丘に立地し、標高は約11ｍである。この丘陵は切通川が作る段丘となっており、当該遺跡の北方、この丘陵の上位部では、弥生時代の数百基に及ぶ甕棺墓が調査された船石南遺跡や、支石墓・集落などが調査された船石遺跡が立地する。

調査は、３地区に分けて行った。

１区は弥生時代及び鎌倉時代の集落跡である。弥生時代の遺構には溝、土壙がある。溝は調査区内で直径20ｍほどの半円形に回っており、幅約２ｍ、深さ約0.8ｍ、断面Ｖ字形である。溝内からは底面付近からほぼ完形の弥生時代中期前半の甕や器台、上面付近から中期から後期の甕、壺、高杯等の破片が出土した。土壙は２基確認し、中期後半頃の土器片が出土した。鎌倉時代の遺構は溝、土壙がある。溝は幅0.3ｍ、深さ0.1ｍほどの小溝で、南北に伸びている。中からは土師皿や青磁の破片が出土した。土壙は長方形を呈し、埋土中からは須恵器の甕、土師皿、白磁皿、鉄滓が出土した。また焼けた石が多量に入っており、鉄滓の出土とあわせて考えるとこの付近で製鉄が行われていた可能性もある。

２区は１区の東側に位置し、遺跡の内容は鎌倉時代の集落跡である。確認できた遺構には溝と小穴があり、溝は東西に伸びるもので、埋土中より青磁碗等が出土した。

今回の調査は、遺跡の全体から考えれば、狭い地区の調査であるため、遺跡の全容をつかむには至らなかったが、弥生時代及び中世の集落の構造を考えるうえで重要な資料を得ることができた。今後周辺の調査が進むことによって、具体的な古代・中世の様相を明らかにして行かなければならないが、今回の調査はそのための重要な資料となりえよう。



1．西寒水七本柳遺跡全景（南から）
2．西寒水七本柳遺跡全景（北から）
3．西寒水七本柳遺跡北側（南から）
4．西寒水七本柳遺跡北側（北から）
5．西寒水七本柳遺跡弥生時代溝（西から）

7．孫左エ門塚遺跡（略号：ＭＺＭ）

図29　孫左エ門塚遺跡位置図（1/25,000）

遺跡の所在地

三養基郡中原町大字原古賀字孫左ェ門塚

調査主体者

中原町教育委員会

調査期間

平成５年９月～12月

調査面積

1,500㎡

遺跡の概要

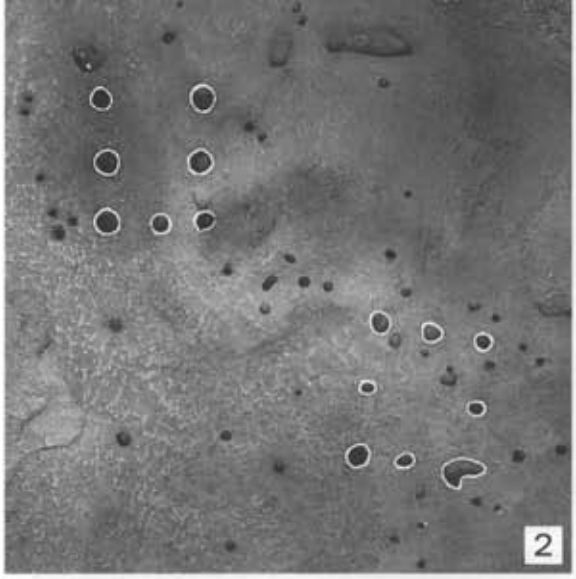
孫左エ門塚遺跡は、脊振山系から南に伸びる台地の西側縁辺部にあたり、遺跡の西側を山ノ内川が流れている。地山はローム及び黒色の堆積土からなり、縄文時代の遺物をわずかに含んでいる。

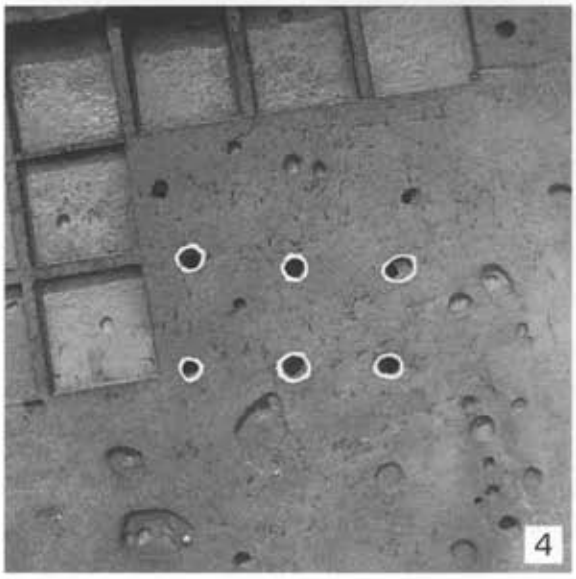
調査は、削平予定地について実施したが、水田標高は約15ｍとなっている。

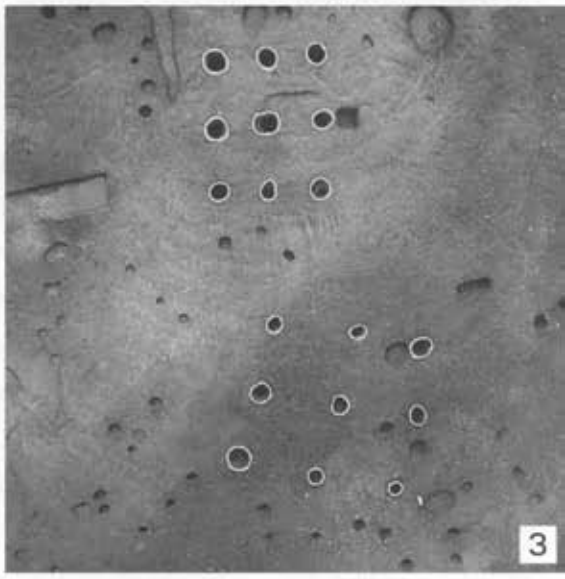
本遺跡は縄文時代から古代にかけての集落跡で、縄文時代早期、弥生時代中期、６世紀後半から８世紀頃の遺物が出土している。また縄文時代の包含層から土器片や石斧が出土した。

確認した遺構は竪穴住居２棟、掘立柱建物（１×２間２棟、２×２間１棟、２×２間総柱２棟)、土壙、溝、小穴がある。竪穴住居は方形４本柱のものと楕円形のものがあり、時期は方形が６世紀後半、楕円形のものは土器がほとんど出土しておらず詳しい時期は不明である。掘立柱建物は正確な時期は不明であるが、わずかに出土した須恵器片から見ると７世紀～８世紀頃であろう。土壙は縄文時代、弥生時代、古代のものがあり、縄文時代の土壙からは縄文時代早期末のものとみられる甕片が、弥生時代のものは中期後半頃の甕、壺が出土した。古代のものは須恵器、土師器片が出土しているが出土量は少ない。溝は弥生時代中期のもので、幅0.6ｍ、深さ0.1ｍ、長さ10ｍほどの小さい溝である。中から土器片がわずかに出土した。

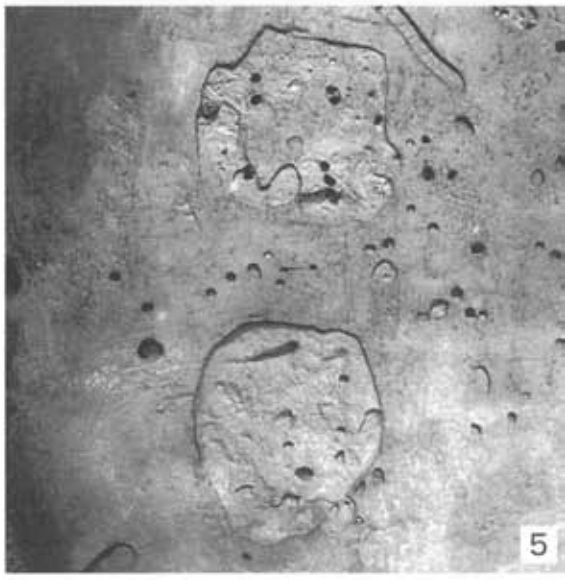
今回の調査では、遺跡の全体から考えれば狭い地区の調査であるため、遺跡の全容をつかむには至らなかったが、町内であまり出土例のない縄文時代早期末の遺構が確認でき、弥生時代及び古代の遺跡の広がりが確認されるなど貴重な成果をあげることができた。







1．孫左エ門塚遺跡全景
2．孫左エ門塚遺跡北側掘立柱建物
3．孫左エ門塚遺跡南東側掘立柱建物
4．孫左エ門塚遺跡南側掘立柱建物
5．孫左エ門塚遺跡竪穴式住居



8．石井一本松遺跡（略号：ＩＩＭ）

遺跡の所在地

三養基郡中原町大字原古賀字一本松

調査主体者

中原町教育委員会

調査期間

平成５年10月～平成６年３月

調査面積

4,800㎡

図30　石井一本松遺跡位置図（1/25,000）

遺跡の概要

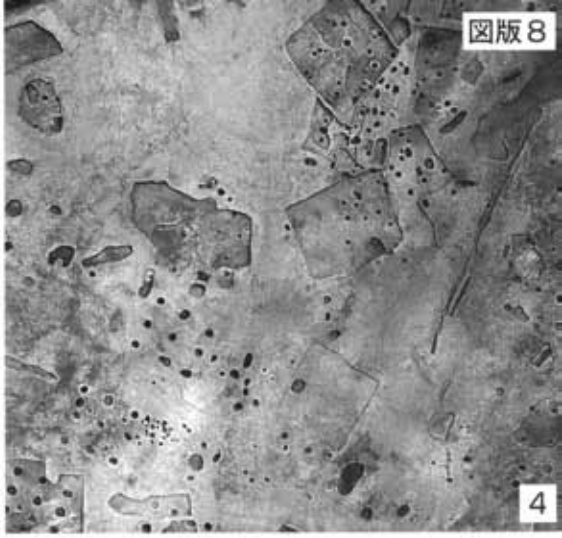
石井一本松遺跡は、脊振山系から南に伸びる台地の東側縁辺部にあたる。遺跡の東側を山ノ内川が流れており、地山は一部川の氾濫原となっている。当該地区の西側丘陵のやや北方には、姫方前方後円墳を中心とする古墳群や弥生時代の墓地の存在で著名な姫方遺跡や弥生時代を中心とする集落が確認された姫方原遺跡が存在する。

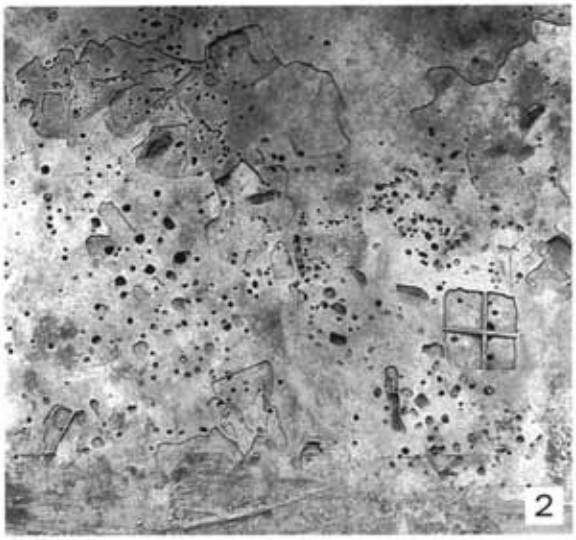
調査は、削平予定地について実施したが、水田標高は約14～15ｍとなっている。

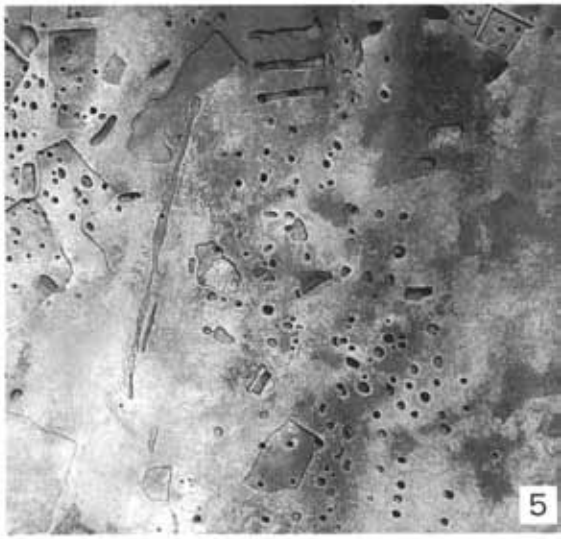
調査の結果、弥生時代中期、古墳時代前期及び６世紀後半から８世紀にかけての集落跡であることが確認できた。

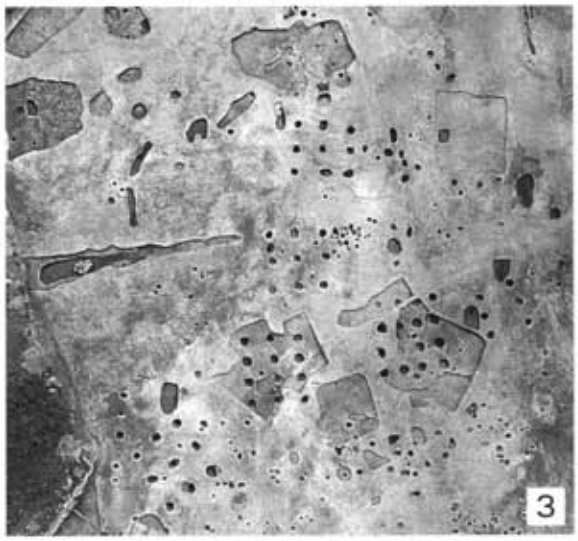
弥生時代中期の遺構には土壙がある。土壙は楕円形及び不定形を呈し、出土遺物は甕、壺等があるが出土量は少ない。古墳時代前期の遺構には竪穴住居がある。住居跡は確認できたのは１棟のみで、３分の１ほどを確認した。内部からは完形の高杯１点及び甕、壺の破片が出土した。６世紀後半から８世紀の遺構は竪穴住居10棟以上、掘立柱建物（１×２間、２×２間総柱、２×３間総柱、３×３間総柱）、土壙、溝、小穴多数があり、本遺跡の中心となる時期である。竪穴住居はかなり削平を受けており、壁が10cmほどしか残っていないものが多いが、遺物は須恵器の杯蓋や土師器の甕などがややまとまって出土している。掘立柱建物は倉庫と見られる総柱建物が多く、２間×３間や３間×３間などの大型の建物も見られるが、方向性に余り規則性は見られない。また１軒だけだが町内では類例の少ない布掘の建物もある。土壙は方形を呈するものと不整形のものがあり、方形のものから焼土や礫とともに土師器の完形の杯蓋と甕が出土したが、全体に土壙からの土器の出土量は少ない。溝は調査区のやや南寄りに東西に伸びるものが１条あり、東にいくほど深くなっている。埋土中より須恵器の甕や土師器の甕とともに30cmほどの礫がまとまって出土した。

今回の調査ではこれまで資料の少なかった６世紀後半の集落が確認され、また古代の遺跡の広がりが判明するなど貴重な成果をあげることができた。









1．石井一本松遺跡全景
2．石井一本松遺跡北側
3．石井一本松遺跡中央
4．石井一本松遺跡中央南側
5．石井一本松遺跡南西側
6．石井一本松遺跡東側

9．八藤（やとう）遺跡（略号：ＹＴＯ）

遺跡の所在地

三養基郡上峰町大字堤字迎原

調査主体者

上峰町教育委員会

調査期間

平成５年４月～平成６年１月

調査面積

5,000㎡

図31　八藤遺跡位置図（1/25,000）

遺跡の概要

八藤遺跡は、脊振山系から派生する標高22ｍ～36ｍの中位舌状丘陵上（八藤丘陵と仮称）に立地する、縄文時代から中世にわたる複合遺跡である。この南北に延びる丘陵は、西の二塚山丘陵と東の船石丘陵の中間に位置し、西を切通川、東を切通川の支流大谷川に開析され、東西の両丘陵から独立した丘陵となっている。

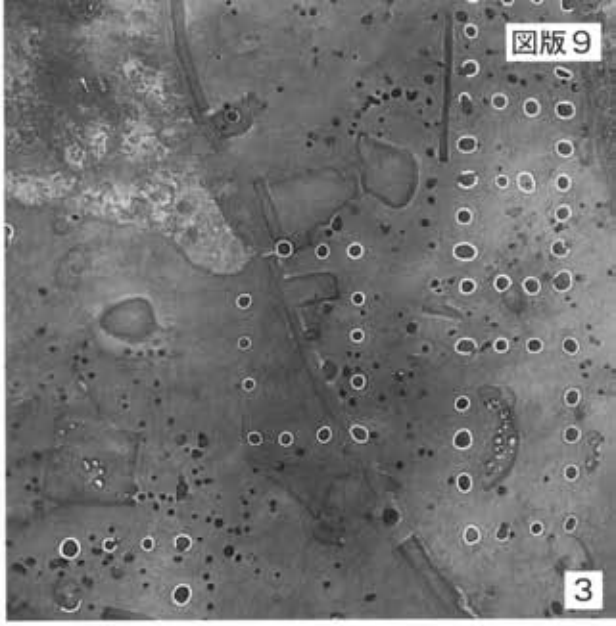
本遺跡の周辺には、西方の二塚山丘陵上に二塚山遺跡、五本谷遺跡、切通遺跡、一本谷遺跡などが分布している。東方の船石丘陵上には船石遺跡群が所在しており、弥生時代を中心とした遺跡が濃密に分布することが明らかになりつつある。また二塚山・八藤の両丘陵間の谷部を遮断する形で築かれた堤土塁跡が近接する。

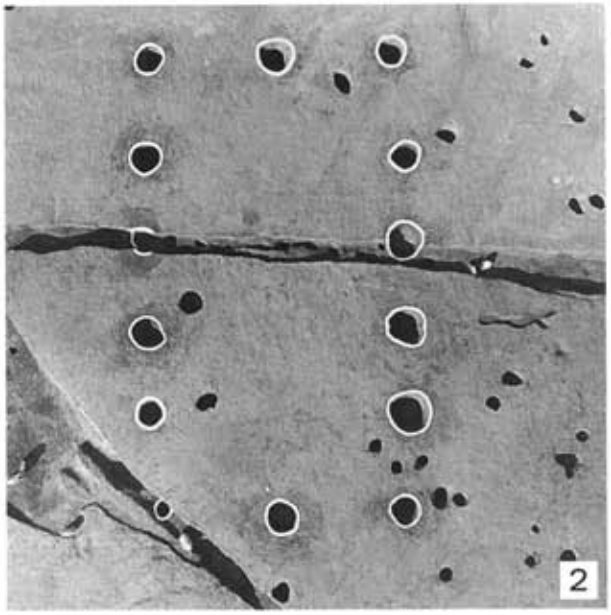
調査は、面工事で削平される部分と水路工事で掘削される5,000㎡（X・XI区）について実施した。

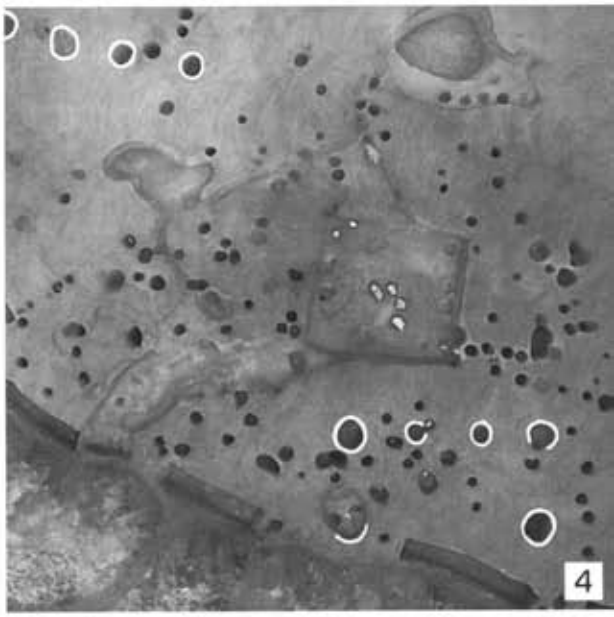
X区の調査では、奈良時代の掘立柱建物２棟、土壙数基を確認したほか、時期が明確でない小穴多数を確認した。

XI区の調査では、奈良から平安時代の掘立柱建物７棟、竪穴住居３軒、土壙数基を確認したほか、縄文時代の所産と考えられる土壙も数基確認した。

今回の調査によって、奈良から平安時代の集落跡の縁辺部に相当することが判明したが、平成元年度から実施してきた八藤丘陵上の調査がほぼ終了したことにより、これらの調査結果を踏まえたうえで考察する必要がある。







1．八藤遺跡－10・11区調査区全景（南から）
2．掘立柱建物跡－10区（写真上方が北）
3．掘立柱建物跡－11区（写真上方が北）
4．竪穴式住居跡－11区（写真上方が北）
5．SH-036住居跡－11区（写真上方が北）

10. 八藤（やとう）遺跡（略号：ＹＴＯ）

遺跡の所在地

三養基郡上峰町大字堤字迎原

調査主体者

上峰町教育委員会

調査期間

平成５年４月～10月

調査面積

560㎡

図32　八藤遺跡位置図（１/25,000）

遺跡の概要

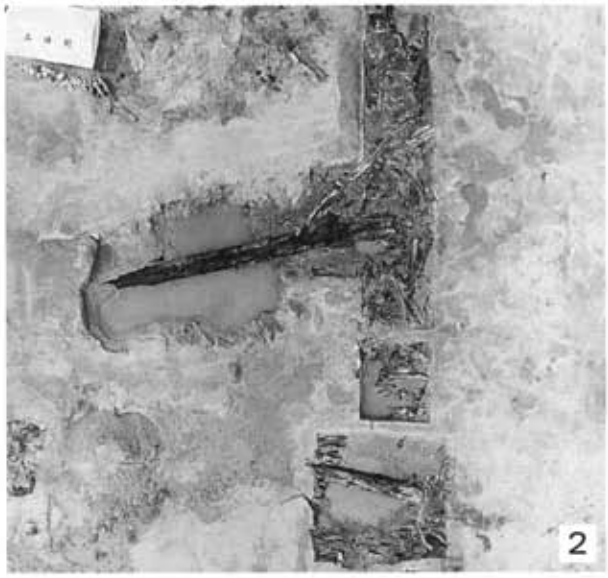
八藤遺跡は、脊振山系から派生する標高22ｍ～36ｍの中位段丘上（八藤丘陵と仮称）に立地する、縄文時代から中世にわたる複合遺跡である。

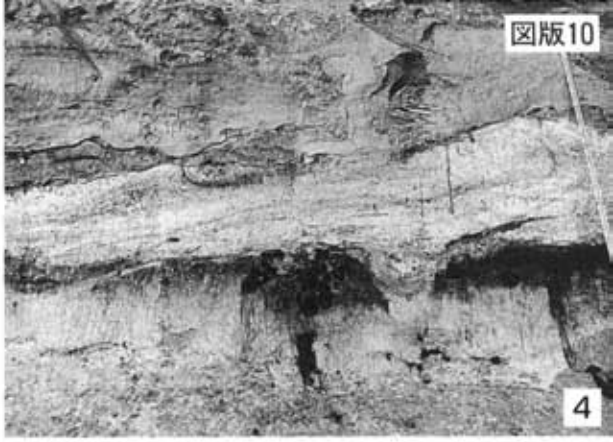
平成５年２月、平成４年度農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査（ＹＴＯ―Ⅶ・Ⅷ区）を終えた丘陵を３ｍ程の深度で切り下げる圃場基盤造成工事中に長さ22ｍ、幹の直径1.5ｍという巨大な倒木が、多数の樹木片とともに発見された。

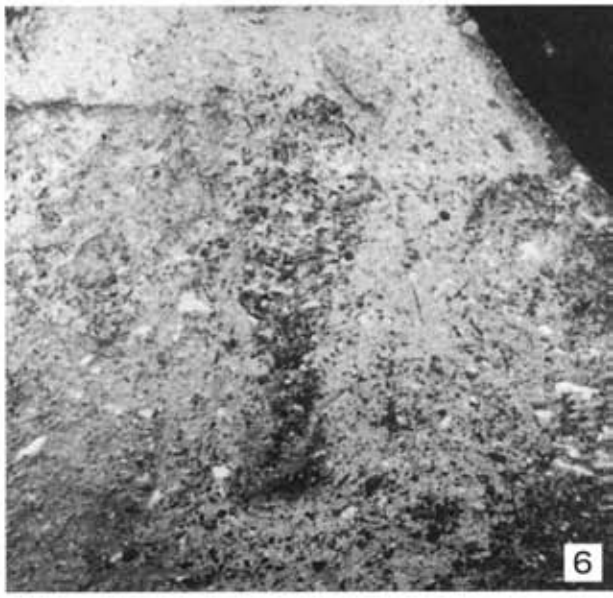
その後、この倒木群の性格把握のための確認調査を実施し、これらは8.9万年±0.7万年前に起きた「Aso－４」と呼ばれる火山活動に伴う大火砕流によりなぎ倒された当時の森林の跡であることが判明した。これを受けて、圃場整備施行地区のうち面的工事分約12,000㎡について工事の中断を申し入れ保存を図ることとした。

本調査は、平成５年４月から10月まで、保存対象区域約12,000㎡の内、確認調査で３本の巨木が検出された部分を南北に貫く幅５ｍのトレンチ（南北トレンチ）と火砕流堆積層下の旧地表面の状態が良好で露出作業が比較的容易な部分（№６トレンチ）の２カ所を重点的に行った。調査では、火砕流堆積層からは大小の樹木片が多数出土し、同層の上下の地層からは種子や花粉などの植物遺体、昆虫遺体などが検出された。当初、火砕流以前の旧地表面における旧石器時代文化の存在も期待されたが、残念ながら当時の遺物・遺構、あるいは動物遺体は検出できなかった。しかし、これらの出土資料の分析を通じて八藤遺跡が大火砕流の被災地としてその痕跡を良好に止めていること、火砕流とその上下の地層および埋没林が提供する各種の自然科学的なデータはAso－４火砕流自体の解明と北部九州の当時の環境から今日の自然への変遷を考えるうえで必要不可欠な貴重なものであることなど学術的に高い評価を得ている。

さらに今回の調査で得られたこれらのデータは、第四紀後期の日本列島全域を覆う広域テフラであるAso－４降灰層を媒介とすれば、今後国内で行われるであろう同降灰層、火砕流堆積層関連の調査で得られる遠隔地の資料との直接対比が可能であり、当時の日本列島の姿を復元する際の基礎的なデータといえよう。







1．調査区全景（西から）
2．No.1・No.2巨木－南北トレンチ
（写真上方が北）
3．旧地表面直上の倒木群－No.6トレンチ
（写真上方が北）

4．八藤丘陵の地層－調査区北壁
上層から大曲層、阿蘇4火砕流堆積層（八女粘土層：中央白っぽい部分）、香田層（黒っぽい部分が旧地表表土）
5．発見当時のNo.1巨木－幹に残る窪みは、他の樹木との衝突痕
6．阿蘇4火砕流堆積物中に残る「煙の化石」現象

11．本村五本柳遺跡（略号：ＨＹＹ）

遺跡の所在地

神埼郡千代田町大字境原字四本柳

調査主体者

千代田町教育委員会

調査期間

平成５年11月～12月

調査面積

800㎡

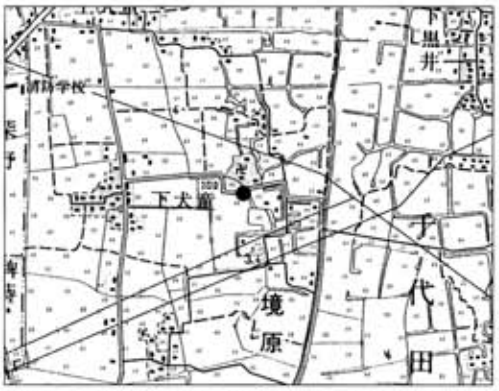


図33　本村五本柳遺跡位置図（1/25,000）

遺跡の概要

本村五本柳遺跡は千代田町の北西部、中地江川西方300ｍの標高3.2ｍの沖積平野に位置する。この地は江戸時代まで鍋島藩の狩場として利用されていた場所で、小高い丘陵に藪が生い茂った場所であったといわれているが、現在では開墾され水田となっている。遺跡は、この丘陵の南側縁部に位置する場所で、本村五本柳遺跡など中・近世の遺跡が存在する。また周辺には、貴別当神社遺跡、姉遺跡など弥生時代の集落遺跡、貝塚などが存在する。

調査は、支線水路として掘削される部分について実施した。検出した遺構は、土壙５基、溝跡４条、その他不明遺構１基、大小多数の小穴である。また調査区中央には東西に延びる大きな溝跡を確認したが、これは中世に機能していたクリーク（濠）を埋め立て、現在まで水田として利用された部分と考えられる。

出土した遺物は、中世の土師器、土師質土器、近世の肥前系陶磁器、石器などで、その出土量はコンテナ４箱程度である。

以上のようにこの遺跡は遺構の数、遺物の量は少なく、また調査範囲も狭かったため遺跡の性格等を考察するには得られた資料が少なかったが、平成６年度に現在の調査区の北方約200ｍの地点の調査を実施する予定であり、この地区の調査結果と併せて考察を行うことで、この地区の中近世集落の様相を明らかにしていきたい。

1．本村五本柳遺跡A地点全景
2．調査風景
3．SKOO5 土壙
4．本村五本柳遺跡B地点全景

12. 野田遺跡（略号：ＮＯＡ）

遺跡の所在地

佐賀市金立町大字金立字野田

調査主体者

佐賀市教育委員会

調査期間

平成５年８月～10月

調査面積

1,338㎡

図34　野田遺跡位置図（1/25,000）

遺跡の概要

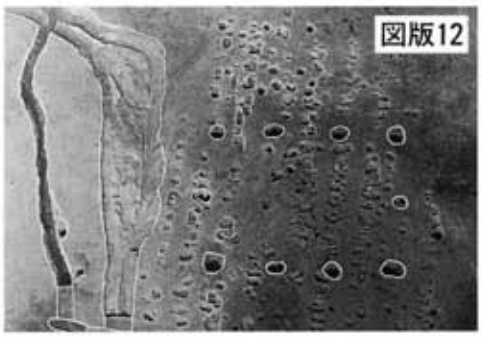
野田遺跡は佐賀市域の北部にある金立町に所在し、地理的には脊振山系から派生した低丘陵先端が、巨勢川等により形成された複合扇状地と接するあたりに立地している。周辺は水田化が進んでおり、開墾により消滅した遺構が数多くあると思われる。今回の調査地点は野田集落の北に広がる田畑部分で、その標高はほぼ13.5ｍ前後である。

検出した遺構は、掘立柱建物３棟（２間×３間の東西棟で総柱のもの１棟、１間×３間の南北棟で東西両面に廂を持つもの１棟、１間×２間の南北棟１棟）、井戸跡２基（直径1.2ｍ、深さ1.2ｍと直径2.1ｍ、深さ1.5ｍ）、溝６条、土壙１基、その他不明遺構や小穴が多数ある。時期的には12～14世紀所産の遺構が主体である。

出土遺物は、土師器（皿・杯・碗・釜・鍋）、瓦器（碗・湯釜・壺・鍋）、磁器（壺・碗・染付）、陶器、石製品（石臼）、縄文土器等がある。

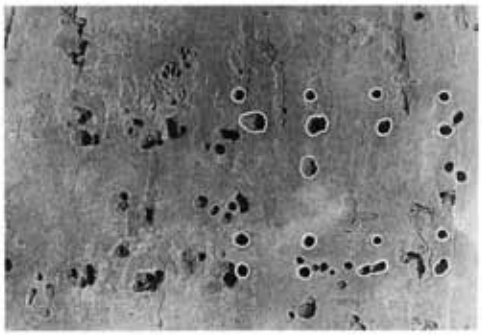
これらの中で代表的な遺構としては、ＳＢ152、ＳＥ106、ＳＤ103、ＳＤ112、ＳＫ113などがある。ＳＢ152は東西両面に廂をもった１間×３間の建物で、西隣の溝ＳＤ103に並行して建っている。これは他の２棟の建物も同じで、いずれも西に30度振れており、東西棟と南北棟の主軸はほぼ直行していることから、何らかの関係があるものと思われる。ＳＥ106は、調査区のほぼ中央に位置し、直径2.1ｍ、深さ1.5ｍを測る。平面は不整円形をなし、壁は四方とも垂直に近い角度で立ち上がっている。２条の溝はともに調査区外に延びていてはっきりしないが、ほぼ直角的に曲がっており、区画溝でこの調査区を囲っているように思われる。ＳＤ103では土師器をはじめたくさんの遺物が出土した。ＳＫ113は、直径1.2ｍ、深さ0.2ｍ前後の不整楕円形である。埋土中からほぼ復元可能な土師器と銅銭が出土した。これは投棄や流れ込みとは考えられず、祭祀目的のものと思われる。このような検出例は佐賀市域で初めてのものであり、どのような性格のものであるかは今後の調査例の増加を待って再検討したい。

1．SD103 溝（南から）



2．SD103・SD104・SB151（南から）

3．SK113土壙（南から）



4．SB152とSK113（西から）

5．野田遺跡調査区全景（東から）

13. 友貞（とぶき）遺跡（略号：ＴＢＳ－７）

遺跡の所在地

佐賀市金立町大字千布字友貞

調査主体者

佐賀市教育委員会

調査期間

平成５年８月～６年２月

調査面積

4,289㎡

図35　友貞遺跡位置図（1/25,000）

遺跡の概要

友貞遺跡は佐賀市域北部の金立町に所在し、佐賀市中心部に位置する佐賀市役所からは北々東4.3kmに位置する。脊振山系から派生する洪積台地（低位段丘面）上に立地するが、現況での段位は周辺の水田面に埋没し不明瞭である。今回の調査区は、削平される高畑部分と田面に掘削される水路部分に分かれるが、すべて互いに接するので一括して友貞遺跡７区とした。

友貞遺跡７区の東側では、友貞遺跡１～６区の調査が行われ、平安時代前半期と室町時代を主体とする集落跡が検出されている。今回の調査結果と合わせて考えると、友貞遺跡７区とは一連の集落地であろう。

友貞遺跡７区の主体をなす高畑部分の北側には周辺の田面との比高２ｍほどの土塁が残存しており、調査前から戦国期の神代氏「土生島砦」にあたる可能性が指摘されていた。また、北東には同じく「千布城」の推定地がある。

調査の結果、江戸時代・室町時代・鎌倉時代・平安時代前半期・弥生時代中期の遺構・遺物

1．友貞遺跡７区南東側（北から）
2．友貞遺跡７区北東側（西から）
3．二重掘のクランク部

14. 大西屋敷遺跡（略号：ＯＮＹ－２）

遺跡の所在地

佐賀市鍋島町大字八戸溝

調査主体者

佐賀市教育委員会

調査期間

平成５年８月～６年２月

調査面積

1,200㎡

図36　大西屋敷遺跡位置図（1/25,000）

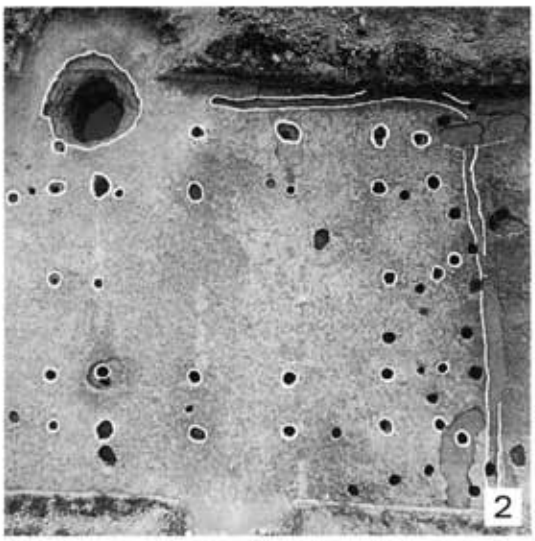
遺跡の概要

大西屋敷遺跡は、平成３年度実施の確認調査により発見された遺跡で、佐賀市域南西部の鍋島町に所在し、嘉瀬川中流域東岸約1.3kmの標高約３ｍ程の低平な水田地帯に位置する。

大西屋敷遺跡としては平成４年に１区の本調査を行っており、中世の屋敷遺跡である遺構・遺物を検出している。今回の調査は１区の北東部分に接する地点に位置し、ほぼ同時期の中世の遺構・遺物を検出した。検出した遺構には掘立柱建物・柵列・井戸・溝・土壙がある。

検出した遺構のうち、掘立柱建物は１×２間、１×３間、２×４間の規模の建物を確認した。特に、ＳＢ206とＳＢ207の２棟は２×４間の東西棟建物の４面に廂が付属するものであり、今回確認した中では最も大型であることから、屋敷地内で中心的役割を持った建物であったことが考えられる。井戸はいずれも素掘りのものである。埋土中から土師器（皿・杯）、瓦器（皿・碗）等の遺物が多く出土しており、これらは廃棄の際投棄されたものと考えられる。溝は屋敷地の区画溝と考えられるものを検出したが、いずれも調査区外に展開しているためその全容は明確でない。他に、ＳＢ206に付随し、雨水溜め的性格を有すると考えられる小溝も確認した。土壙は平面形が不定形なもので、溝の終結地点に位置していることから溜め桝的性格を持つものであることが考えられる。

今回の調査地は、検出した遺構・遺物から平安時代～鎌倉時代に営まれた屋敷地跡であることがわかった。前年度の調査でも屋敷地の一部を確認しているが、今回の調査部分はそれとほぼ同時期に営まれた別区画の屋敷地跡であることが考えられる。



1．大西屋敷遺跡２区全景
2．SB206掘立柱建物跡
3．SE201井戸
4．SK236遺物出土状況

15．渕遺跡（略号：ＦＣＩ―１・２）

遺跡の所在地

佐賀市兵庫町大字渕

調査主体者

佐賀市教育委員会

調査期間

平成５年11月～６年２月

調査面積

1,590㎡

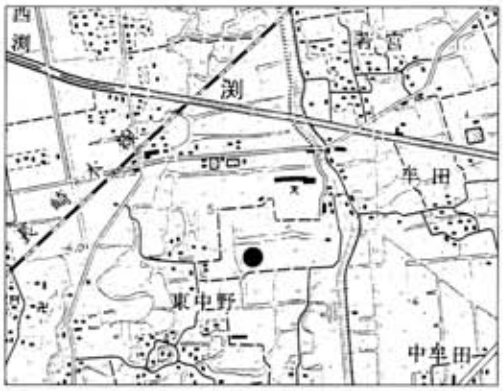


図37　渕遺跡位置図（1/25,000）

遺跡の概要

渕遺跡は佐賀市域西部の標高３ｍ程の水田地帯に位置する。本遺跡は平成４年度の確認調査で、周知の埋蔵文化財包蔵地外で新たに発見された遺跡である。

今回の調査で弥生時代中期に属する遺構・遺物を検出した。検出した遺構には井戸・土壙・小穴等がある。

１区

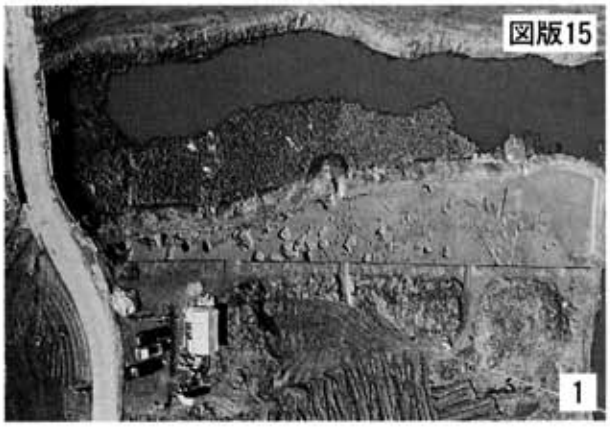
井戸・土壙・小穴等の遺構を確認した。確認した遺構のうち、井戸は径1.5ｍ、深さ1.8～２ｍを測る素掘りのもので、底面付近からは投棄されたと思われる甕・壷・高杯・鉢等の一括資料として良好な弥生土器のほか、埋土中から磨製石剣、杓子状木製品が出土した。土壙は、平面形が円形を基調とするものと、不定形のものがある。そのほとんどは廃棄土壙的性格のものと考えられるが、中には断面形が袋状を呈するものもあり、貯蔵穴としての機能を有していたと考えられるものがある。埋土中から多量の土器のほか、石包丁・石斧・石鏃等の石器が出土した。

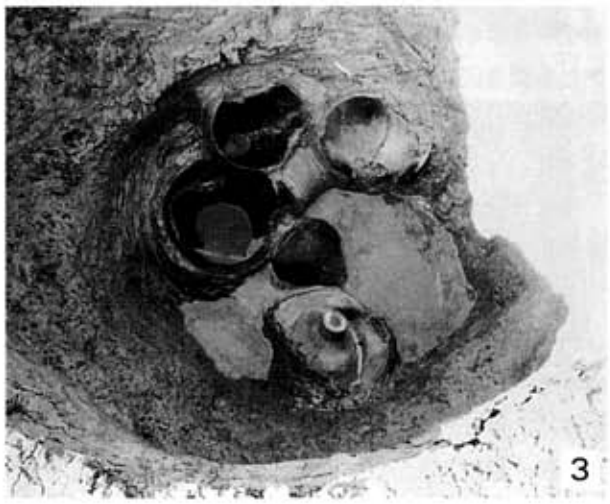
また、調査区の北西部分は埋没した自然地形の落ち込みになっており、堆積土中からは投棄された多量の牡蛎殻・弥生土器のほか、竪杵等の木製農具が出土した。

２区

土壙・溝・小穴等を確認した。土壙は平面形が不正形なものを確認した。埋土中から弥生土器が破片で出土した。溝はその全容・性格等は明確にできなかった。埋土中から甕・壷等の破片が出土した。

今回は調査範囲も狭く、掘立柱建物・住居等は確認しなかったが、検出した遺構・遺物から弥生時代中期に営まれた集落の一部であることがわかった。





1．測遺跡１区全景
2．測遺跡１区全景
3．SE19遺物出土状況

16．土生Ａ遺跡（略号：ＨＢＡ）

遺跡の所在地

小城郡三日月町大字久米字土生

調査主体者

三日月町教育委員会

調査期間

平成６年３月１日～３月28日

調査面積

400㎡

図38　土生Ａ遺跡位置図（1/25,000）

遺跡の概要

土生Ａ遺跡は天山山系から岩蔵谷を経て流下する祇園川の堆積作用により形成された扇状地の扇端が沖積部にもぐりこむ地域付近の標高約７ｍの水田部に立地する。佐賀平野西部で最大の弥生集落遺跡と推定される土生遺跡の南半部を占めており、調査は農業用水路拡幅工事により破壊される400㎡について実施した。なお、調査区は県道小城～牛津線をはさんで史跡土生遺跡として指定されている地区の西側に隣接し、東西に長い。

主な遺跡としては、土壙20基以上、掘立柱建物の柱穴と考えられるもの15基以上である。他に河川跡、湿地等を確認した。確認した土壙の中には底部に樹皮様の植物繊維を敷き詰めたものや、祭祀土壙と考えられるもの、貯蔵穴と考えられるものがある。調査区幅が狭いため土壙等はそのほとんどが全体規模の一部分を確認できたにすぎない。建物の柱穴と考えられるものの中には低地に立地する他地域の遺跡（牛津町：生立ヶ里遺跡、白石町：湯崎東遺跡）と同様に軟弱地盤に対する沈下防止策を施しており、例として直径約５㎝、長さ約60～70㎝の杭状木材７～８本を平行に並べ、さらに不定形の板状木材を敷き詰めた上に柱を立てたものがある。但し本調査区においては土生遺跡内で一般的に見られる柱根底部にくりこみをいれ、杵形横木を組み込むものや礎板を敷くタイプのものは見られなかった。

遺物として調査区のほぼ全域から弥生時代中期のものを中心とする土器が出土しており、その中には擬朝鮮系無文土器と呼ばれる甕破片（口縁部に粘土紐を巡らすもの）や牛角把手付き壺の把手部分も出土した。木製品としては、箆状木製品や建物部材と考えられる板材、直径約38㎝の柱根等があり、そのほか石製紡錘車、炭化米などが出土した。県道から西へ約120ｍ付近以西は青灰色の粘質土が基盤で、遺構密度も極端に低くなり、遺物量も減少する。このことから土生集落が立地していた微高地はこの付近から次第に落ち込んで行くようである。また、同時にこの低地部に水田遺構が存在する可能性も考えられる。

今回の調査は調査区の幅が狭く建物の柱穴の配列や検出できたそれぞれの遺構の規模等は確認できなかった。しかし土生遺跡の全容を考えるうえで貴重な資料が多く得られた。

1．土生A遺跡調査前全景
2．土生A遺跡全景（東から）
3．土生A遺跡 SK11・12・13付近（南から）
4．SK12（南から）
5．P.9.（東から）
6．SK17（北から）

17. 勇猛山遺跡（略号：ＹＭＺ）

遺跡の所在地

杵島郡北方町大字大渡

調査主体者

北方町教育委員会

調査期間

平成５年５月～12月

調査面積

800㎡

図39　勇猛山遺跡位置図（1/25,000）

遺跡の概要

勇猛山遺跡は、杵島山地北部に位置する勇猛山（標高258.5ｍ）の東斜面一帯に広がる遺跡である。この一帯は、古代より優れた文化を有する地域として夙に知られている。勇猛山北方の独立丘陵上の椛島山遺跡は、弥生時代中期から後期にかけての墓地が調査されており、前漢鏡・後漢鏡のほか装飾品などが出土している。また北西方に位置する東宮裾遺跡では石蓋甕棺墓から巴形銅器・星形銅器が出土している。古墳時代に入ると、この山系を中心に多くの古墳が造られるが、特に永池古墳群や平成５年度に発見された妻山４号墳など線彫絵画文をもつものは、多久市から有明町にまたがる地域にみられるもので独自な文化を形成している。『肥前風土記逸文』には杵島山に関する記事が見られる。曰く「杵島山　杵島郡、県の南二里に一孤山あり、坤（南西）より艮（北東）を指して三つの峰相連なる。これを名けて杵島という。坤なるを比古神といい、中なるを比売神といい、艮なるを御子神〈一の名は軍神という。動くときは則ち兵興る。〉という。」。この後に続けて有名な杵島曲や歌垣の記事が見える。このことはこの山(系)が古代より信仰の対象となっていたことを物語っている。中近世においては、杵島郡北辺を東西に走る山系南麓や杵島山系麓に見える多くの経塚や埋納銭発見地、中世に溯る寺院群の存在は、この地域の歴史を考えるうえで欠いてはならない視点であろう。

今回調査の対象となった地区は、勇猛寺・勇猛山古墳群として知られており、後者は昭和41年に佐賀県教育委員会によって発掘調査が行われ、５世紀後半から７世紀の古墳群の存在が明らかになっている。今回、この勇猛山北側から東側にかけての中腹に、平成３年大型台風被害に伴う風倒木処理用林道が計画されたため踏査を実施した所、予定地内に古墳の存在は認められなかったが、五輪塔などの石造物が埋没散乱している地点と一部石垣の存在が認められたため発掘調査を行った。

対象地区は調査時点で、竹林、雑木林及び近世墓地、勇猛寺参道となっていたが、立木竹の伐採清掃を行った所、地区内に６つの平地が認められ、この平地は地区外へ連続して形成され

ていることが判明した。便宜上北から第１～６平地として調査を行った。(図40)

第１平地はもっとも石造物の散布が認められた地区であったが、埋没土壌を除去した所、全面に石の集積が認められた(図版17－２)。この礫群の中には多量の五輪塔や少量の宝篋印塔も含まれている。これらの石造物は当初それぞれの場所に立っていたものが崩壊したものと考えたが、明らかに後世に移動した石を除去していくと、これらの五輪塔のほとんどが集石に組み込まれていることがわかり、当初これらの石造物を用いた墓地が、後世に一旦破壊され、新たに集石による墓地が形成され、その集石に再利用されていることがわかった。これらの集石はかなり雑然と広がっているため明瞭ではないが、現地による認識で、方形を基調とする約30基の積石塚に判別できた。これらの積石群は互いに重なり合っており、また現況の平地形成によって破壊されていると認められるものもあるため、最終的な数値は求めがたい。方形を基調とする積石塚はその方向性及び切り合いからおおよそ２～３期に区分できる。また第１平地の東北方で階段状の石列３条が認められたが、これも現況平地造成によって大部分が破壊を受けており全容は知りがたい。こうした積石形成以前のものと思われる土壙墓も数基確認できた。これらの墓地の埋葬主体は一部土壙によるものが認められるが、出土する火葬骨のほとんどが集石の上下に拡散した状況で出土すること、および積石下に明確な埋葬遺構が認められないこと、蔵骨器の出土がほとんどないことなどから、ほとんどのものが散骨によるものと判断している。（１基のみ、残存した土器底部に火葬骨が集積した状況で確認できたものがあった。)出土した骨はすべて火葬によるものと思われる。

第２平地では、現況で西側斜面に沿って、礫・石造物の集積が認められた。この集積は第２平地を畑地に利用する際寄せられたものと思われるが、その集石下より石積列が確認できた。斜面下場に形成された石列と考えられる。第２平地は、当初南側に谷が存在したものを（埋土より黒曜石片出土)、中世初期の段階でやや傾斜をもつ二つの平地に造成し（瓦器椀出土)、その段階で建物が建てられていたものと思われ(小穴群を確認)、その後再整地が行われて現況の平地に変わったものと思われる。

第３・４平地でもそれぞれ整地工事が認められた。低い部分に向かって瓦器椀が多数出土した。これは、やや傾斜する地形であった中世初頭になんらかの居住が行われていたことを示すが、その居住地区は前述した後世の造成・整地工事により壊滅した可能性もある。また中世前期頃のものと思われる木炭窯１基も認められた。また整地後のものと思われる組合せ式石棺状の遺構１基も確認できた。当初古墳残欠かと思われたが、掘り方より瓦器椀片が出土したため、中世以降の遺構と判明した。内部に骨等の遺物は確認できなかった。第４平地の東側下段には延宝８(1680)年銘の板碑状墓石をもつ一石夫婦墓が存在する。

第５・６平地は、近世の墓地として造成されたものである。記年銘のある墓石をもつもの８基、小礫の立石によるもの２基で、墓碑銘によりこの墓地が天明５(1788)年から萬延２(1961)

年の建立にかかるものと考えられるが、隣接する地区外の同面平地および別の平地に形成された近世墓地群を含めて考える必要があり、時期等については調査資料の整理を行って後結論を出したい。これらの墓地は形態的には埋葬を前提とした墓石形式をとるが、明確な下部構造は確認できず、拝み墓である可能性もある。また墓石に用いられた種字は梵字の「ア」(日天子)が多いという特徴をもつ。

石垣は第3平地と第4平地の境、及び第3平地と東側地区外下段平地境に確認できた。また第3平地と西側地区外上段平地境には自然石を利用したものと思われる石垣状石列が認められた。これらの石垣には宝篋印塔笠部などが利用されており、近世期に築造されたものと思われる。

参道は、幅約3m、深さ約1～2mの窪地をなすが、近年まで生活道路として利用されていたらしい。第5・6平地とこの参道に沿って別の窪地があり、参道そのものも移動したことが考えられる。

前述したように、今回調査を行った平地群は調査地区外へと展開しているが、これらの平地はそれぞれ通路状遺構で有機的に結び付いており、地区内でも第1平地の東に沿った帯状平地は第2平地から第1平地へ移動する通路である可能性がある。また第4平地の参道沿い等に土塁状遺構も認められる。

調査による出土遺物としては、第1・2平地を中心に五輪塔等の部材が約350点得られている。1基4部材として単純に計算すれば87基の石塔の存在を示す。これらの石塔は形式から見て14世紀～17世紀を中心とするものと思われるが、この期間において盛衰が認められるようである。そのほか、瓦器・輸入磁器・近世国産陶磁器が出土した。

勇猛寺は、古文書によると建治3(1277)年12月20日付地頭領家田地屋敷注文案に「ゆミやうし三昧田」や「ゆミやうしにしたにのその(勇猛寺西谷の園か)」がみえ(橘中村家文書)、建武2(1335)年8月3日付長嶋荘下村本物返田畠注文には「勇猛寺坊地六坊同田地五反二丈中」(同文書)と見え、坊地の存在が示されている。文明14(1482)年12月3日付田地屋敷坪付には「ゆミやうし坊地、廿一坊、一丁とうゆうめん(灯油免か)」(同文書)とみえ少なくとも21の坊地の存在が確認できる。また同寺には線彫倶利加羅不動像をもつ仁安3(1168)年銘石塔があるが、これとは別に客人神白山権現社があり、白山信仰の全国的な広がりの時期と照らし合わせるとこの時期に当寺の信仰形態の画期が認められる可能性がある。山項には地元で「百万遍無明の塚」と呼ばれる石塚があり、一部破壊をうけているもののこれを石磐または道場に擬すことができるとすれば、現在の勇猛寺は山項を上宮とする、東方に対して形成された中宮と位置付けることができ、この中宮を中心に坊が東斜面に展開している構成が考えられる。勇猛寺境内には霊水と伝えられる湧き水があり、水源信仰も原初形態として存在した可能性もある。また『肥前風土記逸文』の記事も杵島山に対する信仰形態を示すものとして特記されていいだ

ろう。

現在、勇猛寺は真言宗大覚寺派で月輪山と号し、白石町に存在する日輪山安福寺と南北に相対峙して、金剛・退蔵両界の理知不二の内と伝える。

今回確認できた遺構、遺物はこうした杵島山信仰の展開や歴史的背景の中でとらえるべきであるが、この勇猛山に関する歴史的背景が十分解明されていないこと、今回の調査が遺跡の一部でしかないことから、遺跡の位置付けを明確にすることは困難である。しかし、勇猛山東斜面に当寺関連の遺構が広がっていることを明確にできたことは大きな意義があったであろう。また、一部ではあるが、遺構の変遷や墓地形式の変遷、「坊」の発生時期等、勇猛寺の歴史的変遷、また杵島山の古代から現在に至る人間精神生活における位置付け、延いては肥前山岳仏教、肥前宗教史を考えるうえで多くの資料を得られたことも重要な意義が認められるように思う。

なお、今回の概要報告に当たっては紙数の関係で一々記載できなかったが、静岡県浅羽町郷土資料館山本義孝氏、厳木町教育委員会志佐惲彦氏、佐賀県教育庁文化課小宮睦之氏、佐賀市教育委員会前田達男氏ほかのご教示、ご協力に負うところが大きい。記して謝したい。

1．勇猛山遺跡遠景（右より$\frac{1}{4}$位の地点）

2．第１平地清掃後（南から）

3．第１平地上層除去後（南から）

4．第１平地北側石列（南から）

1．第１平地仮38号墓（東から）

2．第２平地西側石積み（東から）

3．第２平地小穴群

4．第３・４平地境石垣（北から）

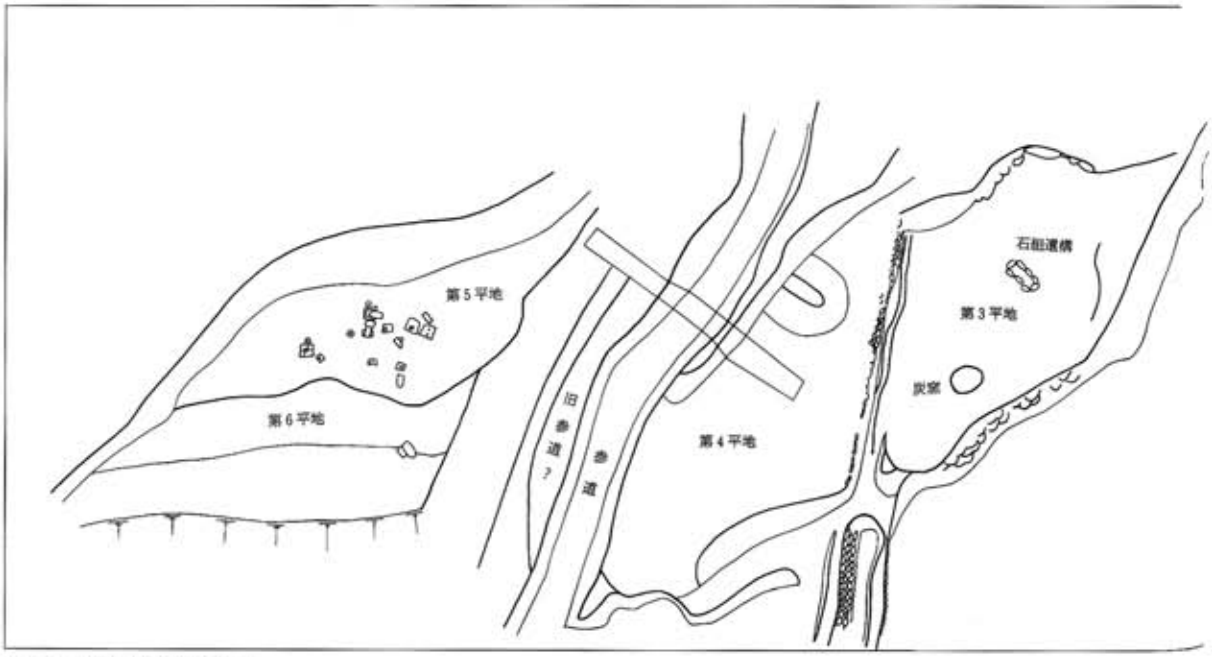


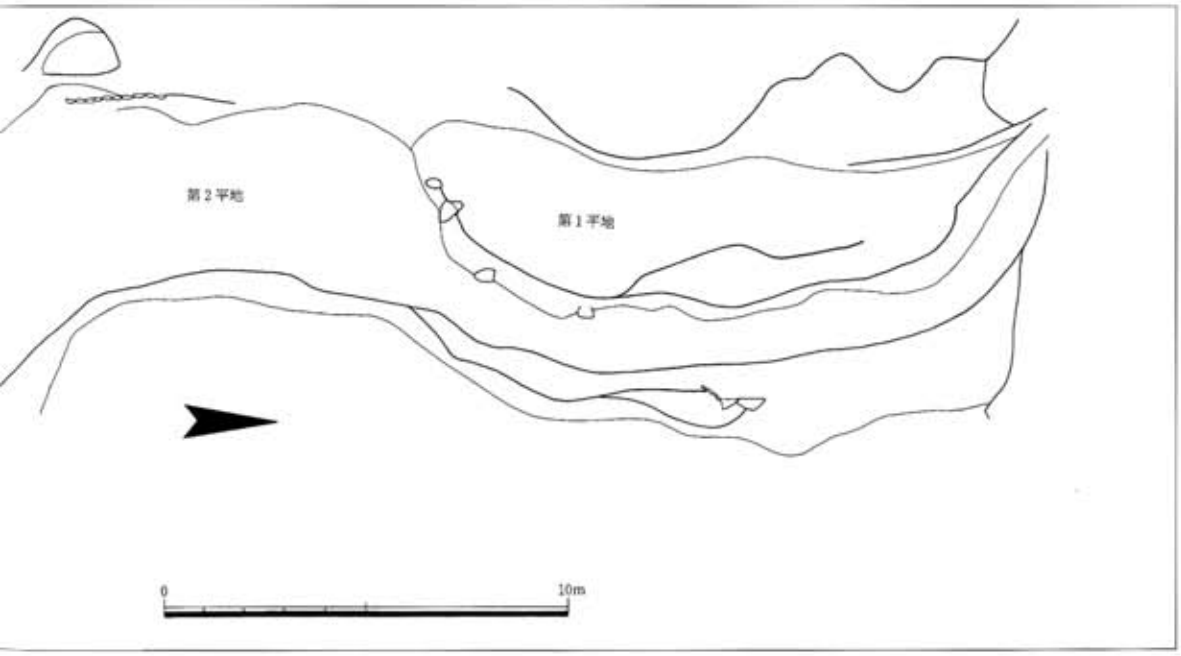
図40　勇猛山遺跡平面図

5．第３平地全景（南から）

6．第３平地石組遺構

7．参道（右）及び推定旧参道（左）

8．第５平地全景（北西から）



18．龍王峠古墳群（略号：ＲＯＴ）

遺跡の所在地

杵島郡有明町大字深浦

調査主体者

有明町教育委員会

調査期間

平成５年10月～11月

調査面積

740㎡

図41　龍王峠古墳群位置図（１/25,000）

遺跡の概要

杵島山系の山頂のひとつである白岩山から南東方向に細長く延びる丘陵の先端部に位置する。谷を挟んで北側の丘陵には県史跡である龍王崎古墳群[1]がある。本古墳群は丘陵の緩斜面に築造され、同一丘陵の頂部には複室両袖型横穴式石室を内部主体とする室島古墳がある。本古墳群の一帯は墓地及び宅地として開発され、数基の古墳が消滅したと聞く。現況で明らかに古墳と認定できるのは調査対象となった３基のみである。

今回の調査は農道の拡幅工事に伴うもので、開発対象地内にある３基の古墳の内部主体を中心として調査を行った。３基の古墳は主軸を同じくして約15ｍの等間隔で並び、南東方向に開口する横穴式石室である。西よりＳＴ01、ＳＴ02、ＳＴ03とした。(図19参照)

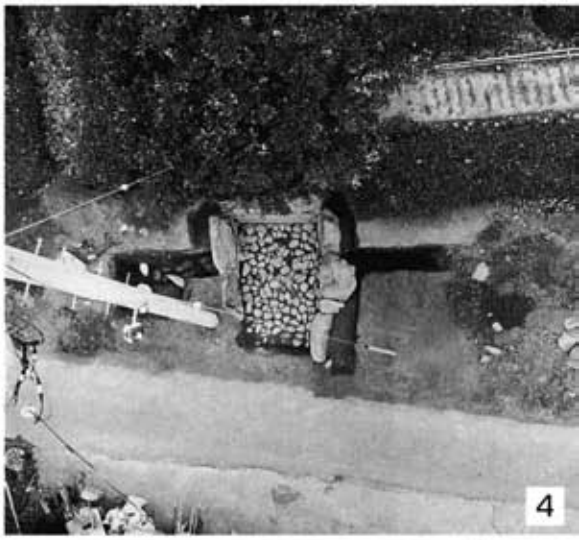
ＳＴ01は左側壁を削平され、奥壁と右側壁腰石が遺存するのみで石室型式は不明であるが裾部構造は持たないと思われる。奥壁は方形の大形偏平石材１石を立て、側壁も同様の大形石材２石を配する。奥壁、側壁の上端高は同じで約1.8ｍを測る。床面には径20～30㎝の転石を敷く。側壁からハの字形に開く石列があり、前庭側壁と思われる。全長約3.4ｍ、玄室幅は1.7ｍを測る。

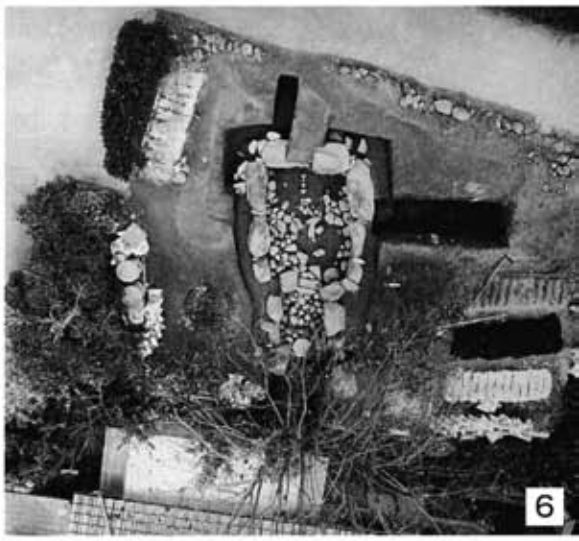
ＳＴ02は玄門から羨道にかけては農道により破壊され玄室のみ遺存する。石室型式は特定できないが両袖型であると推定される。玄室平面形は長方形で、奥壁は１石からなり、両袖壁は方形石材を腰石として配する。床には転石を敷き詰める。

ＳＴ03は単室両袖型で全長約５ｍ、玄室長2.7ｍ、玄室幅約２ｍを測る。腰石のみ遺存しＳＴ01、ＳＴ02に比べ石材は小形である。玄室から羨道床面には転石を敷く。

出土遺物はＳＴ02から耳環２、ＳＴ03から耳環２、須恵器が出土した。ＳＴ03出土の須恵器は７世紀代の所産で追葬時のものであろう。この他ＳＴ02・ＳＴ03から五輪塔、宝篋印塔が出土しており、中世段階で石室が再利用されたと考えられる。

１）木下之治（1968）；龍王崎古墳群，佐賀県教育委員会．
　木下之治（1975）；龍王崎古墳群第六号墳，新郷土311．





1．遺跡全景（西から）
2．遺跡全景（西から）真上から
3．ST01古墳（真上から）
4．ST02古墳（真上から）
5．SY03古墳（北西から）
6．ST03古墳（真上から）

19．梨川内村前遺跡（略号：ＭＵＭ）

遺跡の所在地

唐津市梨川内字村前

調査主体者

唐津市教育委員会

調査期間

平成５年６月～９月

調査面積

1,500㎡

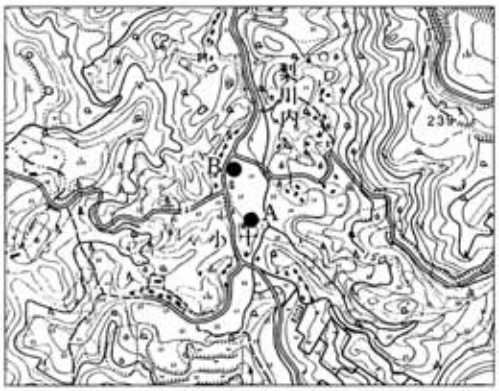


図42　梨川内村前遺跡位置図（1/25,000）

遺跡の概要

梨川内村前遺跡は、佐賀県の北西部、上場台地と称される第３紀世花崗岩を基盤とし、数期に渡る噴出の結果形成された熔岩台地上に位置している。梨川内村前遺跡はこの東松浦熔岩台地（標高150～200ｍ）の南部の開析谷奥に延び出す丘陵上に立地する。遺跡の周辺は、松浦川と有浦川の分水嶺の谷が入り込んでいて、南北縁の台地上に向かう交通の要路となっている。

遺跡は、有浦川の上流域、東松浦半島の分水嶺から西方に流れ出る枝状河川が浸食した小盆地の連なる東南端地区で、標高100～120ｍに位置する。開析谷は上部からの玄武岩風化層、花崗岩風化層の混入によって成立した状況を示している。こうした枝状開析谷の湧水点周辺には、分水嶺の南側では縄文時代晩期の遺跡、高峰遺跡等が点在し、小河川に沿っては西ノ吹遺跡、丸尾遺跡等、弥生～古墳時代の遺跡も知られるようになった。梨川内村前遺跡の約500ｍ南には小十古窯跡が所在する。

梨川内村前遺跡は南北２地区に分かれ、それぞれＡ地区、Ｂ地区とした。

Ａ地区では、幅約30cm、深さ（残存深）約25cmで東西に延びる溝が１条、土壙状遺構９基を確認した。旧石器時代の遺物は、溝遺構とその西側の包含層から細石刃が数点出土し、縄文時代の遺物は石鏃、スクレイパー等が出土した。また、弥生時代以降の土器や古唐津（小十）等の陶片等が出土した。

Ｂ地区では、青灰色粘土層から縄文時代晩期のドングリ貯蔵穴を９基検出した。ドングリの保存状態は良好で、ドングリのほかにも縄文晩期の土器、長軸４cm強の石鏃が出土した。このＢ地区の青灰色粘土は明治期頃まで瓦用粘土採土が行われたようで、数回に渡る採土痕が検出できた。また表土掘削の時に「菊池土産」の墨跡がある木片が出土した。

本遺跡からは、旧石器時代から近世に至る遺物が出土した。梨川内地区の水田で深田と言われていたところは、軟弱な地盤の粘土層であり今でも豊富な湧水があり、縄文時代においてもドングリ貯蔵穴としては最適地であったようである。ドングリ貯蔵穴は、高峰遺跡に継ぐ発見となり、今回の調査区は集落遺構に近接する位置に当たることが推定できる。

梨川内村前遺跡A地区全景（西より）

同B地区ドングリ貯蔵穴

同B地区貯蔵穴群（北より）

20．枝去木山中遺跡

遺跡の所在地

唐津市枝去木

調査主体者

唐津市教育委員会

調査期間

平成５年９月27日～11月29日

調査面積

104㎡（対象面積625㎡）

図43　枝去木山中遺跡位置図（１/25,000）

遺跡の概要

枝去木山中遺跡は、東北西を低丘陵に挟まれた小谷が入り込んだ奥の南東向き緩斜面の標高135～140ｍの所に位置する。この小枝状谷の南東50ｍ地点には良好な湧水点があり、馬部地区の湿地帯を貫通する浦川の源流の一脈となっている。今回の調査区の東側では昭和58年に調査が行われており、３群に分けられる石器集中分布域が確認された。また分布域が汎日本的広がりをもつ局部磨製石器が出土している。

調査は道路を挟んで東側を第１地区、西側を第２地区として実施した。調査範囲が道路に沿って細長く延びているため、掘り下げると道路崩壊の恐れのある箇所を調査対象外としたため調査面積が対象面積に比べてかなり狭くなった。その中で比較的広い面積が確保できた第１地区を主眼に調査を行った。調査は耕作土を除くとすぐに旧石器時代の面と考えられる包含層を検出した。これより数cmずつ移植ゴテで、礫が混入する最下層のレベルまで掘り下げた。第１地区北側から高い密度で旧石器時代の遺物である黒曜石剥片、ナイフ形石器、台形石器等を検出した。また調査区南側では集石状に礫を検出した。この範囲はかなり丁寧に掘り下げたが人為的なものであることは分かったが、調査区外に広がるため性格の断定には至らなかった。また中央付近では時期不明の焼土壙を検出した。第２地区には確認のため４カ所のトレンチを入れたが盛土厚が高くなったため危険防止のため途中で調査を断念した。

今回の調査によって、第１地区より高い密度で石器分布が確かめられた。そして前回の調査で確認された石器の集中分布域が今回の調査区まで拡大することが確認できた。また集石状礫群については性格は不明であるが、石器集中分布域からある程度距離をおいて立地していることは、この遺構の性格を示す何らかの意味があろうと考えられる。

枝去木山中遺跡調査状況

集石状礫群検出状況

調査区北側石器群検出状況

V．総　括

平成５年度に実施した農業基盤整備事業に係る文化財調査のうち、確認調査については佐賀東部地区で鳥栖市・中原町・上峰町・千代田町の１市３町の計７地区、佐賀西部地区では佐賀市・川副町・多久市・小城町・三日月町・富士町の２市４町の計16地区、佐賀南部地区で武雄市・有明町の１市１町の計２地区、佐賀北部地区で西有田町・相知町・浜玉町の３町の計３地区、佐賀上場地区で玄海町・肥前町・呼子町の３町の計４地区において実施した。対象となった事業は県営圃場整備事業や県営畑地帯総合土地改良事業等がピークを過ぎ、それに変わって中山間地域農村活性化総合整備事業など農村基盤整備事業が増加する傾向にある。また当該年度は確認調査の対象とならなかったが、伊万里地区の国営開拓事業や林道開設事業の協議件数が増加しつつある。筑後川下流用水事業については佐賀市及び三田川町について確認調査を実施した。

発掘調査（本調査）については、佐賀東部地区は鳥栖市・中原町・上峰町・千代田町の10遺跡、佐賀西部地区は佐賀市・三日月町の５遺跡、佐賀南部地区は北方町・有明町の２遺跡、佐賀上場地区は唐津市の２遺跡について実施した。

以下、確認調査については地区ごとに、発掘調査については時代ごとにまとめる。

◎文化財確認調査

(1)　佐賀東部地区

鳥栖市の鳥栖北部地区・鳥栖西部地区、中原町の中原北部地区・中原南部地区、上峰町の上峰北部地区、千代田町の佐賀東部地区千代田工区で遺跡の存在が確認できた。

鳥栖北部地区は、筑紫氏の居城である勝尾城等の城下町域にあたる地区で、確認調査の結果、中世の遺構・遺物を確認した。この城下町地区において四阿屋神社は古くから知られた古社であり、この神社に近接した地区で発見された遺構はこうした歴史的背景の中で考えても興味がもたれる。なお、この遺跡群は従来周知されていなかった遺跡で、新たに四阿屋遺跡として登録した。鳥栖西部地区は、平成４年度に確認調査を行った地区であるが、上物の状況等から確認調査が不十分であった地区について確認調査を実施し、遺跡の範囲を確定することができた。なお、確認できた遺跡は古墳時代・中世の集落で、一部古墳が存在する可能性を示す知見が得られている。中原北部地区では古墳時代を中心とする集落の存在を推定させる遺構・遺物が確認できた（野副遺跡）。中原南部地区の西寒水地区では弥生時代中期を中心とする集落がまとまって確認できた。寒水地区の段丘面から沖積部に移行する地点での集落で、遺跡の立地について興味ある資料を得ることができた(西寒水七本柳遺跡)。上峰北部地区では平成４年度に発掘調査を実施し、奈良時代を中心とする集落の調査を終了後、地山掘削中に数万年前のものと

思われる自然遺物層が確認され、九州旧石器時代の自然環境を復元するうえで重要な資料となる可能性があり、上峰町が実施した発掘調査に対し、その保存等に関する調整を行った（八藤遺跡）。千代田工区では、中近世の環濠集落の一部を確認した。この集落跡は現犬童本村集落の前身をなすものと考えられ、当該年度に発掘調査を実施した隣接地区の調査所見と併せて、集落変遷を考えるうえで貴重な資料になるものと思われる（本村五本柳遺跡）。

(2) 佐賀西部地区

佐賀市の久保泉西部地区・久保泉南部地区・金立北部地区・金立南部地区・巨勢地区、三日月町石木地区、多久市西ノ谷地区で遺跡の存在が確認できた。久保泉西部地区では１カ所のトレンチで土壙・小穴の存在が確認されたのみで遺跡の性格等は不明確である（藤附遺跡）。久保泉南部地区では、弥生時代中期、古墳時代、平安時代後期を中心とする集落の存在が確認された。遺跡は微谷状地を挟んで両岸にまとまって確認され、また遺物の量も多い（下和泉一本椎遺跡）。金立北部地区では古墳時代～中世の集落が確認できた。確認地点は数箇所に分かれるものの全体で10,000㎡に及ぶ遺跡である（若宮原遺跡）。金立南部地区では古代～中世にわたる集落が確認できた（西千布遺跡・友貞遺跡）。巨勢地区は従来周知の埋蔵文化財包蔵地は存在しなかったが、調査によって弥生時代・中世の集落が確認された意義は大きい（修理田遺跡）。多久市西ノ谷地区には従来周知の埋蔵文化財包蔵地は知られていなかったが、調査の結果、縄文時代晩期の遺物、中世の集落が確認できている（西ノ谷遺跡）。三日月町石木地区の調査は史跡土生遺跡に隣接する地区にあたることから調査の内容が注目されたが、推定通り弥生時代の遺跡の広がりが確認でき、また西の範囲を知ることができた。なお、この工事は平成５年度工事地区内であったため、同年度中に発掘調査も行っている（土生Ａ遺跡）。なお、遺跡ではないが川副町川副北部地区で水路断面に確認できた貝層は有明海沿岸地域に形成された貝塚の立地等を考えるうえで興味深い。

(3) 佐賀南部地区

有明町の深浦地区で遺跡の存在が確認できた。確認できた遺構は古墳３基である（龍王峠古墳群）。横穴式石室を主体とする後期古墳と思われるが、かなり破壊を受けている。

(4) 佐賀北部地区

当該地区では遺跡の存在は確認できなかったが、浜玉町浜崎南部地区で土地改良事業以前に遺跡が存在した可能性を示す所見が得られた。

(5) 佐賀上場地区

当該地区で遺跡の存在は確認できなかったが、玄海町大薗地区・肥前町中浦地区での計画地内の確認調査によって流れ込みによると思われる石器・剥片等の出土状況からその付近に遺跡が存在する可能性を考える資料を得ることができた。

(6) 筑後川下流用水事業地区

三田川町三田川中部地区は従来周知された埋蔵文化財包蔵地ではなかったが、弥生時代生活遺構に伴うものと思われる溝が確認できた（田手二本松遺跡）。

◎文化財発掘調査

(1) 旧石器時代

わが日本列島において、人類の生活がいつ頃から始まったのか、まだ定説と言われる数字が確定してはいないものの、数十万年前に逆上ることはほぼ間違いがないだろう。宮城県築館町高森遺跡出土の石器は約50万年前のものと言われており、同町上高森遺跡のそれは40万年前と言われている。つい最近では山形県尾花沢市袖原遺跡で30万年前の石器群が確認されたという報道に接した。九州でも宮崎県川南町後牟田遺跡や福岡県北九州市辻田遺跡で３万８千年―４万年前を逆上る石器や焼石の出土が報告されており、これらが７～９万年前まで逆上る可能性をもつことを考え合わせると、従来考えられていた以上に古くから旧石器時代人の足跡が九州の地に残されていることが判明しつつある。こうした“人類”の文化の復元作業にとって、彼らを取り巻いていた生活環境の復元も重要な作業であることは言うまでもない。上峰町八藤遺跡で見つかった阿蘇火砕流によってなぎ倒された森林や生物化石は、火山列島である日本の姿を今に伝えるのであるが、そういった現象面だけでなく、約９万年前頃の旧石器時代人を取り巻く自然環境を知るうえでまたとない資料を提供できたものと信じる。八藤遺跡がもたらした評価はこれに止まらない。この「太古木」報道以後、九州全域で同種の報道に接する機会が多くなった。県内でも、八藤遺跡発見後まもなく、鎮西町打上で上場台地に玄武岩台地が形成されつつある時期の巨木を伴う生物化石群が発見され、ほどなく嬉野町、富士町でも巨木の出土が伝えられた。これらの報道は、おそらくそれ以前には全く注意されずに壊滅していったものが多かったことに思い至らされるのである。

北部九州における旧石器時代の拠点のひとつである上場台地で、今年も当該期の調査が行われた。枝去木山中遺跡は昭和58年に行われた調査地点の隣接地について調査を行ったが、良好な包含層、遺物集中が確認できた。同じく上場台地の梨川内村前遺跡でも細石刃を含む包含層が確認できた。

(2) 縄文時代

十数年前まで、限られた地域において、遺物出土のみの報告が多かった佐賀平野において、集石などの遺構を伴った調査例が頻繁に聞かれるようになってきた。これは偶然の結果というだけではなく、遺構としてとらえようという問題意識がなせる部分もあるように感ぜられる。縄文時代の遺構は、農業基盤整備事業に伴う２×２ｍのまばらなトレンチによる機械的な確認調査方法ではその把握は非常に困難と思われる。しかしその把握を可能にするのは問題意識の

持ち様であろう。

今年度の調査で注目できるのは唐津市梨川内村前遺跡で確認できたドングリ貯蔵穴9基で、本文で指摘されているように、同市高峰遺跡の例も含めドングリ貯蔵穴の立地に関し興味あるデータが得られている。本例は晩期のものであるが、西有田町坂ノ下遺跡の中期末貯蔵穴の立地と共通する部分もあると思われ、系譜論としてもおもしろい。遺物としても長軸4cm強の石鏃・土器が出土している。

佐賀平野の方でも、牛原前田遺跡で早期（曽畑式）の集石、孫左エ門塚遺跡では早期末の土壙が確認されている。このほか、八藤遺跡で縄文時代のものである可能性がある土壙、山田古墳群で中期～後期土器、立石遺跡で晩期土器の出土をみており、佐賀市野田遺跡でも縄文土器の出土が報告されている。

(3) 弥生時代

佐賀平野においても、弥生時代は歴史的に“画期的”とよばれてよい時代である。弥生時代より前の時代に、山間・山麓部や洪積台地上に展開していた人間の生活場所が沖積平野部まで展開し始め、やがて現代までつながる農村集落としての基礎が形成される時代にあたるからである。佐賀平野においてもっとも初期に弥生時代集落として史跡指定された「土生遺跡」の隣接地が調査された意味は大きい。佐賀平野西部における拠点集落と目されてきた土生遺跡もその具体的様相については不明なことが多かった。しかし今回の調査を初めとするここ23年の調査で、改めてこの遺跡が持つ重要性に対する再認識が迫られるようになった。また整理作業が進むにつれより具体的な集落像が明らかにされるであろう。佐賀市の渕遺跡（中期）も従来知られた遺跡ではなかったが、佐賀平野内陸部平坦低地の農業集落の形成を考えるうえで、地域的空白部を埋める資料となるだろう。平野東部の洪積台地縁辺部における西寒水七本柳遺跡・孫左エ門塚遺跡・石井一本松遺跡で弥生時代中期を中心とする集落遺構に関する資料の蓄積を見た。この地域は洪積台地上に当該期の中心集落と考えられる原古賀遺跡群・町南遺跡を控え、また今回調査地域の東部の北茂安町北部地区で多数確認されている青銅製品群の所持母体を考えるうえでも資料の蓄積が望まれているのである。このほか、佐賀市友貞遺跡でも数面の文化層最下層で中期の遺構・遺物の出土をみているほか、鳥栖市牛原前田遺跡で前期末～中期初頭の遺物の出土が報告されている。

(4) 古墳時代

今回特筆できる当該期の集落としては、古墳時代後期～奈良時代にかけての集落が確認できた鳥栖市牛原前田遺跡の成果であろう。調査対象地区が遺跡全体規模から考えれば一部にしか過ぎないにもかかわらず65軒以上の竪穴住居のほか、掘立柱建物等が調査されており、平成3年度からの牛原前田遺跡などを同一地域に展開する集落と考えれば大規模集落という名辞にふさわしい集落であろう。また同時に隣接した地域で古墳の調査も行われており、集落構造を考

える上で重要な資料となるものであろうし、一般に古墳時代後期としてまとめられこの時期の集落が古代前期においてどのような分布をたどるのかを考えるうえでも非常に興味がもたれるのである。このことは、中原町孫左エ門塚遺跡や石井一本松遺跡で確認できた前期及び6世紀後半から8世紀の集落についても同様である。いまやこうした調査結果は、歴史的背景も含めて考える必要があるし、それが可能な資料の蓄積が徐々にではあるが行われていると言えよう。また西寒水四本柳遺跡の7世紀前半の水辺祭祀の可能性の指摘は、全国的にも調査例が増えつつある水辺における先人の祭祀活動に関する知見に新たな資料を加えることができた。

有明町竜王崎付近は同名古墳群の調査以来、識者の興味を集めてきた地域である。報文にもあるように、この地域の古墳群の多くは各種開発により十分な調査が行われないまま壊滅していったものと思われる。今回3基の古墳が調査対象となったが、これらもかなり改変を受けていたものである。しかしそうではあるにせよ、今回の調査で得られた資料は、当地域の古墳文化を考えるうえで重要なものであることに変わりはない。

(5) 古代（奈良・平安時代）

前項で上げた牛原前田遺跡、孫左エ門塚遺跡、石井一本松遺跡のほかに、立石遺跡、山田古墳群、若宮八幡神社遺跡、八藤遺跡、友貞遺跡、大西屋敷遺跡などで調査が行われている。このうちいくつかは平安時代後期から鎌倉時代へと連続する遺跡である。

立石遺跡は、沼川両岸における扇状地地区の農業基盤整備事業に伴う一連の調査の中でとらえられる。平成3年度の沼川左岸の惣楽遺跡、4年度の立石遺跡でもこの9～10世紀の集落が確認されており、遺構の粗密はあるものの比較的広範囲に集落が広がることが考えられる。八藤遺跡は平成元年度から5カ年に及ぶ同丘陵上の調査が終了した。この八藤遺跡の調査では奈良～平安時代の掘立柱建物群、道路、火葬墓などが見つかっている。幅6mの道路痕跡は堤土塁と呼ばれるこれまで用途について議論があった施設の上に直結するもので、佐賀平野の古代交通路研究に新たな問題を提議した。この道路痕跡は中原町若宮八幡神社遺跡まで3km以上に及ぶ直線道をなす可能性もあり、注目できる遺構である。もしこの道が古代佐賀平野の基本線をなすものであるならば、この道に隣接するこの八藤遺跡の建物群は律令期の集落形態を考える重要な資料となろう。牛原前田遺跡ではまとまったものではないにしろ、陶製四耳壺、11世紀の木棺墓など注目できる遺物・遺構が確認されており、今後の資料整理が待たれる。

(6) 中世・近世（鎌倉以降）

この時期の調査は、牛原前田遺跡、若宮八幡神社遺跡、西寒水四本柳遺跡、西寒水七本柳遺跡、本村五本柳遺跡、野田遺跡、友貞遺跡、大西屋敷遺跡、勇猛山遺跡で行われた。

牛原前田遺跡は、中世筑紫氏の拠点地域である勝尾城下の谷口を阨する地域にあたる。中世集落研究において、こうした城下集落と一般集落の関係について詳細な調査を行う重要性が特に近年指摘されるようになってきた。鳥栖市においては、別に勝尾城下の調査も平行して行わ

れており、今回の調査なども重要な資料となってくるだろう。あわせて墓地の存在が確認できた意味も大きい。西寒水四本柳、西寒水七本柳遺跡で確認された鎌倉時代の集落は、溝を伴う集落として注目できる。現在佐賀平野の各地において中世集落の調査が行われるようになり、集落構造や歴史的背景の中でその位置を探る試みも行われるようになってきた。後者で確認された鉄滓、焼石を伴う土壙の性格も興味がもたれるが、佐賀平野東部地域においてこうした中世集落に関する資料が増加してきていることは純粋に考古学の問題としてとらえる限り喜ばしい。佐賀平野低平地の中世集落を考えるうえで環濠集落の問題は避けては通れぬ問題である。今年度も本村五本柳遺跡においてこの資料を得ることができた。環濠集落に関する資料の増加とともに今後こうした集落を要請した社会背景や集落の展開過程の中における環濠集落の位置付け、環濠集落そのものの構築構造や構築方法・構造変遷など残された問題も大きい。こうした現在の形態として環濠集落としてとらえられるものの調査のほかに、古代末から中世前期の集落の調査はこうした佐賀平野低平地の集落について考察する際、非常に重要な資料となってきている。いわゆるクリークとよばれる巨大な溝渠が形成されるようになるまでの集落変遷についての考察においてこうした集落の調査資料は欠かせないのである。その意味でも、大西屋敷遺跡の調査は興味ある資料である。友貞遺跡の調査は、こうした中世集落の調査において文献との資料比較が可能であることで重要な意義が認められる。今回は残念ながら古文書に示される年代と密接な整合性は認められなかったと報告されているが、そうしたことが意味することなど、新たな問題提議が行われたと言っていいだろう。勇猛山遺跡の調査意義については本文の中でやや触れたつもりである。県内で中世山岳寺院の調査は、伊万里市山ン寺遺跡、東脊振村霊仙寺跡などで一部行われたことがある。また山岳仏教に関する調査は脊振山頂経塚群の調査が知られている。近年になってからは仏教関係の遺物・遺構の調査例がやや聞かれるようになった。神埼町城原三本谷南遺跡では卒塔婆群の出土が報告されているし、久保田町後藤館跡ではおそらく中世西持院関係の僧の墓地と考えられる五鈷杵を副葬した墓地が確認できた。また各地の調査報告書で五輪塔など石造物が報告されることも多くなった。しかし中近世墓地そのものを調査対象とする意識がまだそれほど高まっていない現状はあるように思える。勇猛山遺跡調査担当者として、これらの資料を整理する調査員自身に課せられた課題の大きさに身竦む思いも感じている。

なお、今回の調査では時期の特定はできなかったが、山田古墳群における石敷遺構の確認は今後類例の増加に待つことになると思うが、興味深い資料である。

報告書抄録

ふりがな	さがけんのうぎょうきばんせいびじぎょうにかかるぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書13
シリーズ名	佐賀県文化財調査報告書
シリーズ番号	第124集
編著者名	徳富　則久
編集機関	佐賀県教育委員会
所在地	〒840　佐賀県佐賀市城内一丁目1-59　TEL.0942(24)2111
発行年月日	1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東緯 °′″	調査期間	調査対象面積 (確認調査) ha	調査原因
佐賀県 農業基盤 整備事業 地区内 遺跡	佐賀県内					19930401 ～ 19940331	486.8	農林業基盤 整備事業等

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
佐賀県 農業基盤 整備事業 地区内 遺跡	遺跡環境 集落 古墳 ほか	旧石器時代 ～ 近世	集落遺構 古墳 自然林	石器・土器 陶磁器等	確認調査報告のほかに平成5年度に農業基盤整備事業に伴い実施された20遺跡の調査概要を所載

佐賀県文化財調査報告書第124集

佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書13

平成７年３月31日発行

編集・発行　佐賀県教育委員会
佐賀市城内一丁目１-59
ＴＥＬ 0952 (24) 2111
印　　刷　西部印刷企画株式会社
佐賀市鍋島町八戸1323-4
ＴＥＬ 0952 (24) 3569